

## 【御言】

### 総序

#### 人間の幸福

- ・人間は、何人といえども、不幸を退けて幸福を追い求め、それを得ようともがいています。
- ・それでは、幸福はいかにしたら得られるのでしょうか。
- ・幸福は、自己の欲望が満たされるとき、感じるのです。

## 【感想】

私たちは幸福を求めています。誰しもが幸福になろうと様々な努力を重ねているのが人生なのではないでしょうか。ですが、多くの人は幸福になりたいと願いつつ、幸福になることができず、不幸になってしまっているという現状もあるのではないのでしょうか。

ここにもあるように、幸福とは願っていること、欲求していることがかなったときに感じるができます。結婚する男女においては、二人の愛情が永遠に続くことを願い、それを誓って、式を挙げると思います。ですが、現実を見ると、結婚して数年も経つと、結婚当初の情熱が薄れてしまい、変わらないでほしいと願っていた愛情が変わってしまうということが起きているのも現代の世相でもあると思います。それであるがゆえに、願っているものがかなわないので、私たちは不幸だと感じてる人は意外と多いのです。

このように私たちの幸福とは欲望と表現されていますが、もう少し簡単に言うと、願望というものになると思います。多くの人は全能の神様に自分の願望をかなえて欲しいと願掛けをすることもあります。そして、願望がかなえば、その時に私たちは幸福感を感じることができているのです。

そこで問題なのです。私たちは何を願っているのかということなのです。自分と素直に向き合って、どんなことを自分は願っているのかと自問自答してみてください。そうしてゆくと、その自分の願望に2種類の願望があるということです。皆様は気づかれましたか？

## 【御言】

### 人間の矛盾性と墮落

- ・人間には、善の欲望を成就しようとする本心の指向性と、悪の欲望を達成させようとする邪心の指向性があります。
- ・この本心と邪心は、同一の個体の中でそれぞれ相反する目的を指向して、熾烈な闘争を展開しています。これが、人間の矛盾性です。
- ・存在するものは、いかなるものであっても、自体内に矛盾性をもつようになれば、破壊されざるを得ません。
- ・人間のこのような破滅状態のことを、キリスト教では、墮落と呼びます。

## 【感想】

私たちの持っている願望には大きく分けて2種類があります。本心の願う善なる願望と、邪心が求める悪なる願望です。人間は良心の声によって、その悪なる願望を退けようと懸命に努力し、善に生きようとして苦勞しています。ですが、その悪の願望そのものを取り除くことができず、どんなに善良に見えても魔がさすということが起こりえるのです。

そのような見地から人間には行動を規範などで規制する必要があるとして、今の法治国家の日本ができあがっているかもしれません。ですが、人間には善を成そうとする本心の願望もあるのです。数年前の大震災では多くの人がボランティアに奔走し、義援金も国境を越えて集まりました。このように人間には善なる願望もあり、それを行動に移して世の中を善化しているという現実もあります。

ただ、個々人を見てみると、このような善なる願望と悪なる欲求とを持ち合わせているということが、人間としての矛盾性を生み出しており、そのような存在は本来は自然界に存在できないと見るのが聖書の視点でもあり、原理の視点でもあります。そのような人間の破滅状態のことを、キリスト

教では墮落と呼ぶのです。

ただ、人間だけの努力では悪なる欲望をどうすることもできないので、キリスト教徒の人々は自らがそのような罪からあがなわれることを待望しているというのです。

ですので、私たちは真の御父母様から贖罪を受けなければ原罪をどうすることもできない存在として誕生しているのであって、この道以外に原罪を整理する道はないというのです。

どうでしょう。皆様も自己の内面に矛盾性を発見するのであれば、今が救い主を必要としている時ではないでしょうか。

### 【御言】

人間の無知

- ・人間の墮落を知的な面から見れば、人間が無知に陥ったということを意味します。
- ・人間は、心と体との内外両面からなっているので、
- ・無知にも、内的な無知と外的な無知があります。

### 【感想】

私たちは無知なのです。いえ、高等教育を受けたので、私は無知ではありませんと反論する人もいるかもしれませんが。ですが、よくよく考えてみてください。心の領域における人生の目的など、体の領域における自然界の様々な法則など、私たちの知らないことは山ほどあるのです。科学の世界においても、今の時代でも新発見と呼ばれる発見が続いており、日々、新しい発見をしているというのです。つまりは、そのようなことを人類は知らなかったというのです。人類が知らないのですから、もちろん私たちも知らないのではないのでしょうか。

心の世界においても、人間はなぜ生まれたのか？ 私はなぜ生まれたのですかとその理由を知る人はこれまでにいなかったというのです。哲学は様々な答えを出そうとしてきましたが、明確な答えを提示できていません。

このように私たちは無知なのです。その無知を自覚してこそ初めて、私たちは学ぶことができ、探求することができるのではないのでしょうか。

原理は無知を内的無知と外的無知に明確に区別しています。無知にも種類があるというのです。そして、私たちはその内外両面の無知を抱えているというのです。今、あなたの中に明確な答えはありますか？ なぜ自分は生まれたのか？ なぜ地球は回っているのか？ 地球が回っているという事実は知っていても、その理由を科学はまだ解明していないのです。

私もまだまだ無知なのです。知らないことがたくさんあります。ですが、この世界に無知ではないお方がおられるのです。全知全能の方、その方こそが神様だというのです。ですので、神様が全知であるがゆえに、その神様と相對するためには私たちは無知から脱却しなければならないというのです。

ですので、この道にくるとあらゆることを知るようになるのです。自分の専門はこれと決めて、他は知らなくても大丈夫という世界ではありません。神様に近づこうとすれば、あらゆることを知るべきなのです。文系、理系と言っている場合ではありません。両方をこなし得るような努力が必要になるというのです。皆様はその準備ができていますか？

### 【御言】

人間の真理探究

- ・内的無知から内的真理を探究してきたのが宗教であり、
- ・外的無知から外的真理を探究してきたのが科学です。
- ・このように、宗教と科学とは、人生の両面の無知を克服して両面の知に至る道を見いだすべく、両面の真理を探究する手段でした。

## 【感想】

ここでは従来の宗教と科学というものがどういうものであるのかということが簡単に述べられています。内的真理とは人生の目的、人間の存在する理由など、精神世界における様々な疑問に対する解答だと思います。それを宗教は探求してきており、その教えに従って、様々な答えが提示されているのです。

科学は自然界を相手に様々な法則などを発見し、発見された法則を私たちの生活に応用することで、現代社会に貢献してきました。ですが、その科学においても未知なる分野がまだたくさん残っており、これからも解明されてくると思いますが、この宇宙の起源についても人類はまだ定説を得ていないという現状なのです。

こうして、宗教と科学は人間の内外の両面の無知を克服すべく、様々な努力を重ねてきた歴史を刻んでいるのです。

ですので、ここで紹介する原理というものは、単なる宗教の教理ではないということです。外的無知を打開してきた科学の真理でもあるということです。そこに、私たちの既存の宗教との違いがあると私は思っています。

この道来ると多くの人は宗教の道に入っている人もおられるかもしれませんが、私たちは同時に科学の未知の分野を探求する科学者でもあるのです。皆様はいかがですか。科学的な知見を忘れているようなことはありませんか。

## 【御言】

- ・宗教と科学とは、人生の両面の無知を打開するための使命を、各々分担して出発したがゆえに、その過程においては、それらが互いに衝突して、妥協し難い様相を呈したのですが、
- ・人間がこの両面の無知を完全に克服して、本心の要求する善の目的を成就するためには、宗教と、科学とを、統一された一つの課題として解決することのできる、新しい真理が現れなければなりません。

## 【感想】

私たちの学ぶ統一原理とは単なる教会の教理ではありません。一つの宗教の教えに留まらないということです。そればかりでなく、これまで人間が未知の分野として探求してきた科学的な真理でもあるということです。

統一原理では無形世界として霊界の存在も明確に説明しますが、この内容は単なる宗教的な信仰に留まらず、これから人類が解明すべき死後の世界を科学的に解明したものであるのです。

このように、現代の文明社会ではこれまで研究された科学の成果というものが応用されていますが、だとしたら、今後の未来社会においては、霊界の科学的法則性なども日常生活において取り入れられるべきものなのです。ご先祖様を敬うのが単なる宗教的な信仰に起因するのではなく、霊界が存在するという科学的根拠に基づいて、多くの人々が霊界の実相を知るようになり、オカルト的な誤った概念を修正することも必要になる時代が近い将来において到来するというのです。

100年間前からすると現代社会はまさに夢のような想像もできない世界かもしれませんが、今後の100年において霊界が解明されると、人々の生活は大きく様変わりすると言えるでしょう。

私たちはそのような真理を今は信じているという段階かもしれませんが、このような真理を信仰生活において活用もしているのです。そして、万人が幸福になれる愛の処方箋というものを提供できる段階に私たちは入ろうとしているのです。

ですので、運、不運、つきがあるとかないとか、そのような内容も科学的に運勢を受ける方法として確立してきているのです。

そのように、科学も宗教も統一された課題として、人間の無知が打開されれば融合されるということも起こるのではと思っています。ですので、霊界に対して無知な人は私たちの運動を理解できないということもあるかもしれませんが、この道に来る人においては、真理を理解するのではなく、感

じ取っているという世界もあることを私は知っています。

皆様はいかがでしょう。愛情とは理解するものなののでしょうか。いえ、理解する前に既に感じているではありませんか。ここで紹介する統一原理はそのような新しい真理なのです。

### 【御言】

新しい真理の使命

新しい真理の使命は

- ・人類に神様の実在性と、創造の心情をはじめとして、墮落人間を救おうとしてこられた悲しい心情をも、教えることのできるものでなければなりません。
- ・有史以来のすべての主義や思想はもちろん、あらゆる宗教までも、一つの道へと、完全に統一し得る真理でなければなりません。
- ・統一は心と体の統一、夫婦の統一から始まるのです。
- ・墮落人間が、その創造本然の人間へと帰っていくことのできる真理でなければなりません。

### 【感想】

ここでは新しい真理の使命が紹介されていますが、私たちの側から見れば、私たちは御言をどのように学ぶべきなのかと、何のために学ぶのかというようなことになるのではないのでしょうか。

皆様はこれから学ぶ真理の御言を通じて、神様の悲しい心情を学びます。講義だけでは実感として不十分なときには、御言を実践して、生活圏において、神様の悲しい心情を体験するということも経験されると思います。これこそが神体験であって何か奇跡的な出来事が起こるというようなことではないのです。

そして、私たちがどのような宗教や思想、主義を持っていたとしても、すべての人が一つの道へと進むようになる真理でもあるので、あらゆる主義、人種の人がこの道には兄弟姉妹として存在しています。そのような主義を持ちつつ、人類一家族を提唱できるのもこのような真理ゆえなのです。

また、創造理想で紹介されますが、この真理は心と体の統一、夫婦の一体化を土台として世界の一家族化を進めることになります。

そして、何よりも重要なのは、この真理の御言は学んでいる私たちを、創造本然の人間へと生み変えてくれることなのです。創造本然の人間になるということが、人間において幸福であるということであるとすれば、万人がこの真理によって幸福になれるということなのです。

ですので、私たちはこの真理を知識として蓄えておくだけでなく、実際の人生において活用することで、創造本然の人間に帰っていくことができるようになっていくというのです。

ですので、ここで学ぶ原理は一度学習すれば終わりというものではないのです。生涯において何度も反復して学習し、実践することで、自分が本当に本然の人間に復帰されていくことを実感できれば、その喜びを誰かに伝えたいと思いませんか。

このように原理は万人を幸福にすることができるのです。その過程において神様の悲しい心情も通過することもあります。その悲しみを通じて神様の心情に触れるとき、私たちはさらに神様に愛されるようになると思います。いかがでしょう。そのような使命というより効果のある御言を皆様はどれほど活用されていますか。どこか棚に上げて、これまでの習慣性で生活しているようなことはありませんか。今からでも習慣を伝統に変えることはできるのです。気づいた今からです。

### 【御言】

新しい真理と文鮮明先生

- ・人間を命の道へと導いていく最終的な真理は、いかなる經典や文献による総合的研究の結果からも、またいかなる人間の頭脳からも、編みだされるものではありません。
- ・聖書の黙示録 10 章 11 節に「あなたは、もう一度、多くの民族、国民、国語、王たちについて、預言せねばならない」と記されているように、この真理は、神様の啓示をもって、我々の前に現れな

ればなりません。

・神様は、既にこの地上に、人生と宇宙の根本問題を解決されるために、一人のお方を遣わし給うたのでありますが、そのお方こそ、すなわち、文鮮明先生です。

### 【感想】

私たちが学ぶ原理とは文鮮明夫妻がとても知識が豊かで、様々な知見に富んでおられるのでそれを総合したのではと勘違いされる方もいるかもしれません。ですが、この原理というものは文鮮明先生が神様から賜った啓示であり、その起源は人間ではなく、神様なのです。

ですので、この地上で人間が生み出した、いかなる科学でも哲学でもないのです。原理で語られる内容は、神様が私たちに語りたい内容であり、その語りたい内容を文鮮明先生の口を通して私たちに伝えられたということなのです。

ですので、もっと自分は頭が良ければこのような原理も考え出すことができたとは、決して言えないのです。いかに人間が優秀であると思われても、神様の前には無知な人間の子孫に過ぎないのです。

ですので、私たちは明確に知るべきなのです。人間とは無知な存在であり、神様は全知な方であるということをです。ですので、人間が神様を押しつけて君臨すること自体が不幸の原因であり、どのような地位にあらうとも人間は神様の下においては愛される対象なのです。

そのようなことを神様は文鮮明先生を通じて、私たちに示されたのです。これから学ぶ真理とは文鮮明先生が編み出したものではありません。文鮮明先生が神様から託されたものなのです。

つまり、ここで真理を学ぶということは、神様の声を聞くということであり、人類において初めて解明された最先端の知識を得るといってもあります。皆様にはその真理を学ぶ準備はできておられますか。

### 【御言】

#### 第1章 創造原理

- ・人間は長い歴史の期間にわたって、人生と宇宙の根本問題を解決するために苦悶してきました。
- ・けれども、今日に至るまで、この問題に対して納得のいく解答を我々に与えてくれた人はまだ一人もいません。それは、人間や宇宙がいかに創造されたかという究極の原理を知らなかったからです。
- ・さらに、もっと根本的な先決問題は、結果的な存在に関するのではなく、原因的な存在に関する問題です。
- ・ゆえに、人生と宇宙に関する根本問題は、それを創造し給うた神様を知らない限り解くことはできません。

### 【感想】

人生と宇宙の根本問題。なぜ私は生まれ、そして、なぜこの宇宙は誕生したのか。現代の科学は宇宙の起源をビッグバンだと述べていますが、そのビッグバンがなぜ起こったのかという理由を明確にしません。それを単なる偶然と見るのが現代科学の限界であり、すべては偶然的に今の自然界ができたとするのが現代科学の限界でもあります。

そのような現代において、原理は、この宇宙が神様によって創造されたことを提示し、科学の新しい論調として意志のあるものにこの世界はデザインされたということがやっと述べられ始めているのです。

科学がそうなので、私が誕生したのも、父親と母親が性的な関係を結んだからとしか説明できず、神様から願いをこめて誕生している自分というものを自覚することはさらに困難になっています。

それらのすべての根本問題は、神様がいかなるお方であるのかということを知らずしては解くことができないのです。文鮮明夫妻は誰よりも神様のことをご存知のお方です。その神様に対する無知を克服することで、私たちの様々な問題が解けてくるというのです。

ここで紹介する創造原理では、神様がいかなるお方なのかということを紹介します。さらに詳しい内容は経典である天聖經に「神様」の章がありますので、そちらを一読されることをお勧めします。

## 【御言】

### 第1節 神様の二性性相と被造世界

#### 神の神性

- ・無形にいます神様の神性を、いかにして知ることができるのでしょうか。
- ・それは、被造世界を観察することによって、知ることができます(ロマ 1:20)。
- ・被造世界の森羅万象は、それを創造し給うた神様の見えない神性の、その実体対象として展開されたものなのです。
- ・それゆえ、作品を見てその作者の性稟を知ることができるように、この被造万物を見ることによって神様の神性を知ることができます。

## 【感想】

様々な宗教で神様とはと論じていると思います。愛の神様、全知全能の神様、この被造世界の創造主としての神様など神様に対して様々なことを経典として教えていると思います。ですが、原理は、この神様を科学的にアプローチしていると思います。

つまり、原因と結果には類似性、相似性があるということを基本として、結果の世界である被造世界を見渡すことで、その共通事項が神様にも存在するという論点になります。

芸術作品においては作者の性稟を知るには、その作品をよく知ることで知ることができるようになります。では、神様が創造されたこの被造世界、森羅万象を見ることで神様を知ることができますよということを、創造原理は紹介します。

もちろん、文鮮明夫妻は神様と直接出会われ、様々な啓示を受けられたことは皆様もご存知だと思います。その意味において、神様について最も良くご存知なのも文鮮明夫妻なのです。

原理は神様を紹介する入り口です。前回の内容でも紹介しました通り、神様にもっと詳しく知りたいと希望されるのであれば、ぜひ天聖經を一読されることをお勧めします。

創造原理で紹介する神様は、森羅万象から悟られる神様の新しい側面です。ですが、このチャート式で紹介される神様が神様の全てではないということは覚えておいてください。

## 【御言】

### 被造世界の共通事実

- ・神様の神性を知るために、被造世界に普遍的に潜んでいる共通の事実を探ってみることにします。
- ・存在しているものは、いかなるものであっても、それ自体の内においてばかりではなく、他の存在との間にも、陽性と陰性の二性性相が相対的關係を結ぶことによって、初めて存在するようになります。
- ・実例を挙げれば、物質は陽性と陰性、植物は雄しべと雌しべ、動物は雄と雌、人間は男性と女性が相対關係を結んでいます。

## 【感想】

それでは神様の神性を知るために、この被造世界を眺めてみることにします。まず、この被造世界に存在するあらゆるものは、男性と女性に象徴される陽性と陰性を見ることができるということです。

人間においては男性と女性、動物においては雄と雌、植物においても雄しべと雌しべがあるということです。この陽性と陰性が相対的な關係を結ぶことによって、初めてすべての被造物は存在するようになっているということです。

ある人は、いや人間には同性愛者もいるではないかと言われるかもしれませんが、原理では同性愛を本然の人間の姿とは見ていません。ここでも紹介するように、人間が存在するためには、男

性と女性が愛情の伴った相対的な関係を築くことで、理想的な家庭を築けるとします。

同性愛においては、子女を繁殖することができません。これはとても自然の理に適ったことなのです。ですので、同性愛は1代で終わってしまう一時的な愛の关系到過ぎないと私も思います。

自然界においては、雄と雄、雌と雌がカップルになって、繁殖をするというのは見られないと思います。人間のこのような不自然な関係も性倫理の退廃のもたらした結果であり、墮落した人間が万物よりも劣るゆえんだと思います。

このように創造原理では、すべての被造物が陽性と陰性がペアとなり、種を保存し、繁殖をしていることが分かります。なぜ同性婚がいけないのか。その起因は神様がそうではないからと原理は明確に述べていると思います。

### 【御言】

性相と形状の二性性相

- すべての存在はもつと根本的な、いま一つの二性性相の相対的な関係を結んでいます。存在するものはすべて、外形と内性を備えています。
- 見えるところの外形は、見ることのできない内性に似ているので、内性を性相といい、外形を形状と名づけます。
- 性相と形状とは、同一なる存在の相対的な両面のかたちを言い表しており、形状は第二の性相であるともいえるので、これらを総合して、二性性相と称します。

### 【感想】

あらゆる存在には外形と内性があります。人間には心と体があり、動物にも本能と体があるということです。唯物論者は人間の心の存在を脳の産物だと主張するようなこともありますが、原理はそのような主張とは真っ向から対立します。人間には心という性相的な部分があり、体という形状的な部分もあるということです。被造世界がすべてそのようになっているということです。

様々な物質の法則性や性質、電子が規則正しく陽子の周りを回っているのも、内的な内性があるからなのです。

では、神様は心と体からできている二元論的存在なのでしょうか。いいえ、原理は神様は心と体は円滑に授受作用をして一つになっていると説明します。神様においては、性相と形状は一つになっており、相対的な関係を結んで、授受作用をしているということです。

人間においては、心と体が葛藤するという人もいるかもしれません。心の願わない行動を体がしていると感じている人もいるかもしれません。これは、人間が墮落して、矛盾した破滅状態にいたためなのです。

これから学ぶ原理はこのような破滅状態から人間をいかに救えるのかということを説明します。しかし、今の自分が破滅状態であるということを知覚するためには、本然の世界の人間というものを知らないとは分からないということもあるのではないのでしょうか。

本然の人間とは神様に似て、心と体が円滑に授受作用を行い、一人の人間において一体化しています。皆様はいかがでしょう。心の願うままに生活しているといえますか？ 本然の人間とは心と体がつながっているとは私は思います。

### 【御言】

これに対する例として、

- 人間は体という外形と心という内性とからできています。
- 心を性相といい、体を形状と称します。
- 体は第二の心であるということもできるので、これらを総合して二性性相であるといえます。
- これによって、あらゆる存在が性相と形状の二性性相の相対的な関係によって存在しているという事実を、知ることができます。

## 【感想】

人間には心という目に見えない部分と体という目に見える部分からできています。これには誰もが納得されるでしょう。人間に心がないとは誰も言わないと思います。そのような心を性相と呼び、体を形状と呼びます。そして、現代医学も証明し始めているのですが、心の状態がそのまま体に反映されるということ。心の状態に体が似てくるということを科学の分野でも証明がされつつあるのです。ですので、体を第二の心と呼ぶこともできるということです。

私たちは良く手相や観相を見て、その人の運勢を判断することもあります。これも、目に見えない性相的な要素が形状である体に反映されるということで、成り立っているといえるのではと思います。

そのような心と体が本然の人間では相補的に調和的に一体化しているので、これらを総合して二性性相であると言います。私たちにおいては、心と体が葛藤することもあるのですが、これは墮落ゆえの墮落性から生じるものなのです。私たちが本然の人間に復帰されてゆくにつれて、このような心と体の葛藤も徐々に解消されてくるということです。そのように復帰されてくると、世の中の森羅万象が、みな性相と形状の二性性相の相対的關係によって存在しているという事実を知ることができるということです。

このポイントは唯物論とは対極を成しています。唯物論はこの世の森羅万象は対立によって存在していると主張します。なぜそう見えてしまうのかというと、心というものを正しくとらえることができず、心と体が葛藤して対立してしまっているために、それを投影してそのように見えてしまうということではないでしょうか。ですが、人間の本性が復帰されてくると、心と体は和合するようになり、森羅万象は相対的關係によって調和することによって存在していることが分かるようになるということだと思います。

皆様の目には世の中はどのように見えていますか？ 矛盾だらけの対立ばかりが目につきますか？ それとも人々が円滑に調和しながら大きな社会を形成していると見れますか？ どちらもよくよく考えてみると、自分の心と体の状態を物語っていると思います。本然の人間とはどちらなのかということを原理は明確に提示しているのです。

## 【御言】

神様の二性性相

- ・あらゆる存在の第一原因は、これらすべてのものの主体となる性相と形状とを備えていなければなりません。
- ・存在界のこのような第一原因を我々は神様と呼び、この主体的な性相と形状のことを、神様の本性相と本形状と言います。
- ・また、森羅万象の第一原因であられる神様は、陽性と陰性の二性性相の相対的關係として存在します。

## 【感想】

これまでこの存在世界に共通する性質について見てきましたが、この性相と形状の關係は森羅万象に存在するというのであれば、それを創造された神様にもそのような内容が存在するということを経験的に結論付けているのです。

ここで紹介する神様はこの存在世界の全くの初めの原因としての神様です。ですから、これから探索される宇宙においても、すべての惑星にもこのような二性性相が存在すると推測することもできるのです。

現代科学はこの存在世界の起源をビックバンだと規定していますが、そのビックバンの原因とされた方が神様であるということ、宗教的な信仰で信じるのではなく、科学的に証明される時代が近い将来において到来することも原理は語っています。

また、森羅万象において見られた陽性と陰性の調和というものも、原因となられる神様においても持っておられるはずであると結論するのです。



このように原理は二性性相の調和された神様というものを提示します。

それであるがゆえに、私たちは唯心論でもなく唯物論でもない内容を学んでいるのです。神様には心の原因となる部分もあれば、体の原因となる部分もあるということです。それでいて両者は調和的に統一されていますので、二元論ではなく、統一論とでも言われるような内容になっていると思います。

人間の幸福を論じるときも、この二性性相が明確になると、心だけの幸福もあり得ず、体だけを喜ばせるような幸福も永遠性はないということが分かります。男性だけが幸せになれるというものでもなく、女性だけが幸せを主張するというものでもありません。

個人においては、心と体が満足し、家庭においては夫婦が愛情によって満たされる時に幸福になれるという目標もこの神様の存在される様相から導き出されると私は思います。

### 【御言】

神様の性相、形状と、陽性、陰性の二性性相の相対的關係

- ・神様の性相と形状の二性性相と、陽性と陰性の二性性相とは、互いにいかなる関係をもっているのでしょうか。

- ・神様の本性相と本形状は、各々本陽性と本陰性の二性性相の相対的關係をもっているのです、神様の本陽性と本陰性は、各々本性相と本形状の属性なのです。

### 【感想】

神様の性相と形状を本性相と本形状と呼びます。そして、神様の陽性と陰性を本陽性と本陰性と呼びます。では、これらはどのように関係しているのでしょうか。神様は4つに分かれているのでしょうか。そうではありません。

ここでも説明されているように、本性相にも陽性と陰性である本陽性と本陰性があります。同様に本形状にも陽性と陰性である本陽性と本陰性があります。このように、神様はまず大きくは本性相と本形状の二性性相の中和体として存在されており、その本性相と本形状の属性として本陽性と本陰性があるのです。

ですので、人間の基本も男性、女性という陽性と陰性の調和をする前にまず性相と形状、つまり心と体の調和と一体化をする必要があるということが、ここからも分かります。

人間の社会を見つめれば、個々人が心と体が葛藤しており、その心と体の葛藤している個々人が結婚をして夫婦となり、夫婦でもお互いに葛藤しているということが往々にしてあります。ですが、この姿は人間が墮落した結果の破滅状態を意味しており、本然の創造理想世界ではそのようなことがないということです。

この原理が私たちを救うということは、人間の本心が何を求めているのかということを確認にし、その本心のままに生活行動できる人間へと私たちを生み変えてくれるということなのです。

ですので、私たちの提唱する「為に生きる生活」とは無理やりに人間に強要するものではなく、人間の自然の発露として、墮落性を退けてくると、自然とできるようになってくるのです。

この世ではまだ心と体の葛藤を治療する治療法は確立されていません。そこには神様を抜きにしては不可能であるということがあるためです。

神様のこの存在様相は人間の理想像においても、まず男女の調和の前に心と体を調和させることをまずすべきであるということを提示することになると思います。

### 【御言】

神様は

- ・本性相と本形状の二性性相の中和的主体であると同時に、
- ・本性相的男性と本形状的な女性との二性性相の中和的主体としておられ、
- ・被造世界に対しては、性相的な男性格主体としていまし給うので、
- ・我々は神様を父と呼び、その格位を表示するのです。

## 【感想】

ここで明確に神様とはと語られています。ですが、神様が被造世界に対して男性格主体としておられるので、父と呼ぶとありますが、今は時代が変わり、私たちは神様を父母と呼びます。

つまり、神様は結婚されたのです。男性であれば分かると思いますが、男性が永遠に独身で女性を迎えて家庭を築けないことはとても寂しいことであり、不幸なことです。神様もそうであってはならないということです。

それで、私たちの摂理歴史において、神様が父としてあらられるだけではなく、母なる神様と結婚されて、父母となられたことを記録しているのです。

愛の対象である人間が先に結婚し、その後、そのメシヤが神様を結婚させてあげたといってもいいのではないのでしょうか。

神様も独身であってはならないと考えるのは愛の道理を考えれば自然と分かると思います。ただ、キリスト教の神観と古い習慣性にとらわれてしまうと今の摂理を見失うということもあるのです。

ですので、今、私たちは天のお父様ではなく、天の父母様として神様と呼びます。ですので、原理講論の書かれた時代とは今は少し異なっていますので、原理と違ったことを教えているとは思えないでください。時代が進むことで、天の摂理も進んだのです。

ですので、私たちの道においては父なる神様だけではなく、母なる神様も顕現されているということなのです。

## 【御言】

神様と被造世界との関係

- ・被造世界は、無形の主体としていまし給う神様の二性性相が、創造原理によって、象徴的または形象的な実体として分立された、個性真理体から構成されている神様の実体対象なのです。

- ・個性真理体は、すべて神様の実体対象ともなるので、それらは各自、神様の本性相と本形状に似て、それ自体の内に性相と形状、陽性と陰性の二性性相を、共に備えています。

## 【感想】

私たちは神様によって創造されています。実体対象とは何の対象なのでしょう。神様の心情的愛情の対象として実体をもって創造されているということです。そして、人間においてはその個性は誰一人として同じものはありません。そのような個性をもった真理体として私たちは存在しているのです。

では、神様によって創造されたのであれば、神様に似るはずなのです。それが性相と形状、陽性と陰性を宿していることなのです。男性を陽性と呼び、女性を陰性と呼ぶので、男性には陽性しかないというような勘違いはしないようにしてください。

男性にもその肉体においては、孔穴部があり、陰的な要素も備えているのです。心の状態においても陰気になることも当然あります。ただ、男性においては、その性を決定する器官において突出しているのであって、女性は凹になっているのです。

このように、すべての被造世界の森羅万象は、性相と形状、陽性と陰性の二性性相を備えているということです。ただ、人間は墮落したがゆえにこの心と体、男性と女性が円滑に授受作用ができなくなっているのです。それであるがゆえに、神様が相対できないということです。

ですので、神様を求める修道者は懸命の努力をもって体を心に従わせようとしているのです。皆様はいかがでしょう。肉体的な欲望と心の願いが葛藤しているようなことはありませんか。

私たちにもこのような心と体、陽性と陰性を備えているということです。

## 【御言】

第2節 万有原力と授受作用および四位基台

万有原力

- ・神様は創造主として、時間と空間を超越して、永遠に自存する絶対者です。

- ・神様がこのような存在としておられるための根本的な力も、永遠に自存する絶対的なものです。
- ・これはまた、被造世界が存在するためのすべての力を発生せしめる力の根本でもあります。
- ・このような力の根本にある力を、万有原力と呼びます。

### 【感想】

神様は時間と空間を超越して存在されています。ですので、同時にあらゆる場所に存在することもでき、それでありながら唯一なのです。そのような神様が存在されるにも力が必要だということです。もちろん、神様によって創造された私たちも存在するためには力が必要です。その力の根源を真の御父母様は万有原力と呼ばれたのです。

私たちは自然科学の物理で万有引力というものを学びますが、それとは異なりますので間違えないようにしてください。万有原力はすべての存在するための根源的な力をいうのです。

この万有原力を適切に活用することができれば、あらゆる存在は永遠性をもって存在することも可能になると思います。人間は肉体が死を迎えると、霊人体が霊界と呼ばれる死後の世界に移り、そこで永遠に存在するというのも原理は説明します。その霊界で存在するための力も万有原力なのです。

神様は創造主であるばかりでなく時間と空間を超越しておられます。あらゆる場所に神様は存在され、神様の前に何かを隠すということは不可能でしょう。それであるがゆえに、神様は全知であり、さらに時間を超越されていますので、6000年も過去の出来事も今のこのように感じられるということです。

それからすると、私たちが神様を喜ばせることができるのは、地上ではほんの一瞬にすぎないということなのです。その短い期間において、神様に喜んでもらえたという因縁が霊界での永遠を左右するというのです。

一瞬が永遠に通じるというのも神様が時間を超越して存在されているからなのです。私たちは地上では、時間の流れ、空間的な制約を受けて生活をしています。人生はその意味において、永遠の世界から見れば一瞬なのです。神様を悲しませるのも一瞬であり、神様を喜ばせるのも一瞬なのです。そして、その瞬間が永遠に通じるのです。

どうでしょう。皆様の生活は今の瞬間が輝いていますか？

### 【御言】

#### 授受作用

- ・あらゆる存在の主体と対象が、万有原力により、相対基準を造成して、良く授け良く受ければ、その存在のためのすべての力、すなわち、生存・繁殖・作用などのための力を発生します。
- ・このような過程を通して、力を発生せしめる作用を授受作用といいます。

### 【感想】

先日の内容では万有原力を紹介しましたが、その万有原力によって相対基準を造成することを通じて、授受作用が始まることをここでは紹介しています。

授受作用の基本は良く授け、良く受けるということです。まずポイントは授けるのが先だということです。まず、自分から親切、万物、愛情などを先に授けることが基本なのです。そして、相手が授けようとしていると分かったら不必要な遠慮ということはしないようにして、感謝の気持ちを笑顔や態度でしっかりと示して、喜んで受けるということが良く受けるということになります。

ですので、当たり前のように受けることを、良く受けるとは私は思いません。恩恵を受けるにおいても、心からの喜びと感謝を神様と御父母様の前にお捧げすることがとても大切なことだと思っています。

日本では様々な場面で遠慮することが美德とされている文化もありますが、遠慮のしすぎは授ける側の気持ちを下げってしまうこともありますので、私たちの間では過度の遠慮はしないほうがいい

のではと思っています。

このようにして、相対基準をしっかりと合わせて、授受作用が円滑にできれば、個人においては生存の力がわいてくるし、家庭においては子女が繁殖し、万物に対しては様々な作用を幸福な環境を築くために活用できるというようになります。

授受作用は相対基準が合わなければ生じません。ですので、きちんと目的を中心として、お互いに相手に合わせるということを心がけると授受作用は円滑になります。逆に自分に固執しすぎて、自分の基準を相手に合わせることができなければ、そこにおいては発展のための授受作用もできないということも言えるのではないのでしょうか。

皆様はいかがでしょう。家庭において、個人において、授受作用は円滑でしょうか。

### 【御言】

正分合作用による三対象目的を完成した四位基台

正分合作用

・神様を正として、それより分立して、再び合成一体化する作用を正分合作用と称します。

### 【感想】

しっかりとした中心を立てて、授受作用を行えば、四位基台を形成することができるようになります。四位というのですから、これは空間的な概念だということもお分かりになると思います。この四位基台を時間のプロセスで見つめるときには、正と分と合という正分合作用としてとらえることもできるのです。

ですので、四位基台を時間的な概念でとらえると正分合作用となります。

共産主義の言葉の中に正反合というよく似た言葉がありますが、それとは意味が全く異なりますので、間違えないようにしてください。

正とは神様や目的という四位基台の中心を言います。そこから出発して、分立された主体と対象が万有原力によって相対基準を造成して、授受作用をすると、一体化するだけに留まらないというのです。そこから、新しい新生体が生じるというのです。

この四位基台の概念はとても重要で、あらゆる発明や発見、アイデアもこの正分合作用で作られてくることが統一思想では提唱しています。

ですので、一体化するためにはどのようにすればいいのか？ という疑問には、ここで説明されるように、良く授受作用をすれば良いという結論が導かれるのです。では、授受作用を活発にするためにはどうすればいいのかというと、相手と相対基準を合わせれば良いという明確な回答が与えられているのです。そして、相手と相対基準を合わせるためには自分の基準に固執してはいけないので、ある意味、自分というものを否定される路程もあるのではと私は感じています。

### 【御言】

三対象目的

・正分合作用により、正(神様)と主体と対象と合性体が、各自主体の立場をとるときには、各々残りのものを対象として立たせて、三対象基準を造成し、  
・それらがお互いに授受作用をするようになれば、その主体を中心として、各々三対象目的を完成するようになります。

### 【感想】

三対象目的を説明するのには家庭を例にすると良く分かると思います。神様を正として男性と女性、夫婦が主体と対象となり、その合性体として子女が家庭には存在します。

創造原理的な家庭とは、神様、夫、妻、子女の四者がそれぞれ他の三つの対象を愛し、円滑な授受作用を形成することを意味します。

神様から見れば、夫と妻、そして夫婦の子女である孫。夫から見れば、親である神様と妻、そし

て、家庭に生まれた子女。妻から見れば親である神様と夫、そして夫婦に生まれた子女。子女から見れば、親である父と母、そして神様。というようになります。

このように家庭においてはしっかりと三対象と円滑な授受作用を行うことが理想的なのです。

ですが、この世的には良妻賢母とは立派な女性のように思われますが、これでは対象が2つしかないということです。ここに神様が抜けているために、この世的な家庭は立体感がないと言われます。

また、信仰に没頭し、夫や子女と円滑な授受作用ができないというのも本来の家庭ではありません。何よりも神様を最優先すべきですが、それに加えて、配偶者、子女とも円滑な授受作用を継続しないと、私たちは本来の責任を果たしたとはいえないのです。

ですので、教会の人々は家庭だけでなく、神様をも愛そうと必死になるので、本当に苦勞が多いということです。ですが、家庭の理想形を知っておくことは本当に重要です。

皆様は三対象と円滑な授受作用をしていると言えるでしょうか。この世的な結婚では1つの対象しか見えていないというような悲劇がいくらでもあるのです。そして、さらに悲惨なのは、対象が見えず自分しか見えていないというような人もいます。

ですので、真の家庭運動が提唱する理想的な家庭像とは、この世的な実情から遠く感じられるかもしれませんが、この理想像に近づくだけで、家庭の幸福度は増すと私は思っています。

## 【御言】

### 四位基台

・正を中心として、二性の実体対象に立たされた主体と対象とその合性体が各々三対象目的を完成すれば、四位基台を造成するようになります。

・四位基台は

- ① 神様、夫婦、子女の三段階をもって完成されるので、三段階原則の根本となり、
  - ② 各位を中心として、各々三対象となるので、これらを総合すれば十二対象となるので、十二数の根本ともなります。
  - ③ 創造目的を完成した善の根本的な基台でもあるので、
  - ④ すべての存在が存在するための、力の根本的な基台ともなります。
- ・したがって、四位基台は、神様の永遠なる創造目的となります。

## 【感想】

ここで四位基台とはどういうものかということが紹介されています。

神様はアダムとエバを誕生させましたが、その子女と四位基台を築くことができなかったのです。それで摂理は延長され、今の時代に至っているということです。このことから、イエス様は結婚すべきであったという理論も出てくるのです。

ですので、真のご家庭においても、御父母様という夫婦だけではなく、その御子女様がしっかりと立たれて、真の家庭における四位基台がしっかりと完成することを通じて、神様の摂理は完成されると見てもいいのです。

また、よく教会では12数は原理数だと聞かれると思いますが、その理由がここにあります。つまり、四位基台のそれぞれの位置に三対象があるので、全部で十二対象となるのです。それを完成する意味で12数ということです。

さらに、善なるものは皆、この四位基台を形成しているということです。これが私たちの善悪の判断基準になるのです。ですので、授受作用が円滑になれば良かったと感じるのであって、逆に授受作用が壊れるようなことは悲しく感じるようになっていきます。夫婦において、夫と妻が仲睦まじく会話を楽しみ、愛情を交換している姿は普通に善なことだと誰しもが感じるでしょう。それに反して、夫婦がけんかをしていさかっている姿は子供の目にも悲しいことだと感じるようになっていきます。

ですので、幸福な家庭の基盤、善なる家庭の基盤もこの四位基台の完成によるのです。

最後にすべての存在の力の根本でもあるのがこの四位基台なので、家庭が崩壊すると国力も下

がるというのです。四位基台が提唱するように国家の最小単位は家庭であるべきであって、私たちは離婚とは四位基台を破壊する行為なので、悪だと見ます。それは法律的な離婚を意味する前に、家庭において、夫婦の愛情の伴う授受作用が壊れるという意味の精神的な離婚をも意味します。ですので、家庭を持ったとしたら、何よりも貞操を大切にするのも私達なのです。

日本に限りません。アメリカにおいてもフリーセックスの洗礼を受けて、病める大国となったのは誰もが知っています。家庭が崩壊すれば、国力は低下します。ですので、私達の提唱する真の家庭運動は崩壊した家庭を再建するだけではなく、それを通じて国力を向上させる、国家の復興運動でもあるのです。なぜそうなるのかという根拠がこの四位基台にあると私は思っています。

## 【御言】

### 第3節 創造目的

#### 被造世界を創造された目的

- ・被造物の創造が終わるごとに、神様はそれを見て良しとされた、という記録(創世記 1:4～31)を見れば、
- ・神様は被造物が、善の対象となることを願われたのですが、それは、神様が見て喜ばれるためでした。

## 【感想】

ここではとても大切なことが簡単に語られています。神様はなぜ被造世界を創造されたのかという理由が端的に述べられています。それは喜ぶためにあったというのです。

つまり、これが私達の生まれた理由であって、人生の目的でもあるのです。ですが、墮落の結果、人間はこのような自分の存在理由に対して無知になっているというのです。

人間はなぜ善に生きなければならないのでしょうか。これを規制や抑圧と思って自由を求め、放蕩する人もいます。ですが、人間がなぜ善にならなければならないかという理由がここで簡単に述べられています。神様を喜ばせるためにという理由なのです。

ですので、神様は私たちが善の対象となる時に喜ばれるのです。それは善なる神様と相対基準が合うからだとは思っています。相対基準が合うと授受作用が始まり、そこに様々な幸福が生まれるということからも分かると思います。

ですので、悪に生きると神様が見えなくなるのです。良く日本では誰かに見られていることを気にする文化があります。逆に誰も見ていなければという魔がさすこともあります。ですが、私たちは人間の目以上に神様の目を気にします。

なぜでしょうか。私たちは神様を喜ばせるために生まれているからなのです。神様は無形で肉眼では見えません。ですが、喜べるという結果は神様を喜ばせるという目的を果たした時に味わうのが本然のものであり、そのような目的を果たすための欲求も私たちには与えられているといえます。

皆様はいかがでしょう。誰を喜ばせるための人生を歩んでいますか？ ですから、私たちも御父母様を愛するのは、御父母様と一体となられている神様を喜ばせるためというのが、御父母様を人間的に喜ばせること以上に重要であると思っています。

## 【御言】

### 神様の喜び

- ・神様は万物世界を創造されたのち、最後に御自分の性相と形状のとおり、喜怒哀楽の感性をもつ人間を創造され、生育せよ、繁殖せよ、万物世界を主管せよと言われました(創世記 1:28)
- ・それゆえに、この三大祝福のみ言に従って、人間が神様の国、すなわち天国をつくって喜ぶとき、神様もそれを御覧になって、喜ばれるのです。
- ・それゆえに、人間を中心とする被造世界が存在する目的は、神様を喜ばせることでした。

## 【感想】

私たちが創造された目的は創造目的として紹介されている三大祝福を全うすることです。では、三大祝福を全うするとどうなるのでしょうか。それがすなわち、人間は天国を建設することができ、その中で喜びの生活をするということです。しかもその喜んでいる私たちの姿を見て、神様も喜ばれるということです。

人間は誰しも喜びを求めています。ですが、神様の喜ばれる喜びというものがどういうものを人間は忘れてしまっているのです。この無知ゆえに、自己中心的な喜びが蔓延し、この地上は天国どころか地獄になっているということです。

統一教会の信仰を持つ人はなぜ御父母様を喜ばせようとするのでしょうか。それは御父母様と一体となっている神様を喜ばせることもあると私は思っています。ですので、私たちは御父母様を人間的に喜ばせるのではなく、天的に神様を喜ばせる孝行の道を求めていると思っています。

ですので、この被造世界は神様の喜びのために創造されたということです。

では、皆様の生活はいかがでしょうか。日々、神様を喜ばして差し上げられたことを実感していますか？ ややもすると習慣的に自分だけが喜ぶ生活をしやすいというのが私たちの堕落性なのです。自分を中心とする人が集まって天国ができるでしょうか。誰しもがそうではないと言うでしょう。

ここに天国を建設する方法というのが提示されているのです。それが、三大祝福を完成することであり、三つの四位基台を円滑に営むことなのです。これを解明されたのが御父母様であり、このように私たちは御父母様の解明された原理を学んでいるのです。

## 【御言】

存在の二重目的

- すべての存在は二重目的をもつ連体です。
- すべての存在の中心には、性相的なものと、形状的なものと二つがあるので、その中心が指向する目的にも、性相的なものと形状的なものと二つがあります。
- 性相的な目的は全体のためにあり、形状的な目的はそれ自体(個体)のためにあるもので、全体的な目的を離れて、個体的な目的があるはずはなく、個体的な目的を保障しない全体的な目的もあるはずがないのです。
- したがって、森羅万象の被造物は、このような二重目的によって連帯しあっている一つの広大な有機体なのです。

## 【感想】

ここでは二重目的が紹介されています。私たちはこれまで全ての存在には性相的な部分と形状的な部分があるという二性性相を学びました。ですので、その中心が指向する目的にも性相的なものと形状的なものがあるということです。

私たちは教会において摂理というものに携わります。家庭の次元を超えて教会や社会、世界のために生きることを実践するために、様々な責任分担を担当します。これがいわゆる全体目的なのです。これに対して、各家庭や各個人においても路程という摂理が展開されています。家庭的な平和や人間の個人的な成長などです。

二重目的とはこの全体の摂理と個人的な路程が連帯しているということです。そして、家庭が存在するにおいては摂理を離れてはあり得ず、また摂理に参加したからと言って、家庭や個人をまったく犠牲にして良いとは言いません。

日本は全体主義の文化がありましたので、全体の目的を達成するためには個人的なこと、家庭的なことは犠牲にしなければならないという習慣性があります。ですが、摂理とは全体主義で進められるものではないのです。各家庭、各個人の成長が摂理の進展に大きく関わり、各家庭が成長した分だけ摂理も進展するようになります。また、摂理が進展した結果、大きな恩恵が与えられるときには、その恩恵は各家庭の隅々にまで行き渡るということです。

です。ある宗教のように特定の個人のために、個人的、家庭的な幸福を全て犠牲にしているというわけでは決してありません。私たちは摂理に同参すると同時に、私たち自身も成長し、そして、その成長が私たち自身をも幸福に近づけているのです。

もし、家庭を犠牲にしてみ旨を進めているという方がおられるとすれば、今一度この二重目的を考えてはどうかと思います。家庭の成長が摂理を発展させるのです。非原理のマスコミはあたかも私たちが御父母様のためにすべてを犠牲にしていると報道しがちですが、現実はこの二重目的のように逆に私たちが救われているのです。このように無知ゆえに様々な誤解を生むこともありますが、原理はしっかりと二重目的を説いているのです。

### 【御言】

神様の喜びのための善の対象

- ・喜びは独自の生ずるものではありません。
- ・無形のものであろうと、実体であらうと、自己の性相と形状のとおり展開された対象があつて、それからくる刺激によって自体の性相と形状とを相対的に感ずるとき、初めて喜びが生じます。
- ・神様もその実体対象からくる刺激によって、自体の本性相と本形状を相対的に感ずるとき、初めて喜びに満たされるのです。
- ・すなわち、四位基台の基盤の上で、三大祝福による天国が実現すれば、これがすなわち、神様が喜びを感じることのできる善の対象となるのです。

### 【感想】

御父母様も良く語られましたが、どんなに立派な男性でも、独りでいては喜びを感じられないというのです。そこには喜びを感じるための相対が必要なのであって、神様も例外ではないと語られていました。ですが、神様はアダムとエバを失うことによって、その相対を失ってしまったのです。ですので、神様は喜びではなく悲しみをずっと感じてこられたということは、皆様もご存知だと思います。

ですので、私たちが神様の相対になるということは、私たちが与えられている神性を発揮して、神様に似た、心と体、男性と女性の調和的に一体化した生活をするのではないのでしょうか。そのような相対から感じる刺激で神様は喜ばれるというのです。ですので、神様の喜ばせ方というのがあるのです。それが、ここでも紹介されているように、三大祝福に提示されている四位基台を調和的に完成することなのです。そして、神様が喜ばれるのであるから善なのです。

逆に四位基台を破壊するような行為は神様が喜ばれない、つまりは神様が悲しまれるので悪だと判断するのです。ですので、純潔、貞操を守るとは、家庭的な四位基台を守ることなので、私たちはそれをもって善としているのです。

ですので、個人においては心と体が調和的な四位基台を形成して一体化していれば、神様は私を通して喜ばれるというのです。家庭においては夫と妻が円滑な授受作用をして調和的な四位基台を造成すれば、それが神様の喜びとなり、善となるのです。このように私たちの善悪の判断基準は神様が喜ばれるのか否かということになるのです。決して、人間的な喜びが基準になっているとはいえないので、この世的には理解されないこともあるのです。

ですので、私たちは神様に似た者になることによって神様を喜ばせることができるのです。そして、そのような存在を神様はより一層愛されるので、発展せざるを得ないというのです。国家発展の原則も神様に似た社会が形成できるのかどうかということであり、つまりは、円滑な授受作用が展開して、四位基台をしっかりと形成できるのかどうかということだと思います。ですので、どんな大国も淫乱に陥ると滅びているのです。

### 【御言】

三大祝福

- ・神様の第一祝福は個性を完成することです。個性を完成しようとすれば、神様の二性性相の対



象として分立された心と体が、授受作用によって、合性一体化(個体)して、神様を中心として個体的な四位基台をつくらなければなりません。

・第二祝福を成就するためには、個性を完成したアダムとエバが夫婦となり、子女を生み増やし、神様を中心として家庭的な四位基台をつくらなければなりません。

・第三祝福は、万物世界に対する人間の主管性の完成を意味し、人間と万物が合性一体化(被造世界)することにより、神様を中心とする主管的な四位基台が完成されなければなりません。

## 【感想】

ここでは三大祝福の内容が具体的に紹介されています。

まず第一祝福では私たちが個人的に心と体を神様を中心として調和的に一体化させることを意味しています。ですので、心と体の一体化は神様を中心とした調和的な授受作用によるのです。ですので、強い意志力で強制的に体を心に従わせるというようなものではないのです。第一に神様を中心としなければどんなに強靱な意志力をもってしても心と体は一つになりません。また、神様を中心としても、心が体を保護し労わり愛情を注ぎ、それに対して体が心の注ぐ愛情に感謝をして喜んで従うというような関係でなければ、心身の一体化は難しくなると思います。墮落人間は心と体の主管性が転倒していますので、心がいつも体に蹂躪されているというのです。そのようなポイントが見えてくると、心身の統一には強靱な意志力が必ず必要であるとはいえないことも見えてきます。

次に第二祝福ですけど、これは家庭における夫婦の一体化を意味します。ここでも、ポイントは円滑な授受作用なのです。愛情の伴った円滑な授受作用を神様を中心として行えば、自然と夫婦は一体化するというのです。間違えてはいけないのは、神様を抜きにしてこの世的な恋愛のように夫婦で愛情を交換しても、その一体化が永存することは難しいということなのです。また、祝福を受ければ、夫婦において愛し合う努力をして、円滑な授受作用を行うように努力、実践するのが私たちであり、決して蕩滅だからと夫婦がけんかばかりをしてはいけないというようなことも指導されます。その夫婦の一体化の基準の上に子女が授けられるというのです。

第三祝福は家庭を構成する人間が万物と授受作用して天国を形成することを意味します。住んでいる家、使っている道具、家庭用品、すべてが万物です。この万物に対して、人間が愛情を注ぎ、時には掃除をし、道具の手入れをし、故障をすれば修理をし、万物が本来持っている機能を引き出してあげて、人間を喜ばせる万物の満足を引き出してあげれば、住んでいる家庭環境が天国化するというのです。愛情を注いだ万物に囲まれ、自分を愛してくれる万物に囲まれて生活できるとすれば、それは本当に天国を実感できますし、住居に限らず近くの公園に行けば季節に応じて草木が自然の美しさを私たちに提供してくれることも、環境の天国化を意味すると思います。

このように三大祝福は私たちの喜びの基本であると同時に、神様も共に喜ばれる基本でもあるのです。私たちの実践の目的も個体目的としてはこのような目的があるというのです。皆様はしっかりと意識されていますか？

## 【御言】

### 創造目的完成

・このように神様の創造目的が完成されたならば、罪のない理想世界が地上に実現されたはずであって、このような世界を地上天国といいます。

・天国は、神様の命令が人類の真の父母を通して、すべての子女たちに伝達されることにより、みな一つの目的に向かって動じ静ずるようになるのです。

## 【感想】

三大祝福が完成された世界が実現されていれば、地上は天国になっていたというのです。ですが、現実とはありません。科学が人間の生活を豊かに安楽にしたと言っても、多くの人々が苦悩の地獄のような中で生活しているというのです。なぜこうなってしまったのかというのが、人間

の墮落の故なのです。墮落については墮落論で紹介しますので、ここではあえて説明はしません。ただ、罪のない世界、犯罪のない世界というのはまさに天国だと誰しもが思うでしょう。

人間が神様を中心として、万人が隣り人のために生きるとするならば、そのような社会は自然と天国にならざるを得ないというのであり、キリスト教の発展の原点もここににあります。これはキリスト教社会では黄金律とも呼ばれ、発展の基本原則とも呼ばれています。ですが、聖書でも述べられているように、人間は人を愛する前に何よりも神様を愛すべきであり、神様の喜ばれる生活をすべきなのです。

そして、天国の中心は神様であり、神様の意向は真の御父母様を通じて人類に伝達されるということなのです。ですので、どんなに優秀で立派な人格者だとしても、真の御父母様と出会うことができなければ、その努力は神様の意向とは関係のない努力であり、神様の喜ばれるものにはなりにくいのです。

逆に真の御父母様から神様を意向を受け、それを果たすために責任分担に尽力している家庭連合の食口たちは神様の願いを直接に受けているので、その果たした実績の功労は計り知れないということなのです。

このように、天国とはこの世的な王国なのではなく、真の御父母様をメシヤとして侍る国でもあるのです。この世的な主君との決定的な違いは、御父母様は神様の意向で天国を指導されるということなのです。家庭連合の食口とは責任分担という天の命令、つまりは天命を受けている人でもあるのです。

## 【御言】

### 第4節 創造本然の価値

#### 創造本然の価値の決定とその価値の基準

- ・ある個性体の創造本然の価値は、その個性体(対象)と、人間主体とが、神様を中心として、創造本然の四位基台を完成するときに決定されます。
- ・この四位基台の中心が絶対者であられる神様であるから、この価値の基準も神様であり、これに対して相対的に決定されるあらゆる対象の創造本然の価値も絶対的なのです。

## 【感想】

私たちの生活圏には万物があふれています。その万物において、必要のあるもの、必要のないものと判断され、それによって私たちは万物の価値を決定しているようなところがあります。ですが、その価値判断は本当に正しいのでしょうか。

人間を中心として判断すれば、ある人はAという万物が必要であっても、他の人には不要であることがあります。また、ある人には全く関心がなくても、ある人には絶対必要だという判断もあります。そのように、ただ人間だけを中心とすると万物の価値とは相対的で、人によって様々に異なってきます。

ですが、万物本来の創造本然の価値とは、創造目的の第三祝福において人間と万物が神様を中心とした四位基台を形成したときに決定されるので、その価値基準は神様であるがゆえに絶対的になるのです。つまり、神様が必要とされるものが価値が高く、神様が必要とされないものが価値が低くなるという判断基準が明確になるのです。

ですので、私たちの間では神様が必要とされるものはとても高く評価され、神様があまり必要とされていないものは高い評価はされないという事情もあります。ですので、天が今何を願われているのかということで、価値判断もなされているのが私たちなのです。

ですので、神様が悲しまれる淫乱の産物には神様は相対されませんので、私たちもそれには相対することなく、全くの価値を置かないというのが現状なのです。

そして、私たちの献金も神様が望まれるという基準があるので、一般的なお金よりもはるかに価値が高くなるのです。その意味で、経済摂理は間違いなく生き金だと私は思います。

## 【御言】

### 第5節 被造世界の創造過程とその成長期間

#### 被造世界の創造過程

- ・宇宙は時間性を離れて突然に生成されたものではなく、相当な時間を要しました。
- ・創世記1章にある天地創造を完了するまでの6日というのは、日の出と日没の回数によって計算される6日ではなく、創造過程の6段階の期間を表示したものです。

## 【感想】

現代において、キリスト教の聖書ではこの天地は6日で創造されたと書かれており、科学では宇宙の誕生は何億年もかかり、今に至っているとしています。この矛盾ゆえに聖書は非科学的であるという論述も出てくるかもしれませんが、創造原理ではその矛盾点の解決に6段階の創造過程という概念を紹介しています。

原理では現代科学の主張するように、この宇宙の誕生、人類の誕生において、相当な時間を要したということを受け入れています。それであるがゆえに、聖書はなにゆえに6日と言ったのかということを経々々に解釈されたのだと思います。そして、6日というのが日が昇り、日が沈む 24 時間の1日ではないということを経明されたのです。

ただ、この6日を6段階と解釈すると、各段階で起こる出来事は現代科学の主張するものとほぼ一致するものとなり、人類の誕生の6日目がいかに長い時間がかかった結果であるのかということを経明しています。

つまり、神様は魔法で呪文を唱えるように、フワッと何も無い空間に万物を誕生させたのではないということです。長い時間をかけて、この宇宙を創造されたということです。これはあらゆる物づくりにおいて共通しています。設計図を描いたからと言って、ドンとその設計図どおりの万物が誕生するわけではないのです。その設計図を元に時間をかけて万物を色々加工して組み立てて、製品は完成します。

このように創造原理を良く理解すれば、物事は完成するまでに時間がかかるということを理解できるようになるのです。それであるがゆえに、かかる時間を考慮して早めにスタートダッシュをしないといけなことが往々にしてあります。

2020 年の摂理成就も 2020 年に瞬間的に成されるのではないのです。今からダッシュしないと間に合わないので、摂理は今も急がれているのです。

## 【御言】

### 被造物の成長期間

- ・神様は初めの日の創造が終わると、「夕となり、また朝となった。第1日である」(創世記:1:5)と言われました。
- ・夕から夜が過ぎて、次の日の朝になれば、第2日であるにもかかわらず、第1日であると言われたのは、被造物が夜という成長期間を経て、朝になって完成したのち、初めて創造理想を実現するための出発をするようになるからです。

## 【感想】

神様は段階を踏まれて創造をなされたのです。ですので、一気に今の世界ができたわけではありません。6段階においても一つの段階が完成するのを待って、神様は次の段階の創造に着手されたのです。

真のお父様の摂理も、ある段階が終了すると、そこで様々な宣布をされて、区切りをつけられて次の摂理に進まれました。この手法はあらゆる物づくりに共通します。

よく完成図を見て、頼むほうはいきなり完成品が登場するような期待をするようなことがあるかもしれませんが、これは本然ではありません。製作プロセスというものをしっかりと踏んで、各プロセス

の完了において不備がないことを確認してから、次のプロセスに進むのではないのでしょうか。神様の創造もそうだったというのです。

ですので、何かビジョンを達成しようとするのであれば、そのビジョンの達成に至るまでのプロセスを6段階に分けて、中間目標を明確にして、進めるというのが原理的なのではないかと思います。日本人は期限ギリギリまで追い詰められないと本気にならないという性格もあるかもしれませんが、それでは間に合わないのです。摂理は試験直前の一夜漬けのように達成されるものではありません。ここで示されているように、しっかりと6段階を成長期間をもって達成して、階段を登るように達成されるというのです。

それであるがゆえに、真のお母様は急がれるのです。それは、ビジョン 2020 を達成するには、ここで示される段階的な成長期間が必要であることを分かっておられるからではないのでしょうか。人間の成長には時間がかかります。ですので、本当に今からでも急ぐべきなのです。

霊界に旅立つ直前に慌てても遅いのです。なぜでしょうか。成長期間という時間がかかることを知らないからなのです。賢明な人は普段からコツコツと積み重ねることを覚えています。それであるがゆえに土壇場で慌てないのです。ビジョン 2020 の摂理は今が重要なのです。そして、最後まで気が抜けないのが現実なのです。皆様はいかがですか？

### 【御言】

成長期間の秩序的3段階

- ・すべての被造物が完成するに当たっても、その成長期間は、蘇生期、長成期、完成期の秩序的3段階を通じてのみ完成します。
- ・人間は成長期間の3段階を完成できずに墮落し、創造目的を完成できなかったのも、この目的を再び完成するに当たっても、この3段階を通過しなければなりません。
- ・人間始祖は、長成期の完成級で墮落しました。

### 【感想】

人間の成長においても蘇生期、長成期、完成期があります。この3段階を完成できていないのです。墮落人間は。そして、私たちもその完成を目指して、成長している途上なのです。ですから、墮落論でも学ぶかもしれませんが、人間は墮落することによって、蘇生期よりも下の段階に落ちてしまったので、その人間が完成するためには、ここで示される3段階を全部通過しなければならないということなのです。

ですので、人間を救うには、一気に天国に引き上げるということができないのです。成長期間というものがあり、この3段階を原理的に通過して、成長するという過程を経て、初めて私たちは完成することができるのです。

そして、人間始祖が墮落したのが長成期の完成級だったというのです。それは、まさに今の時代という思春期であり、これから大人になろうとする前に落ちてしまったというのです。

ですので、皆さんも救われるためには、このような3段階を通過するというのです。ですので、自分がどの段階にいるのかということをしっかりと把握しておく必要があるというのです。離乳食を必要とする赤ん坊に成人のご飯を準備しても食べられません。それは消化不良を起こして、栄養になることなく、生命の危険にもなります。同様に、皆様の信仰レベルをしっかりと自分で掴んで報告しておかないと、レベルに合わない栄養を与えられて、成長できないということもありえるのです。

これには信仰歴などは関係ありません。心霊の成熟度というのが分かれば、自然と自分に必要なものが用意されるのです。ですので、信仰において重要なのは背伸びをしないことだと思います。逆に卑下しても成長の糧にはなりません。等身大の自分をしっかりと見つめて、今の自分に何が必要なのかと神様に尋ねてみると、神様は今の自分に必要なものを準備されていることに気づくものだと思います。

このように、私たちは3段階を全部通過するのです。ですから、この道を歩み始めるには早いほう

がよいのです。年をとってからこの道に来よう考えることは、成長期間が見えていないからなのではないでしょうか。

それでは、皆さんは自分を見つめて分かっておられるのでしょうか？ 自分は今、どの段階にいるのかを。ぜひ、自分に聞いてみてください。それで分からなければ、祈ってからアベルに相談してみてください。適切な報告は適切な指導という大きな恩恵を受ける条件になると私は思っています。

### 【御言】

#### 間接主管圏

- ・神様は被造物が成長期にある場合には、原理によって成長する結果だけを見るという、間接的な主管をされるので、この期間を神様の間接主管圏、または原理結果主管圏と称します。
- ・万物は原理自体の主管性、または自律性により、成長期間を経過することによって完成します。
- ・人間は原理自体の主管性や自律性だけでなく、自身の責任分担を全うしながら、この期間を経過して完成します。

### 【感想】

ここでの重要なポイントは、私たちがまだ神様の直接主管圏に入る前においては、神様は私たちの実績という結果だけを御覧になって摂理されるということです。ですので、どのような方法で実績を立てたのかということとはあまり問われず、時には帳尻を合わせるように実績を提示しても摂理は進んできたという経緯もあります。

そのような神様の主管圏を原理結果主管圏、間接主管圏と言うのです。ですので、実績を達成する方法は私たち人間に委ねられていたので、人々は様々な方法を考え、実績を立てるために奔走したと思います。

ですが、神様の直接主管圏に入ると、その結果だけではなく、神様はプロセスも主管されるということです。どのように生活し、どのように実績を立てるのかということも、主管される世界に入りますので、数字だけで帳尻を合わせる習慣性をもってしては通用しないという世界もあるのです。

そして、私たち人間が成長するにおいては責任分担が不可欠であるということです。皆様も様々な責任を担われていると思います。時には、経済や伝道の実績追求が来るかもしれませんが、それは責任を与えられている証でもあり、その責任を果たすために努力する生活が、自分を成長させているということになるのです。

ですので、その点が万物とは異なるのです。もちろん、天使との違いでもあります。天使には責任分担がなく、原理の自律性と主管性によって完成するようになっています。

ですので、責任分担と関係のない生活、人生においては、自身の復活も進まないというのが現状なのです。ですので、人々は皆、自己の責任分担を探し求めてさまようのです。教会から責任を与えられていれば、それが責任分担かもしれません。ですが、責任をもって創造目的を達成しようとする行為がすべて責任分担とも言えるのではという広義の解釈もできるのではと思いました。

### 【御言】

#### 人間に責任分担をくださった理由

- ・神様が、人間がそれ自身の責任分担を完遂して初めて完成されるように創造されたのは、人間が神様も干渉できない責任分担を完遂することによって、
- ・神様の創造性までも似るようにし、神様の創造の偉業に加担させることによって、神様が人間を主管なさるごとくに、
- ・人間も創造主の立場で万物を主管することができる主人の権限をもつようにするためでした。
- ・人間が万物と違う点は、正にここにあります。

## 【感想】

神様はなぜ私たちに責任分担を与えられたのでしょうか。その理由が簡単に紹介されています。この被造世界は神様が創造されました。したがって、その所有権、主管権は神様にあります。つまりは、人間は本来の神様に創造された被造物としての存在で、万物を主管できる資格はなかったのです。

そのような人間に、自分の責任において、自分を成長させ、自分を創造したということを条件として、宇宙を象徴する人間の創造に私たちが加担したと認定されて、神様は被造世界の主管権を人間に与えようとされたのです。

従って、人間が万物を主管できる権限というのは、人間が神様に似るように成長してこそ与えられるのであって、責任分担とは関係なく、墮落した生活をしている人間は、神様に似ることもできず、自己を成長させることもできずに、万物を主管する権限も与えられないということです。それであるがゆえに、多くの墮落した人々は万物に主管されているのです。

このような観点から見ると、何ゆえに第三祝福の万物主管が三番目なのかということもお分かりになると思います。第三祝福は、第一祝福である、自身が成長して神様に似るものになることが前提になっているのであって、順番を間違えると万物に主管性を転倒されてしまう危険もあると思います。

人間には責任分担が与えられているのです。空を飛ぶ鳥のように自由に生きることはできないのです。本当の自由は責任を離れては存在しないのが人間の自由なのです。これが動物世界の自由と人間の自由との決定的な違いなのです。

## 【御言】

### 直接主管圏

- ・神様を中心として、ある主体と対象が四位基台をつくり、神様と心情において一体となり、主体の意のままに愛と美を完全に授受して、善の目的を完成することを直接主管といいます。
- ・したがって、直接主管圏とは直に完成圏を意味します。

## 【感想】

間接主管圏では歩みの結果だけを見て、成長期間を主管されました。これが直接主管圏に入ると神様と心情的に一体化するというのです。そして、神様の願われるままに、神様から愛され、神様に美をお返しし、四位基台を完成するようになるのです。

創造目的は四位基台の完成を意味しますので、それは善の目的の完成を意味します。そのような世界に御父母様はおられるということです。神様と完全に一体化され、神様の体となられた御父母様は、神様と愛と美の授受作用で四位基台を形成されているということです。

ですので、神様の意のままに人生を歩むことを意味しますので、これは結果だけではなく、プロセスももちろん主管されることになります。

よく何事も結果が全てだと言われることもありますが、これは成長期間に言えることなのです。

ですから、私たちが真の御父母様から相続する伝統とは、このように神様と心情的に一体不可分になった、創造目的を完成するという伝統を相続するのです。御父母様に似る者になるということは、御父母様のように創造目的を完成しようということ、つまり、成長期間を成長し、御父母様のように完成することを似ようということです。

ですので、外見的な活動や行動を似ようというのは、本来の性相的な伝統を見失っていると言っても過言ではないと思います。そして、真の御父母様から教えられる私たちのゴールもここで示されるように、神様の直接主管圏に入るまで成長することなのです。

ですので、未完成期にいる信徒を御父母様が眺められる時に、早く直接主管圏に入れるように責任を果たしなさいとプッシュされるのではないのでしょうか。なぜなら責任を果たすことを通じて、私たちは成長するからなのです。そして、個人的、家庭的なゴールとはこの直接主管圏なのです。

## 【御言】

### 第6節 人間を中心とする無形実体世界と有形実体世界

#### 無形実体世界と有形実体世界

- ・被造世界は、神様の二性性相に似た人間を標本として創造されたので、
- ・被造世界は、体のような有形実体世界と、心のような無形実体世界があります。この二つの世界を総合したものを、宇宙と呼びます。
- ・人間が肉身を脱げば、その霊人体は無形世界に行って永住します。

## 【感想】

ここでは死後の世界、霊界のことを無形実体世界として紹介しています。肉身を脱ぐとは、肉体的な死を迎え、人間に入っている霊人体が、肉体から抜け出てくることを意味します。そのような霊人体は無形実体世界と呼ばれる霊界に行って永住するようになるということです。

ここで大切なのは霊界では私たちは永遠に生きるということなのです。地上ではわずか100年程度で寿命がきますが、霊界においてはそのような寿命がありません。本当に何万年も生きるということです。

ここではその霊界の存在を明確に紹介しているのです。この分野は科学や医学はまだ解明していない謎の部分かもしれませんが、原理は明確に存在するとして理論を展開します。

それであるがゆえに、私たちの教会では霊界を扱い、地上だけでなく、霊界でも幸福に暮らせるようにするためにはどのようにすれば良いのかという方法まで確立しているということです。

このように霊界に対する明確な知識を紹介しつつ、ここでは無形実体世界とその存在だけが紹介されていますが、真の御父母様の御言には霊界に関する膨大な御言もあり、その霊界で幸福な永生を過ごすためには、地上でいかに生きるべきかという、霊界の世界における病気の予防法も確立しています。これは万人に共通した理論であり、特定の宗教人に限定された内容ではありません。その意味において、これは科学的な真実でもあると私は思うこともあります。

## 【御言】

### 被造世界における人間の位置

- ①第一に、神様は人間を被造世界の主管者として創造されました。
- ②第二に、被造世界の媒介体であり、和動の中心体として創造されました。
- ③第三に、宇宙を総合した実体相として創造されました。

## 【感想】

人間とはこの被造世界においてどのような存在なのでしょう？ かつての人々は「人間とは？」ということで、思い悩み、そして様々な結論を出してきたと思います。そのような歴史において原理は一つの明確な解答を提示しています。

第一に、この被造世界の主管主として人間は誕生しているということです。ですので、人間は動物のみならず、植物やあらゆる生き物、さらには鉱物においてまでも、愛で主管することができるようになっているということです。人間が家畜の肉を食べ、植物の果実を食べ、鉱物を様々な電子機器として生活に活用しても、被造物は何らの不平を言うこともなく、人間に従っているのです。SF映画では動物や様々な生き物が人間を襲うという設定のものがありますが、それは人間が墮落したゆえの産物であって、創造本然の世界においては、動植物が人間に危害を加えることはありません。

さらに無形実体世界と有形実体世界の両方の存在を認識できるのが人間であり、霊界の事実を地上世界に反映させることも人間が担っているということです。そのような意味において、人間は無形世界と有形世界の両方を行き来できる媒介体でもあります。

そして、人間はこの地球を含む宇宙、のみならず無形世界である霊界を含めた世界の縮小体で

もあるということです。被造世界の全ての要素を人間は持ち合わせており、それであるがゆえに被造世界の全てのものに対することが可能になっているということなのです。

人間とはこのように創造本然の世界ではとても高い位置にあることが分かります。さらに詳しいことを学びたいと思われる人は、統一思想の本性論をひも解かれてはいかがでしょうか。この被造世界の中心が人間であるということが明確になると、宇宙人が人間を支配するというようなこともSFでは言われますが、これも明確に誤った認識だと私は思っています。私たち人間は、この被造世界を真の愛で主管する主管主なのです。皆様にその自覚はありますでしょうか。

### 【御言】

肉身と霊人体との相対的關係

- ・肉身は肉心と肉体の二性性相からなっています。
- ・霊人体は生心と霊体の二性性相からなっています。
- ・霊人体は肉身を土台にしてのみ成長し完成します。
- ・霊人体の善化も、肉身生活の贖罪によってのみなされます。
- ・天国でも地獄でも、霊人体がそこに行くのは、神様が定めるのではなく、霊人体自身が決定します。

### 【感想】

ここでは人間の構造というものが紹介されています。人間には霊なる部分と物質的な部分からできており、それをそれぞれ霊人体と肉身と呼びます。現代医学は主に肉身を治療の対象として扱いますが、霊人体の治療技術はまだほとんど解明されていません。

また、霊人体は肉身を土台として成長しますので、未成熟のまま他界したとすれば、その霊人はまた地上に降りてきて、誰かに協助しながら、その肉身の活動によって成長するというステップを踏みます。ですので、御父母様は地上で責任を果たしなさい、地上で成長して完成しなさいと強調されるのです。霊界に行ってしまったら成長はありませんので、また地上に降りてくるのが大変なことをご存知なので、そのように語られるのだと思います。

また、霊人体の善化も地上における肉身生活における贖罪によってのみなされます。ですが、今は時代圏が異なり、清平修練会などで先祖解怨、先祖祝福が進められており、地上人のわずかな精誠で霊界にいる多くの霊人が救われるという摂理も展開されています。

そして、霊界に天国と地獄がありますが、どちらに行くのかは閻魔大王様が閻魔帳を見て決めるのではないのです。自分の人生をずっと記憶として引きずりながら、自ら進んで自分にふさわしい霊界に行くということです。ですので、地上で悪をなせば、それは霊界に行くとき、全ての人の前にさらけ出されることになり、それゆえに自分を罰せずにはいられない霊界に行くということです。

天国に行くのは神様が決めるのではないのです。ましてや御父母様が決めるのでもないのです。何よりも問われるのが、自分が天国にふさわしい霊人体に成長しているのかどうかなのです。地上においても霊人体の成長度合いに応じた人が集まるようになっていると思います。皆様はどのような霊界に行くと思われますか。その行くべき霊界を今の生活が決定しているのです。

### 【御言】

#### 第2章 墮落論

- ・人間はだれでも、善に従おうとする本心の指向性をもっていますが、自分も知らずにある悪の力に駆られ、願わざる悪を行うようになります。
- ・キリスト教ではこの悪の勢力をサタンと呼びます。
- ・人間が、人類の罪惡史を清算して、善の歴史を成就するために、
- ・サタンがサタンとなった動機と経路とその結果を解明する、墮落論を知らなければなりません。



## 【感想】

総序では、人間には善を指向する本心の欲望があることを紹介しましたが、それとは反対に悪の力にかられる邪心の欲望も人間にあることは紹介しました。このように、人間には、悪を行う力も働いているがゆえに、原理では人間を全くの善なる存在とは見ていません。

私たちは悪魔、サタンの血統を受けて生まれており、その体の中にはサタンの行いたい欲望が渦巻いているということです。では、このサタンとはどのような存在なのでしょう。神様がサタンを創造されたのでしょうか。それとも、サタンとはもともと神様が善を目的として創造されたものが何らかの理由によってサタンになってしまったのでしょうか。

そのようなことを、この墮落論では説明してくれています。私たちが墮落論を良く知るということは、復帰されていない人間の墮落性を理解することを意味し、自分のかかっている病気をしっかりと自覚することを意味すると思います。

サタン誕生の秘密を明らかにし、そのサタンが誕生した結果として、人間はどうなってしまったのかを解明されたのが墮落論であり、創造原理が適用されない現実がなぜ存在するのか、現実世界はどのようになっているのかを明確にするのも、この墮落論だと思います。

この墮落論は自分の悪なる部分を見つめることになりますので、時として見たくないことまで見ないといけないこともあるかもしれません。ですが、どんな病気でも病状を自分でしっかりと自覚しないと病気とは治療ができないものです。皆様はそのような自分の邪心を見つめる勇氣はありますか。墮落論では自分が何ゆえに悪なる病気にかかっているのかを明確に紹介してくれると思います。

## 【御言】

### 第1節 罪の根

- ・今まで罪の根が何であるか、知る者は一人もいませんでした。
- ・ただキリスト教徒のみが、聖書を根拠として、人間始祖アダムとエバが善悪を知る木の果を取って食べ、それが罪の根となったということを漠然と信じてきました。
- ・彼らは善悪を知る木の果が、文字どおり何かの木の果実であると信じてきました。

## 【感想】

私たちの罪の根本原因は何なのでしょう。何ゆえに私たちは邪心に翻弄されなければならないのでしょうか。日本では先祖の生活が悪かったからとか、育った環境が悪かったからとあれこれと考えますが、キリスト教にはそのような罪のより根本的な原因として原罪を考えているのです。私たちの教会でもこの原罪をあらゆる罪の根本であるとして、いかにこれを贖罪するのかということを重要な信仰のポイントとしています。

何ゆえにサタンが私たちに対して所有権を主張するのかというその根本的な理由が今まで人類は解明できていなかったということです。ただ、聖書には人類始祖のアダムとエバが善悪を知る木の果を取って食べたがゆえに、罪の根が生じるようになったと書かれています。

既存のクリスチャンの方々は、この善悪知る木の果をりんごや桃、あるいは他の果実であると解釈して、人間はフルーツを食べて墮落してしまったと信じている人もいるということです。

統一原理では、この部分を聖書の文字どおりには解釈しません。この部分も他の部分と同じように、何かを比喻したものであると解釈し、善悪を知る木とは何なのか、その木の果とは何なのかということを説明しています。

もし、アダムとエバがフルーツを食べて、それが罪となり、墮落したのであれば、当然、食べた口を隠すはず。ですが、人間始祖はそうではありませんでした。

皆様はそんな危険な果物があつたらどうしますか？ 神様はそれを見れば美しく感じるように造られていたということです。現代でいえば、毒の含まれた植物として、決して口にしないように、その知恵というものが広まるはず。ですが、現代においても、この墮落という毒は、この世的に蔓延していると言っても過言ではないのです。皆様は大丈夫だと思われますか？

### 【御言】

- ・しかし、父母としていまし給う神様が、子女たちが取って食べて墮落する可能性のある果実を、食べるに良く、目には美しくつくられ、たやすく取って食べられる所に置かれるはずがありません。
- ・食物が原罪を遺伝する要因とはなり得ません(マタイ15:11)。
- ・愛の神様が、人間に死を伴うような方法でもって、試みをされたとは考えられません。
- ・アダムとエバが食物などのために、死を覚悟してまで、神様のみ言を犯したとは考えられません。
- ・それゆえに、善悪を知る木の果は物質ではなく、生命をも問題視しないほどの強力な刺激を与えることのできる、何物かであるに相違ありません。

### 【感想】

創造原理でも紹介されているように、神様は私たち人類の父母としておられ、私たち子女が誕生する前には本当に真心を込めて環境を準備されました。そのような神様が、食べると墮落するような可能性のある果実を、それも目には美しく見えるように造られるのでしょうか。そのようなことはないという原理は説きます。

さらに、人間が食べたからと言って、その毒性が遺伝するようなことがあるのでしょうか。どんな毒を食べたとしても、個人が死ぬだけで、その毒性が遺伝するということはありません。それに、そのような食べ物のためにアダムとエバが死を覚悟してまで神様の戒めを破るとは考えられません。餓死するほど空腹であるというわけでもなく、エデンの園ではどの木からも取って食べても良いと言われていたのですから。

そのような理由から、善悪を知る木の果は文字どおりの樹木の果実ではないという原理は結論付けています。では、何なのでしょう。私たちにおいても考えてみてください。人生において、死をも省みないほどのものが存在したのでしょうか。そのような生命も問題視しないものとは、私たち人間においては愛より他にないということです。

そのように生命をも問題視しない刺激を人間始祖も、そして私たちも感じて、知らず知らずのうちに墮落行為を繰り返しているというのです。

もし、貴方の人生において、生命を省みないほどの愛を経験したことがないというのであれば、それは不幸な人生か、守られていた人生なのか、そのどちらかではないかと思います。皆様は人生においていかがでしょうか。

### 【御言】

- ・聖書の多くの主要な部分が、象徴とか比喩でもって記録されています。では善悪を知る木の果は何を比喩したのでしょうか。
- ・これを解明するために、創世記2章9節の「善悪を知る木」と共にあったという「生命の木」が何であるかをまず調べてみましょう。

### 【感想】

ここで食べて罪となった善悪を知る木の果というものが何なのかということを説明してゆきます。まず、この木の果の本体である善悪を知る木とは何なのかということ、原理は解説してゆきます。

聖書では多くの部分が比喩で語られており、この善悪を知る木も何かを比喩したものであるという原理は説明します。では、それは何なのでしょう。聖書をよくよく読んでみると善悪を知る木というのはほとんど登場しないのです。ただ、墮落の場面でのみ登場するのであれば、これが何であるかということは考えることは難しいでしょう。

そこで、善悪を知る木と一緒にあったという生命の木に着目したのです。生命の木は墮落の場面だけでなく、そのほかの聖書の部分でも登場しており、その用いられ方から、何を比喩したものであるのかということが説明できるのです。

この生命の木と善悪を知る木がエデンの園でペアとして存在していたことを私たちは墮落論の

初めで理解しています。

では、皆様は何だと思えますか？ 原理はこれは植物の樹木ではないと明確に説明します。これまでのキリスト教はこの木を植物の樹木だと信じてきたというのです。皆様はいかがでしょう。善悪を知る木とは何だと思えますか？

### 【御言】

生命の木と善悪を知る木

- ・「生命の木」とは、すなわち「創造理想を完成した男性」です。それはすなわち、完成したアダムを比喻した言葉です。
- ・「善悪を知る木」というその木は、「創造理想を完成した女性」を象徴するものです。それはすなわち、完成したエバを比喻した言葉です。
- ・聖書に、イエスを「ぶどうの木」(ヨハネ 15:5)、あるいは「オリブの木」(ロマ 11:17)に例えているように、神様は人間墮落の秘密を暗示なさるにおいても、完成したアダムとエバとを、二つの木をもって比喻されたのです。

### 【感想】

聖書のいくつかの場所に登場する生命の木の意味を、その共通性から探ってゆくと、生命の木とは完成したアダムを比喻したものであるということが分かるのです。完成したアダムとはどういうことかという、神様の創造理想を完成した男性ということになります。

このような生命の木とペアになって、エデンの園にあったというのが善悪を知る木ということなので、善悪を知る木とは、ここから創造理想を完成した女性であるということが分かります。つまり、完成したエバを比喻していたというのです。

このように、神様は人間の墮落の秘密を比喻で表現されるにおいて、完成したアダムとエバを木をもって比喻されたというのです。

私たちはそのような説明を聞いて、はいそうですかと信じるだけで、そのような真理を探究され、血のにじむ苦労の末に発見された内容を、受け取れるという恩恵圏内にいるというのです。

もちろん、いやそんなことは信じられないと、原理の説明を否定するのも人間の責任分擔いかんです。ですが、この説明を否定するということは、この真理を探究するに払われた多大な苦労の恩恵を拒むことに等しいのです。

このように、墮落の根源としての原罪は、人間の始祖であるアダムとエバにおいて、愛の問題によって生じたということがお分かりになると思います。そして、愛の問題は遺伝するのです。これは罪が遺伝するという真理を物語っているのです。

つまり、墮落とは、本来、神様の創造理想として完成すべきアダムとエバにおいて、生じた大きな問題だったということなのです。ですので、その罪はめんめんと私にも、貴方にも受け継がれてきているというのです。それであるがゆえに、私も救い主が必要だったのです。そして、貴方にもです。

### 【御言】

蛇の正体

- ・エバを誘惑して、罪を犯させたものは蛇であったと聖書に記録されています(創世記 3:4～5)。

- ① この蛇は、人間と会話を交わすことができました。
- ② そして、霊的な人間を墮落させた霊的な存在であり、
- ③ 善悪の果を食べさせまいと、計らわれた神様の意図を知っていました。
- ④ 巨大な龍、すなわち、悪魔とか、サタンとか呼ばれ、全世界を惑わす年を経たへびは、(天より)地に投げ落とされたという内容を見る時、この蛇の所在は天でした(黙示録 12:9)。
- ⑤ 時間と空間を超越して、現在も人間の心霊を支配し得る存在です。

## 【感想】

失楽園の物語でエバが善悪を知る木の果を食べるように誘惑した存在が蛇だと聖書に記録されています。では、この蛇は文字どおり、爬虫類の蛇なののでしょうか。ですが、地上の爬虫類の蛇とすると聖書の記述はあまりにも理解できないというのです。その蛇の特徴がここで紹介されています。

これから考えると蛇も善悪を知る木のように何かを比喻したものであると考えるのが妥当だということです。では、その蛇とは何を比喻したものなののでしょうか。それを考えるにおいて、この蛇の特徴をじっくりと見てみます。

まず、人間と会話をする事ができたというのです。エバと話す事ができたというのです。動物が人間と会話をするというようなことはないでしょう。

そして、霊的な人間を墮落させることのできた霊的な存在であったというのです。さらに善悪を知る木の果を食べてはならないという神様の戒めを知っていたというのです。

さらに、その蛇は天より投げ落とされたというのですから、その存在は天にあったというのです。つまりは、本来は神様と共に存在していたある存在がサタンとなり、地に投げ落とされたというのです。

最後に、時間と空間を超越して、現在も人間の心霊を支配しえる存在であるというのです。最後がポイントなのですが、サタンとは時間と空間を超越していますので、地上の墮落人間を今も支配しているというのです。つまり、私たちもサタンを分立できなければ、サタンの支配下に留まっているということを意味します。

この蛇はサタンを指しているということは、ここから分かりますが、サタンとは墮落してサタンとなったのです。では、本来、天において神様と共にいた時のサタンとはどのような存在だったのでしょうか。皆様には分かりますでしょうか。

## 【御言】

- ・このような内容から見て、この蛇は霊的存在です。
- ・この霊的存在は、元来善を目的として創造されたある存在が、墮落してサタンとなったものであると見なさなければなりません。
- ・天使以外にこのような条件を具備した存在はないので、
- ・この蛇は、天使を比喻したものであると見ることができます(ペテロⅡ 2:4)。

## 【感想】

前回のブログから蛇とは何を比喻したものなのかということなのですが、これが霊的な存在であると明確に原理は説明しています。

この世の中には霊能者という方たちが存在され、様々な霊人を見たり、会話できたりするということで、紹介されています。ですが、このような霊と会話したり、交流することは、本然の人間においては基本的な能力として備わっているというのです。つまり、エバは霊なる存在である天使と会話をしたということなのですが、私たちも霊的な感性などを啓発することで、そのような霊人との会話も可能になるというのです。

ここで紹介されているように、エバを誘惑したのは天使であると明確に紹介しています。そして、ここまでの内容をまとめてみると、アダムとエバは愛の問題において、墮落したということ。その墮落において天使が関わっていたということが、ここまでの流れで理解できると思います。

天使はエバを誘惑したということは、天使は陰陽でいえば、陽的な存在であり、人間で言えば男性に相当します。その天使とアダム、そしてエバの間に起こった愛の問題とは。

ですので、私たちはこの道を歩むにおいて、天使といかに対するのかということ気をつけないといけません。墮落人間においては天使とはとても聖なる高貴な存在として見えるかもしれませんが。そのような天使に愛されたいという願望も生まれるかもしれません。ですが、それは人間本

来の相対ではありません。人間とは天使に愛されるのではなく、天使を愛して主管する位置に本来は立たなければならないのです。

皆様はいかがでしょう。天使の導きと誘惑を分別できる内容を持っていると思いますか。ですの  
で、霊的な人は霊的な啓示だけで動いてはいけないのです。きちんと原理的なかどうかという分別を持たないと、不幸の落とし穴があることを忘れてはなりません。

神様も天使を遣わされます。サタンも天使として、一緒に投げ落とされた仲間がいます。さて、皆さんは神側の天使なのかサタン側の天使なのかということを分別できますか？ これができないと、霊的に混沌となってしまう、本流からずれてしまうということも起こりえるのです。それであるがゆえに、絶対的に神側である絶対善霊の存在が私には大きいと感じています。

## 【御言】

### 天使の墮落と人間の墮落

- ・ユダ書 6～7 節を見ると、天使が姦淫によって墮落したという事実を知ることができます。
- ・創世記 3 章 7 節を見れば、アダムとエバが下部で罪を犯したという事実を推測することができます。
- ・ヨハネ福音書 8 章 44 節の『あなたがたは自分の父、すなわち、悪魔から出てきた者であって』という聖句をみると、
- ・人間と天使との間に淫行関係が成り立ったであろうということは、うなずくことができます。

## 【感想】

天使は姦淫によって墮落したのです。姦淫ということは相手がいるはずですが。その相手とは誰なの  
のでしょうか。さらにここでは、アダムとエバも下部で罪を犯したという事実を紹介しています。失楽  
園でアダムとエバはどこを隠したのでしょうか。それがとりもなおさず、人間の下部、生殖器ではな  
かったのでしょうか。

そのような事実をまとめてみると、人間始祖のアダムとエバは、本来はペアとして創造されていて  
愛の関係を結ぶはずだったのに、そこに人間ではない天使が入り込み、エバと愛の関係を結んで  
しまったというのです。ゆえに、天使と人間の間に愛の関係が結ばれてしまったということなの  
です。

淫行という言葉が使われていますが、これは精神的な愛情関係でとどまることができず、霊的な  
肉体である霊体において、性的な関係がもたれてしまったということを意味します。

ですので、霊的な感性の敏感な人は本当に気をつけないといけないのです。天使が愛を求めて  
近づいてきたとき、それからしっかりと自分を守らなければならないのです。特にこの道に来て、神  
様の愛を受けるようになると、皆さんは輝いて見えるようになります。その輝きに非原理の人々が惹  
かれてしまうことがあるのです。

ですが、その誘惑に陥り、愛情の関係、さらには肉体的な性関係を結んでしまうと、これはまさに  
墮落論そのもので、相手の男性がサタンになってしまうというのです。

このような悲劇の影響は当事者のみにとどまりません。その影響は拡散され、社会や国家の興亡  
の運勢をも左右するというのです。ですので、大帝国ローマも内的には淫乱で滅んだのです。

ですので、真の家庭運動は淫乱をことごとく悪として退けることを推奨しています。ですが、性行  
為そのものを悪としているわけではありません。人生を分かち合う配偶者とは健全な愛情に満ちた性  
的な関係を営むべきであると勧めます。いえ、多くの子女をもうけ、多くの子女を愛して、愛情の器  
を大きくすることも勧めていると思います。ただ、配偶者以外の異性との性的な関係を諸悪の根源  
として禁じているのです。

日本でなぜ家庭が崩壊したのでしょうか。明らかに性の営みの乱れ、淫乱によってではないで  
しょうか。では家庭を再建するにはどうすればいいのでしょうか。原理は逆の経路として性の営みを  
正し、社会から淫乱の弊害をなくしてゆこうとすることを提唱しています。

皆様は大丈夫ですか。どんなに異性にもてたとしても人生の配偶者は絶対的に1人なのです。

どんなに異性に縁がないと思っていても、その配偶者の1人は用意されているのです。私たちはその出会いをしっかりとサポートもしていると思っています。

### 【御言】

#### 善悪の果

- ・善悪の果はエバの愛を意味するのです。
- ・エバは、神様を中心とする愛をもって善の子女を繁殖しなければならなかったにもかかわらず、サタンを中心とする愛で悪の子女を生み殖やしました。
- ・エバはその愛をもって善の実を实らせることも、悪の実を实らせることもできる成長期間を通過して、完成するように創造されていたのです。
- ・したがって、エバが善悪の果を取って食べたということは、彼女がサタン(天使)を中心とした愛によって、互いに血縁関係を結んだということを意味します。

### 【感想】

ここで善悪の木の果とは何なのかということが紹介されています。善悪を知る木とはエバを比喻したものであり、その木の果とはエバの愛を比喻したものであるということです。エバは神様を中心とする愛をもって、アダムと夫婦となり、そこでアダムと本然の性の生活を営み、神様の善の子女を生み殖やすべきだったのです。

ところが現実には天使長がエバを誘惑し、天使長とエバの間に愛情関係が結ばれ、天使長とエバの間において不倫なる愛の関係によって、性的な関係がもたれてしまったということです。よくこの世的にも「女性を食べる」ということが「女性と性的な関係をもつこと」をさしていることもあると思います。このように善悪を知る木の果を食べるということは、天使長がエバと単なる精神的な愛情の関係にとどまらず、霊人体において、性的な関係を結んでしまったということを意味します。

ですので、エバは天使長の愛を受け入れ、エバの霊人体の生殖器は天使長の生殖器を受け入れてしまったということなのです。血縁関係を結んでしまうということは、こういうことではないでしょうか。

今の世の中には、結婚していながらも、配偶者以外の異性と性的な関係を持ったとしても法律的に罰せられることはないかもしれません。ですが、それは明らかに家庭を崩壊させます。人間同士でもそうなのですが、霊的な存在である天使との関係においてはもっと深刻だということです。天使の愛は人間や神様に愛されることを求める愛です。天使は人間の愛の対象であり、神様の愛の対象でした。ですから、神様や人間から愛情を受けたいという欲望が与えられています。人間が天使と性的な関係をもってしまうと、天使の素養である、愛されたいという思いが、愛したいという思いより強くなってしまうのです。そのような愛の病気を遺伝的に受け継いでいるのが私たちなのです。夫婦において愛されることをお互いに求めてしまうと健全な家庭は壊れてしまいます。

ですので、霊的な分別力と備えが必要なのです。今は清平摂理があり、絶対善霊が私たちの家庭を守り、導いてくれる時代圏にあります。誰から守るのかということです。それが天使であり、霊的な輝きに惹かれてくる非原理的な霊だということです。皆様は大丈夫ですか？

### 【御言】

#### 罪の根

- ・罪の根は、人間始祖が蛇に表示された天使と不倫なる血縁関係を結んだところがありました。
- ・したがって、彼らはサタンの悪の血統を繁殖するようになったのです。

### 【感想】

不倫とはどういうことかということ、本来はアダムとエバが夫婦となり、神様を中心として善なる家庭を築くのが神様の理想であり、エバの本来の愛の相対はアダムだったのです。ところが、エバはアダムとは異なる天使長と性的な関係をもってしまったということです。これが不倫ということになるの

です。

その結果、どうなったのでしょうか。エバは天使長と一体となり、天使長と一体となったエバとアダムが肉体的な性関係を持つことで、アダムと天使長が一体となってしまったのです。このように、本来は神様と一体となるべき人間が、天使長と一体となってしまう、その血統を面々と今の時代まで繁殖してきたというのです。

ですので、すべての諸悪の根源がこの性の問題にあったということを墮落論は提示しているのです。従って、性の秩序が乱れれば、家庭が崩壊するだけでなく、国家も滅亡することがあるのです。フリーセックスの洗礼を受けてアメリカは病める大国となり、日本でも家庭が崩壊して国力はどんどん低下していったという事実があります。

今でも日本では風俗営業が認可されている状況も残されており、そのような性の乱れとその乱れを正す動きが入り混じっていると言っても過言ではないかと思えます。

そのような状況下で私たちの真の家庭運動は、このような墮落論を根拠として、社会から淫乱の弊害を減らすように運動し、性の秩序を正すことが家庭を再建することにつながるとして、純潔、貞操を守ることを主張しているといえるのではないかと思います。

このようにサタンの血統を受けているといいますが、血統は愛を通じて継承されてきます。自分の心にわいてくる愛情が神様につながっているのか否か。これは幸福な家庭を営む上において大きな問題になると私は思っています。

## 【御言】

### 第2節 墮落の動機と経路

#### 天使と人間との関係

- ・神様は天使世界を他のどの被造物よりも先に創造されました。
- ・天使は神様の創造と、その経綸のための使いであり(ヘブル 1:14)、「僕」(黙示録 22:9)であり、「仕える霊」(ヘブル 1:14)であり、頌栄をささげる存在(黙示録 5:11、黙示録 7:11)として創造されました。
- ・神様は、人間を子女として創造され、被造世界に対する主管権を賦与されたので、人間は天使さえも主管するようにつくられています。

## 【感想】

人間と天使ではどちらが神様に近いのでしょうか。人間は墮落することにより天使をととても清い聖なる存在としてあがめるようになりました。そして、旧約時代においては、天使が人間を導いたとも言われています。そのような歴史を見ると、あたかも天使が人間を指導する、つまりは天使が人間より神様に近いかのように創造されていると普通は思われるかもしれません。

ですが、原理ではそのような位置関係が墮落の結果によって生じたものであって、創造本然の世界ではむしろその逆で、人間が天使を真の愛でもって主管するように創造されていたということなのです。ですので、天使に対する時、従いなさいと命令するではありません。天使が本来持っている価値を引き出してあげて、天使が満足する歩みを導いてあげて、その愛情に天使が喜んで従うようになるというのが本然の姿ではないかと思います。

ですので、天使は本来に人間の愛情による主管を必要とします。ところが墮落によって、人間は天使に愛されることを求めるようになったというのです。つまりは、主管性が完全に転倒しているのです。そのような人間を前に、天使は人間を様々な愛情以外のもので支配し、意のままに扱ってきたというのが人類歴史だということです。

ですので、私たちの信仰路程においては、愛されることを求める自分から愛することを実践する自分への変革がなされるのです。愛されることを求めるのは天使の素養だと私は思っています。そのような意味において、女性は男性に愛されることを求めるのではなく、男性を愛することを覚えてゆくのも私たちの信仰路程だと思います。

清平摂理では天使も役事をしていますが、これも大母様や興進様が天使をしっかりと主管しておられることが明確です。天使は霊なる存在です。そのような天使を真の愛で主管することを私たちは体恤してゆくのです。

ですので、天国は豊かに愛される世界だとイメージするのは天使的なのです。豊かに愛情を注ぐことを楽しみにしながら実践しているのが天国なのです。それであるがゆえに、愛情を注ぐ対象が必要なので決して一人では入れませんということではないでしょうか。

では、皆様はいかがでしょう。天使の協助を得ながら摂理は進みますが、そのような天使に皆様は愛情を注いでいますか。霊界の協助も私たちがいかに天使を主管するのかということが大きく影響しているのです。

非原理ではそのような関係はまったく見られません。天使を聖なる存在して仰ぎ見て、その指導に従うのが精いっぱいなのです。皆様はいかがでしょう。

### 【御言】

#### 霊的墮落と肉的墮落

- ・神様は霊的部分(霊人体)と肉的部分(肉身)をもって、人間を創造されたがゆえに、墮落においても霊肉両面の墮落が成立しました。
- ・天使とエバとの血縁関係による墮落が霊的墮落であり、エバとアダムとの血縁関係による墮落が肉的墮落です。

### 【感想】

人間の墮落においても、2通りの墮落が存在します。まず天使とエバとの間で生じた性的な関係による墮落と、墮落したエバとアダムとの間で生じた性的な関係による墮落です。これを原理では霊的墮落と肉的墮落として紹介しています。

このことから見てお分かりのように、女性であるエバは霊的墮落にも肉的墮落にも関わっています。それであるがゆえに、これまでの人類歴史においても、知らない内にも女性をより汚れた存在として扱うような風習が存在し、様々な主権が男性の手に握られてきたのも、アダムは霊的な墮落をしていなかったという大きな違いがあったからだと思います。

そのような事情から、神様の救いの摂理は、究極的には男性だけを救うのではなく、全ての女性を救わなければならないというものになります。ですので、宗教は女性が先駆けて復帰されるということが一般的であり、墮落したアダムに蹂躪されてきたエバを本然のエバに生みかえるのが男性よりも優先されてきたのだと思います。

霊的な墮落は天使との間において生じます。ですので、女性は特に気をつけないといけないのは、この世にも霊界を取り締まる法律がないために、霊的な無法地帯にこの地上世界は置かれているということなのです。ですので、神様の愛に触れて、神様に近づこうとすると、天使や悪霊が寄ってきて、単なる誘惑だけではなく、霊的な性関係を強要することもあるということなのです。その防備をしっかりと固める必要があるために、守護霊として絶対善霊の皆様の守りを得たり、天運石をもって霊界を整理しておくということが必須なのです。

同時に、なぜ本来結婚するはずのアダムとエバの性行為が墮落になったのかという疑問もあるかと思いますが、これは墮落したエバは天使と一体となっていたということが問題なのです。本来はアダムが神様と一体となり、その神様と一体となったアダムとエバが一体となることで、アダムとエバが神様と一体となる予定だったのです。ですが、逆の経路でエバが天使と一体となり、その天使と一体となったエバとアダムが一体となってしまったというのです。その結果、アダムも天使と一体となってしまったのです。このように肉的墮落の結果として、アダムまでもが天使と一体となってしまう、神様は一体となるべき人間を失ってしまったというのが墮落の経路なのです。

それであるがゆえに、この道においては、何をもってしても、自らのサタンを分立し、神様と一体となることを個人の第一目標とし、その神様と一体となった男性と女性が夫婦となって神様を中心



とした家庭を形成するというのが理想なのです。

ですので、この道に来て、いくら信仰的に熱心にサタンを分立した男性であっても、非原理のサタンと一体となっている女性の誘惑に負けて、肉体的な性関係を持ってしまうと、これは肉的墮落の再現であり、その男性は一気にサタンの主管下に落ちてしまうということなのです。これは女性も同じことが言えます。

ですので、教会では異性問題は特に厳格であり、異性問題で問題が生じると永遠の生命に関する問題に発展するために、日本では特に注意が払われています。

皆様は大丈夫ですか。それであるがゆえに、神様の願われる幸福な家庭とは個人だけではなく家族全員がサタンを分立して、神様と一体となることが不可欠なのです。

## 【御言】

### 霊的墮落の動機

- ・神様はルーシエルに天使長の位を与えられました。
- ・神様がその子女として人間を創造されたのちは、僕として創造されたルーシエルよりも、彼らをより一層愛されました。
- ・事実上、ルーシエルは、人間が創造される以前も、以後も、少しも変わりのない愛を神様から受けていたのですが、愛に対する一種の減少感を感じるようになったのです。
- ・ルーシエルは、自分が天使世界において占めていた愛の位置と同一の位置を、人間世界に対してもそのまま保ちたいというところから、エバを誘惑するようになったのです。これがすなわち、霊的墮落の動機であったのです。

## 【感想】

ここでは霊的墮落の動機が明確に紹介されています。その根本的な問題が愛の減少感だということです。愛の減少感と聞かれてピンと来ない方もいるかもしれませんが。簡単な例で紹介すると、皆さんが、親からお小遣いだよと3000円もらったとします。本当ならお小遣いをくれた親の愛情に感謝してうれしいはずですが。これが自分だけならそうでしょう。ところが、兄弟がいて、弟が実は親から5000円をもらっていたとします。そうすると3000円をもらった私は、3000円をもらえるほど親に愛されているにもかかわらず、弟と比較して、これを親に訴えて、自分も5000円欲しいと主張することなのです。そして、ついに親が納得しなければ、自分勝手に弟から2000円を取り上げて、自分が5000円を得てしまうという結末です。皆様にはそんなことがありますか。

ルーシエルは天使世界の頂点において、すべての天使が神様の愛をルーシエルを通して受けていました。ルーシエルには人間に対してもそのような位置を願ったのです。ですが、神様は逆に人間を通してルーシエルを愛するように創造されていたのです。

つまり、ルーシエルは自分が神様に愛されているにもかかわらず、自分の受けている愛情と人間の受けている愛情を比較して、自分は人間以上に神様の愛情を受けたいと願ってしまったことが霊的墮落の動機なのです。

そして、アダムを位置を奪おうと考えて、エバを誘惑したということです。ですので、ルーシエルがエバと霊的な墮落の関係を築いたのは、エバが美しい、エバが愛らしいという内容よりも、自分がアダムを位置を奪いたいという気持ちを抑えることができず、そのためにエバを利用したことになるのです。

この世的にも有名な大会社の社長の令嬢に対して、将来、その大会社の経営陣に入りたいという欲望から、その令嬢を誘惑する男性もいるということです。ですが、そのような結婚で健全な愛情を育まれることはなく、逆に墮落の結果として地獄をつくるしかないというのがこれも世相だと思えます。

では、皆様はいかがでしょうか。隣の人、近くの人と自分を比較して、相手の粗探しをしているようなことはありませんか。そして、他人の不幸と自分を比較して、自分は幸福だと思ひ込もうとして

いるようなことはありませんか。これが愛の減少感の弊害だということです。他人の不幸を願う時、それは同時に自分の不幸を引き寄せているのです。原理はその克服の仕方も紹介しています。

### 【御言】

#### 霊的墮落の結果

・愛に対する過分の欲望によって自己の位置を離れたルーシエルと、神様のように目が開けることを望み、時ならぬ時に、時のものを願ったエバとが(創世記 3:5～6)、互いに相対基準をつくり、不倫なる霊的性関係を結ぶに至りました。

### 【感想】

ここに霊的墮落の主な要因と結果が紹介されています。ルーシエルが自己の位置を離れたのは、もっと愛情を受けたいという過大な欲望のためです。そして、エバの問題点は時を知らなかったことです。

エバは自分が成長段階にいることを認識できず、ティーンエイジャーにして、大人の性の関係をとても魅力的で素晴らしいものだと思い込んで、願ってしまったということなのです。

このような教訓から、信仰者は時を知ることと、謙遜で無欲なことが求められます。総序にもありましたように、人間の願望は欲望が満たされるときに感じるすることができます。だとしたら、無欲な人間とは幸福とは関係がないのではと思われるかもしれません。ですが、ここで紹介する無欲とは自分の分相応の欲というものを知ることなのです。人間は時として、自分に与えられている恩恵を知りつつ、もっと大きな恩恵を受けたいと願い、自分より大きな恩恵を受けている人を批判したり、嫌ったりすることがあります。そのようなことに翻弄されるのではなく、今自分が受けている恩恵に感謝をして、自分の欲望というものを、受けている愛情、恩恵にあわせることが大切であると私は思っています。

このように霊的墮落の問題はルーシエルが誘惑しただけではなく、エバもその誘惑にひかれて相対基準を造成してしまったことも大きな問題です。その結果、天使と人間との間に性的な関係が結ばれてしまったということが、人間の悲劇の始まりなのです。

ですので、私たちの運動は青少年の成長期における早すぎる性体験を警告し、純潔運動を展開しています。その根拠もこの墮落論によるものと私は思っています。

### 【御言】

#### 肉的墮落

・墮落したエバが、アダムと一体となることにより、再び神様の前に立ち、恐怖心から逃れたいと願う思いから、アダムを誘惑し、本然の位置より離脱せしめるようになりました。これが、肉的墮落の動機となりました。

・アダムがルーシエルと同じ立場に立っていたエバと相対基準を造成し、肉的に不倫なる性関係を結ぶに至ったのです。

### 【感想】

エバが霊的に墮落すると神様との関係が切れてしまったのです。これまで自分を暖かく愛して守ってくれていた神様が感じられなくなり、一人ぼつんと孤独の位置に置かれるようになると、誰でも恐怖心を感じると思います。そのような恐怖心から逃れて何とか安心したい、守られたいという願いから、エバは神様に帰ろうとします。

エバが神様に帰ることは悪いことではありません。ですが、その方法が問題であったということです。霊的に墮落したエバはすでに天使長と一体となっていたので、天使長の性稟を受け継いでしまっていたのです。そのような状態で神様に戻るためにはしっかりと神様に尋ねなければならず、そのことをアダムと相談して神様に帰る道を神様と見つける努力をすべきだったのです。ですが、エバはその方法をルーシエルの性稟により自分勝手に思い込み、アダムと性的な関係を結べば、自分

は神様の前に帰れると信じてしまったのです。これが肉적墮落の動機となります。そして、エバはアダムと性的な関係を結ぶためにアダムを誘惑するのです。その誘惑の行いがまさに天使長がエバを誘惑したのと同じだったというのです。

そして、結果としてアダムもエバの誘惑に負けて、エバと相対基準を造成して、時ならぬ時に肉体的な性関係を持ってしまったというのです。

ですが、この結果、アダムまでもがエバと一体となっていた天使長の性稟を受け継ぐようになり、アダムは天使の宿る体となってしまったのです。このようにして、神様の体となるべき人間始祖、アダムとエバが神様と一体となることができずに天使長ルーシェルと一体となってしまったのです。

ですので、私たちの基本的な性稟は、神様のようにすべてのものを愛して主管するのではなく、全てのものから愛されることを求めるようになり、万物にまで主管されるようになってしまっているというのです。

それであるがゆえに、女性は配偶者の相手に対して、墮落の結果より、愛情よりは安心感を求めるようになり、それが経済力であったり、社会的な地位であったりするのではないのでしょうか。

それであるがゆえに、この道は神様との愛情関係を修復することを可能にしていますので、ある意味、究極的な安心感を得られると言っても過言ではないのです。

貴方は不安になることはありませんか。それは神様から離れて一人であるからではないでしょうか。そのような人々に神様との関係を修復するみ旨を私たちは歩んでいると思います。

## 【御言】

### 第3節 愛の力と原理の力および信仰のための戒め

信仰のための戒めを下さった目的

- ・神様は原理によって創造された人間を、愛によって主管しなければならないので、その愛が愛らしく存在するためには、愛の力は、原理の力以上に強いものでなければなりません。
- ・それゆえに戒めを下さった目的は、愛の力が原理の力よりも強いため、まだ未完成期においてアダムとエバが、天使長の相対的立場に立つようになれば、その非原理的な愛の力によって墮落する可能性があったからです。
- ・更に人間が、自分自身の責任分担として、そのみ言を信じ、自らの力で完成することによって神様の創造性に似るようになり、万物に対する主管性を得させるためでもありました。
- ・「食うべからず」と言われた神様の戒めは、アダムとエバが未完成期にある場合に限ってのみ、必要であったのです。

## 【感想】

ここではとても大切なことが紹介されています。愛が愛らしく存在するためには、愛の力は原理の力よりも強いものでなければならないというのです。

このブログでは皆様に原理を紹介していますが、原理を知っただけでは救われないというのです。なぜなら、いくら原理を知って、原理の力が強いと言っても、非原理的な愛の力には勝てないからなのです。そのようなことを知った上で、真の御父母様は御言を語られるだけでなく多くの食口を心から愛されたのです。それは、原理という御言で信徒を主管するのではなく、真の愛で信徒を主管するのが本来であるためなのです。

ですので、教会でも愛の問題はとても大きな問題になります。アダムエバの愛の問題は原理の力よりも強いので、いくら理屈で説得しても難しいのです。そして、原理が分かっているながらも落ちてゆくという人もいますので、このような問題にとっても敏感であり、厳格でもあります。

ですが、アダムエバの問題があるからと異性を遠ざけるのは永遠のことではないというのです。祝福を受けて、生涯の伴侶としての相対者が決定されれば、その配偶者を心から愛して良いというのです。むしろそれを奨励し、子女を大勢生み増やし、幸福な家庭を築きなさいというのが私たちの道なのです。

ですので、異性を分別して遠ざけるのは、祝福を受けて、家庭を持つまでなのです。もちろん、配偶者以外の異性と愛情の関係をもつのは兄弟姉妹までです。それ以上の関係は家庭問題に発展します。ですが、十分に成長し、成長期間を完成した人間においては、そのようなことはないというのです。

ですので、私たちの信仰の道は独身生活を強調するものではありません。性的な関係を持つてはならないという戒めは未完成期にある場合においてのみなのです。成熟すれば、夫婦となり、子女を生み増やしなさいというのは三大祝福にもあったと思います。

ですので、私たちが純潔を叫ぶのは、結婚をする前までなのです。性の営みにおいては学習する必要があります。経験のない異性を性の営みが下手だとか、初心者だと喜びが小さいとかと見下すのは、墮落の結果なのです。性の営みにはおいては純潔でも問題がないというのは、私たちがはっきりと提唱する根拠ともなっています。

それであるがゆえ、結婚するまでにできるだけ自分を成長させて、人格を完成するまでにもってゆきなさいというのです。子供のまま結婚して不幸になるのは社会の問題でもあるのです。皆様はいかがですか。

## 【御言】

### 第4節 人間墮落の結果

#### サタンと墮落人間

- ・墮落した天使長ルーシエルを、サタンと呼びます。
- ・ルーシエルと人間始祖が血縁関係を結び、一体となったので、サタンを中心とする四位基台がつくられると同時に、人間はサタンの子女となってしまったのです。
- ・ヨハネ福音書8章44節を見ると、悪魔から出てきた者と言い、
- ・マタイ福音書12章34節(マタイ23:33)に、へびよ、まむしの子らよと言われました。
- ・ヨハネ福音書12章31節には、サタンを「この世の君」と言い、またコリントⅡ4章4節においては、サタンを「この世の神」と言いました。

## 【感想】

ここでサタンの起源ということがハッキリとなります。サタンはもともと悪魔として存在していたのではありません。もともとは神様の僕として、天使世界の頂点に存在する被造物だったのです。そして、当然、その目的も善だったのです。その天使長がエバと性的な関係を持ってしまったゆえに、サタンになってしまったというのです。

ですから、性の問題がとても重要なのです。そして、私たち人類は神様の愛によって生まれたのではなく、サタンとの不倫な愛の関係によって生まれているというのです。

ですので、私たちは生まれながらにして、サタンの血統を受け継いでおり、イエス様の言われるように、蛇に象徴されたサタンの子女なのです。

そして、サタンは人類を父母として支配しており、この世の神というのは、全人類がサタンの主管下にあったことを意味します。

ですので、私たち人間がきちんと天使を主管することができなければ、サタンに生み変えてしまうという悲劇も起こるのです。特に女性において、非原理の男性が誘惑してきても、その誘惑にのって性的な関係を持ってしまうと、相手の男性は所有権を主張し、優しく見えた男性がサタンに変わってしまうというのです。

このように、サタンの正体というものを私たちは知っているのです。そして、サタンをどうしなければならぬのかというと、サタンを創造本然の天使に生みかえてゆかなければならぬというのです。

このような墮落論を知った今においても、あなた方は天使に愛されることを求めますか。私たちは天使を愛して、神様の真の愛で主管することを信仰の生活において体恤するのです。

男性は女性にもてると気持ちが良いですか？ ですが、男性は本来、女性を愛する立場です。にもかかわらず女性に愛されることを求めますか。女性は男性に誘惑されて嬉しいですか。胸がときめくと言って、誘惑にひかれて性的な関係をもってしまうと相手の男性はサタンに変わってしまいます。いずれも、愛されることを求めてしまうがゆえの悲劇なのです。

ある男性は真のお父様が女性に本当に愛されて羨ましいと感じることもあるかもしれません。ですが、間違えてはなりません。真のお父様がこれだけ女性に愛されたのは、それ以上に真のお父様が全人類を自らの子女として莫大な愛情を注がれたがゆえなのです。

サタンの正体は天使長ルーシエルでした。今もルーシエルと共に地に投げ落とされた天使が残っています。そのような霊界の整理も教会ではなされているのです。

## 【御言】

人間世界に対するサタンの活動

- ・サタンもその対象を取り立てて、相対基準を造成し、授受作用をしない限り、活動をすることはできません。
- ・サタンの対象は、霊界にいる悪霊人たちです。この悪霊人たちの対象は、地上にいる悪人たちの霊人体であり、この霊人体の活動対象は彼らの肉身です。
- ・したがって、サタンの勢力は悪霊人たちを通して地上人間の肉身の活動として現れます。
- ・それゆえ、ルカ福音書 22 章 3 節には「イスカリオテと呼ばれていたユダに、サタンがはいった」と記録されており、
- ・またマタイ福音書 16 章 23 節を見れば、イエス様はペテロを指してサタンと言われました。
- ・悪霊人体を「悪魔の使者」と記録しているところもあります(マタイ 25:41)。

## 【感想】

サタンが命令し、指示していたのは、地上の人間に直接対していたというわけではありません。霊界には多くの悪行を犯して他界した悪霊人がいます。その悪霊人とサタンが授受作用をして、様々な計略を練るということです。そして、そこで決まったことを、今度は地上の悪人の霊人体と相対基準を造成して、地上人に伝えるということです。そして、その伝え聞いたひらめきによって、地上の悪霊人の主は、その肉体をもって地上に悪をなすというようになっています。

ですので、いくら地上人を罰しても、サタンや霊界の悪霊人を処理しないと、社会は何ら変わらないということなのです。これが、人本主義的法治社会の限界なのです。これは、共産国においては歴然としています。

これに対して宗教は、地上の人間だけでなく、霊界にいて苦しんでいる悪霊人を善化する儀式などを行い、悪霊人を処理して善化するという対応をします。その結果、自然と悪人が減ってくるという流れになります。ですが、私たちの教会はその悪霊人を指揮している中心人物であるサタンを善の天使長に生み変えたということです。まだまだ天使の残党はいるかもしれませんが、大本のサタンが善化され、霊界は神様の愛によって生きる絶対善霊によって主管されようとしているのです。

このように、霊界において悪霊人がどんどん減っていなくなれば、地上人とサタンをつなぐパイプが切れるので、人間が徐々に善化されてゆくということです。

ここからも明確に、私たちの運動は社会を善化するものであり、国家や世界を発展させ、繁栄させる運動でもあるのです。ですが、サタンも黙ってはいませんでしたので、これまで激しい闘争が神様の側とサタンの側とで繰り広げられたということです。

サタンは悪人を直接主管するのではなく、悪霊人を差し向けてきます。悪霊人とは時として恨霊であり、怨みを抱いて他界した霊人でもあります。ですので、人を恨んだり、憎んだりすると、恨霊と呼ばれる悪霊人と相対することになるので、サタンの思惑に乗ってしまうということなのです。

このようなことが分かると地上の問題だけを処理しても根本的な解決にはならないことがお分かり

になると思います。ですので、一刻も早く恨霊や悪霊人を救って絶対善霊にしなければならないとして、清平摂理も急がれているということなのです。

皆様はどうでしょう。皆様の家庭に恨霊が訪ねて来たことはありませんか。その霊を主管して、追い払うのではなく、清平に連結して、絶対善霊に生み変えましょうというのです。悪霊を善霊に生みかえることができるのは、私たちの教会でなければ難しいと思います。

### 【御言】

罪

・罪とは、サタンと相対基準を造成して授受作用をなすことができる条件を成立させることによって、天法に違反するようになることをいいます。

・罪を分類してみれば、

- ① 原罪
- ② 遺伝罪
- ③ 連帯罪
- ④ 自犯罪があります。

### 【感想】

この世的には犯罪とは法律で規定されている規則を破り、法律に従わないことを行ったときに、生じます。ですが、ここで扱う罪とはそのような罪とは概念が違います。原理で扱う罪とは、サタンと相対基準を造成して授受作用をなすことができる条件が成立することで、天法に違反するようになることなのです。

サタンは人間に直接相対するのではなく悪霊人を送ります。その悪霊人と相対基準を合わせてしまうと授受作用が起こります。そのような授受作用が起こってしまうと、地上人は天法を犯すようになってしまいます。天法とは地上の行いだけを言うものではありません。ですから、イエス様は姦淫とは実際に肉体関係を持つことではなく、思っているだけでもいけないといわれたのです。その意味は、行動に移さなくても、霊的に悪霊人との間に性的な関係をもってしまい、霊的墮落をしていることが天法に違反するから叱責されたのです。

では、悪霊人はどのように相対してくるのでしょうか。まず、原罪というのは血統的にサタンの血統であるということをもって相対基準を合わせてくるというのです。サタンが血統的な所有権を主張するということなのです。ですので、どのような聖人君主であろうとも、サタンが血統的に所有することを清算できない限りは罪人なのです。

そして、先祖が犯した罪があります。先祖が生きた時代には法律的に裁かれなかったとしても、悪霊人と相対して、様々な悪行を成したとすれば、それは後孫に遺伝します。そのような遺伝的に受け継ぐ罪を遺伝罪と言います。これと原罪との区別のつかない文化が日本にはありますが、原罪が分かるということは、サタンが分かるということで、信仰的にある程度、成熟して初めて自覚できることでもあります。

それから、私たちが日本人である、ある集団の一員であるという理由により、集団の他の人が犯した罪を連帯責任として負うことがあります。日本の従軍慰安婦の問題も、自分は女性と無理強いして性的な関係を持ったことはないと言っても、日本人が過去において行ったことなので、その責任は私たちにもあるというようなことです。

そして、最後に、自分自身が悪霊人と相対して犯した罪が問われるのです。悪霊人と相対して、様々な天法を破るような行いをしたことを意味します。そのような罪を犯さないためには相対してくる悪霊人を分立する必要がある、そのために信仰生活とはサタンを分立する苦行の生活になりやすいというのです。

このようなことが分かってくると、私たちはまずもって天法がどういうものであるかということを知っておかなければなりません。その上で、天法の中で愛情を授受して幸福な生活を営むことを体恤

すべきなのですが、時として、それを邪魔するかのように、サタンが悪霊人を派遣するというのです。

そのような悪霊人との相対基準を切って、神様と相対基準を合わせ、神様が派遣される善霊と相対基準を造成するというを私たちは日々、研鑽しているのです。

ですから、そのような霊的な問題を扱えない共産世界はサタンの牙城になるしかないと私たちは見えています。

### 【御言】

#### 墮落性本性

・天使長が神様に反逆して、エバと血縁関係を結んだとき、偶発的に生じたすべての性稟を、エバが継承し、アダムも受け継ぐようになりました。これが、墮落人間のすべての墮落性を誘発する根本的な性稟となったのです。これを墮落性本性といいます。

・墮落性本性を大別すれば、4つに分類することができます。

- ① 神様と同じ立場に立てない
- ② 自己の位置を離れる
- ③ 主管性を転倒する
- ④ 犯罪行為を繁殖する

### 【感想】

私たちには墮落性があります。ここで紹介する墮落性とはアダムとエバに限ったことではありません。面々と私たちにも受け継がれているのです。簡単な例を挙げて紹介すると、

#### ① 神様と同じ立場に立てない。

つまりは、愛の減少感によって、神様のように祝福された人を愛せないということなのです。よく、栄光の座にある人、みんなから慕われる人を見ると、その相手と自分を比較して、なんで自分とは思いませんか。そうして、祝福されている相手の95%の長所に目をつぶり、5%の欠点、あら探しをして、それを発見すると、あたかもそれが相手のすべてのようにして、あの人はそんなに立派ではないと思ってしまい、嫌ってしまうということは貴方にもありませんか。

#### ② 自己の位置を離れる

地位や名誉に対する過大な欲望を言います。自分はある程度の地位や名誉を得ていて、人々からも愛されているとします。ですが、自分よりもっと高い地位の人を見ては、いつかはあの人を蹴落として自分がその地位に着くのだと野心を燃やすことはありませんか。これは、ドラマのストーリーにもなりますけど、実際に私たちに備わっている過大な欲望なのです。もちろん、世の中の立身出世をいけないといっているではありません。問題は、自分がより多くの愛情を受けようとして、他人の地位を奪うことなのです。人間はより多くの人を愛するようになると、自然とその人たちを世話する地位に進むようになっていきます。いずれはアダムの愛情を受けるべきだった地位にいた天使長は自分の地位よりも高いと思えたアダムの位置を奪おうとしたのです。その性稟が私たちにもあります。

#### ③ 主管性を転倒する

私たちは教会で言えば、アベル、中心者に愛される位置にいます。それなのに中心者に命令されたり、指示されるのが嫌で、自分の思い通りに生きたい。そして、中心や摂理が自分に合わせてくれたら良いと思ってしまうのが主管性の転倒なのです。愛情を受けられる位置にいたが、愛してくれるアベルや中心者を愛することができない。逆に中心者やアベルに自分の意見を通そうとしてしまう。そのようなことは、企業においても往々にして起こります。

#### ④ 犯罪行為を繁殖する

貴方は何かいけないことをすると、自分だけが恐ろしい罰を受けることに恐怖を感じ、誰かを道連れにしよと自然に思ってしまうというのです。人を批判するにおいても、必ず自分だけではなく、

批判する相手の欠点を知人に話したりして、さも自分の意見が正当であるかのような同意者を作ろうとします。そして、相手を批判する人を増やしてしまう。これが繁殖なのです。悪人は悪くなればひとりであることはなくなります。悪くなればなるほど徒党を組んで悪行を行うというのです。このような仲間を増やすことを犯罪行為の繁殖といいます。

以上のような墮落性が私たちにもあり、この社会にも面々として受け継がれているというのです。そして、墮落性を誘発して、人間は悪霊の思いのままに行動し、罪を犯してしまうというのです。

ですので、人間が復帰されるとは、このような墮落性を改めてゆく生活を意味しますので、復帰原理ではこの墮落性を脱ぐ条件として反対の経路を歩むことを説いています。

皆様はいかがでしょう。自分のこととして思い当たることはありませんか。

## 【御言】

### 第5節 自由と墮落

#### 自由の原理的意義

- ・自由とは、自由意志とこれに従う自由行動とを一括して表現した言葉です。それゆえに、自由意志のない自由行動なるものはあり得ず、自由行動の伴わない自由意志というものも、完全なものとはなり得ないのです。
- ・自由意志はあくまでも心の発露です。
- ・創造本然の人間は、神様のみ言、すなわち、原理を離れてはその心が働くことができません。

## 【感想】

人間は自由を求めます。ですが、その求める自由とはどのようなものなのかというのです。それが自由意志と自由行動からなるというのです。それは創造原理でも紹介したように、人間は心と体から構成されていますので、自由においても心の自由と体の自由があるというのではないのでしょうか。ですので、本然の自由とは心と体が授受作用をして一体化しているように、自由意志と自由行動が一致して完全なものになっているという説明は理解できると思います。

ですが、この世的には自由というと行動面だけの自由が強調されて、自由行動のことだと勘違いされるかもしれません。日本は信教の自由が憲法で保障されていますので、心が拘束された自由というものを理解しにくいかもしれませんが、共産圏では思想が共産主義思想以外の思想を持つことを許されず、思想の自由がないという状況に陥っているのです。これではいくら経済的に豊かになって行動が自由になっても、真の自由が得られずに、人々はさまよっているというのです。

では、自由意志とはどのようなことを言うのかというと、心がおもむくままに考え、想像し、感じることを言います。

創造本然の人間は、原理軌道の中で生活し、愛情も原理的に発動し、行動も原理軌道をはずれることがありません。そして、心も原理を離れた感情などを持たないというのです。ですが、墮落性を持っている私たちは、何もしないで放置すると自然と墮落性を誘発してしまうというのです。

ある人は、日本は法律で人間の自由が拘束されているので、真の意味で自由な国ではないと主張するかもしれません。ですが、これは自由の正しい意味を理解していないことになります。通常の善人と呼ばれる人は法律を意識しなくても、法律の中で自由を謳歌しています。つまりは、意識しなくても自然と法律を守っていることができるのです。同様に、原理も、復帰されてくると、無理に修行のように守るというものではないのです。自然と実践でき、自由に行動したとしても、原理の中に留まっているということなのです。

私たちは自由を奪われているわけではありません。むしろ、非原理的に拘束されていた心を解放してきているのです。貴方の心は恐怖心や力というものによって、心が拘束されていると感じたことはありませんか。この道は、真実の意味で、心の解放を意味します。決して、コントロールされたり、支配されたりということはありません。原理的にしか心が動かないということを経験されているのであれば、コントロールする人間が存在するはずですが、そのような人は存在しま



せん。心の本性がそれが求めるからであり、良心がコントロールしているからなのです。

信仰が成長すれば、主体的な信仰が求められます。それは誰かに頼まれたり、命令されて信仰するのではなく、自分の自由意志と自由行動において、信仰の道を歩むということを意味します。どうでしょう。皆様の心は解放されていますか？ それとも肉体的な欲望の奴隷になっているようなことはありませんか。

### 【御言】

- ① 原理を離れた自由はない。
- ② 責任のない自由はない。
- ③ 実績のない自由はない。
- ・人間は自由によって墮落することはできません。

### 【感想】

ここでは原理的な自由というものが紹介されています。原理を離れては自由は存在しないと聞かれると、原理に規制されていながらそれで自由と言えるのかという疑問も起こるかもしれません。ですが、私たちは自然界において、物理的な法則に支配された上で、行動の自由を行使しているではありませんか。また、憲法は様々な自由を保障していますが、これも法律を犯さないことを前提に行使できるものとして設定されていると思います。それと同様に、人間には天道というものがあり、それから外れた自由は本来の自由ではなく放縦と表現します。

ですので、無責任な自由は存在しません。ですが、この世的には無責任な行動が蔓延しており、その責任を押し付けあって地獄のような構図を展開するということも往々にしてあります。これが墮落した世界の自由を行使した結果なのです。

また、責任ある行動を実践していると必ず結果というものがついてきます。これは具体的な数字では表されないこともあります。責任ある行動を続けていると責任者、リーダーとしての人格が育ちます。その人格の成長を実績と表現しても良いのではないのでしょうか。このような目に見えない実績もありますので、数字の実績に一喜一憂することなく、自分を成長させるということに自らが責任を持ち、原理的な生活を実践され、その結果というものを豊かなものにされることを私も祈っています。

ここで紹介される実績は有形の実績ばかりではありません。人格の成熟度、家庭の成熟度、万物を主管する技術の体恤など無形の実績もあることを決して忘れてはならないと思います。そのような様々な実績を私たちは体恤しているのです。

ですので、人間は自由だから墮落したわけではありません。ですが、この世で自由を規制するのは、人間は自由な状態にすると墮落性を誘発しやすいためではないのでしょうか。このような規制が必要なのも人間が墮落しているためなのです。もちろん、未完成期には戒めが必要です。これは健全な成長を達成するための健康法でもあります。ですので、純潔を守ることと自由を規制することとは相反することではありません。純潔、貞操を守るがゆえに、私たちは様々なしがらみから解放され、真の意味において自由となれるのです。

### 【御言】

第6節 神が人間始祖の墮落行為を干渉し給わなかった理由

#### 1. 創造原理の絶対性と完全無欠のために

- ・全知全能であられる神様が、人間始祖の墮落行為をなぜ干渉し給わなかったのでしょうか。
- ・創造原理によれば、神様は人間が神様の創造性に似ることによって、神様が人間に主管されるように人間も万物世界を主管するように創造されました。
- ・人間が創造性に似るためには、自身の責任分担を遂行しながら成長期間を経て、完成しなければなりません。それゆえに、この期間には、神様が直接的に主管してはならないのです。

- ・もし、神様が成長期間にいる人間を干渉されるとすれば、人間の責任分担を無視する結果になり、神様は創造原理を、自ら無視する立場に立たれることになります。
- ・同時に、原理の絶対性と完全無欠性は喪失されてしまうので、墮落行為に対して干渉されなかったのです。

### 【感想】

神様が全能ならば悲しんでおられずに、その権能を行使して、墮落した人間を一気に救済して善なる存在に作り変えてしまえば良いのではと普通は思われるかもしれませんが、現実はそのうちではありません。それであるがゆえに、ある人は神様は死んだとか、神様はいない、全能なる存在はいないのだと主張することも起こるのではないのでしょうか。

ですが、ここで神様が人間の墮落行為に干渉できなかった理由が紹介されています。その一つ目が人間の責任分担ゆえなのです。創造原理では人間は成長期間において、責任分担を果たして、完成するように創造されており、その成長期間においては結果のみにおいて間接的に主管されるという原理を神様自らが立てられたのです。そのような原理を立てておきながら、成長期間の人間に干渉するという事は、自ら立てた原理を無視する結果になってしまうというのです。

そのような意味において、私たちは責任分担において神様に助けを求めても、応えてもらえないことがあるのです。むしろ、神様は干渉することができないので、放置されるようなことも起こるのです。教会でも中心者の方からこうしようと責任分担を与えられることがあるかもしれません。ですが、それを実践するのかどうかということは、中心者はあまり干渉されないというのです。ただ、その結果をみて、主管されるのが間接主管圏、成長期間だということです。

ですが、成長期間を経て、直接主管圏に入ると、神様と一体となりますので、単に結果だけではなく、そのプロセスもすべてが神様の主管下に置かれるようになります。

ですので、子育てもそうなのです。全部を親がやってしまうと子供は成長できないというのです。子供に責任を与えて自らその責任を果たすことを促さなければ、子供は健全に成長しません。ですので、学校で必要なのは規則で規制することだけではなく、責任の伴う自由を与えて、結果を見守るといことも必要なのではないのでしょうか。

神様が人間の墮落に干渉されなかった理由の一つが、神様が自ら立てた創造原理を破綻させないためだったのです。皆様も様々な責任があると思います。神様が干渉されないからと言って、軽んじているようなことはありませんか。むしろ、逆に神様が干渉できないので、私たちは深刻なのです。神様や真の御父母様に助けてくださいといえない世界が責任分担にはあるということを覚えておいてください。

### 【御言】

#### 2. 神様のみ創造主であらせられるために

- ・神様がある存在や行動に対して干渉し給うならば、干渉を受ける存在や行動は、既に、創造の価値が賦与され、原理的なものとして認定されます。
- ・したがって、人間の墮落行為に対して干渉されるとすれば、それも原理的なものとして認定され、
- ・サタンもまた、一つの創造主の立場に立つことになり、独り神様のみが創造主であらせられるために、干渉することができなかったのです。

### 【感想】

もしサタンに創造主の立場を与えたとしたら、この世界は善と悪によって創造された二元論になります。そして、この地上は永遠に善と悪が存在する世界にならざるを得ません。なぜなら、この被造世界が善と悪の共同作業によって創造されているということになる為なのです。そうなるとこの地上を創造本然の世界にするということは不可能になってしまいます。そのような理由があったために神様は墮落行為に干渉されなかったのです。

神様は墮落行為を非原理的な行為であるということを決定され、さらに創造の価値のない行為であるということを決定されるためにも、墮落行為に関して、分かっているながらも干渉されなかったのです。

このように真理は、この被造世界は神様によってのみ創造されているという一元論なのです。そして、サタンも神様によって創造されているがゆえに、究極的に向かう本然の世界とは神様の願われる世界にならざるを得ないということなのです。

このようなことを理解してくると、神様は非原理的なことには対されないというようなことも見えてきます。神様と一体となっている御父母様を喜ばせるのは、非原理世界の人間を喜ばせるようなことではなく、原理的な愛情関係を復帰して、原理的な実績をお捧げすることだということも見えてきます。非原理的な実績に対しては御父母様は見向きもされないという世界もあるのです。

ですので、私たちが原理的な生活をすれば、神様が相対されるのであり、非原理的な生活をすれば神様が見えなくなるのです。エバは墮落することによって神様が相対されなくなったのです。それは親を見失った迷子のように不安で怖い感情を誘発したということです。

ですので、私たちの信仰生活とは、神様が干渉し得る原理的な生活を体恤することでもあるのです。

人間が責任分担を果たすとき、そして、人間が墮落しそうになったとき、神様は干渉されないことがあります。それであるがゆえに、私たちは自己の責任において、原理的な判断を常に下せるように鍛錬する必要があります。私たちが原理的な実績を備えて、きちんと結果を提供できれば、神様はその結果をもってしっかりと主管してくださいます。成長期間においてはプロセスが問われないのです。そこでどのような実践をして自分を成長させるのか。そこが問われることが信仰の道においてはあります。

私たちが離れそうになったとき、人は止めるかもしれません。ですが、神様はその人に対して干渉されないことがあるのです。もし干渉すれば、その人を離そうとしているサタンに創造主としての位置を与えてしまうことになるからなのです。ですので、本当に皆様も神様に頼るだけではなく、主体性が必要な時が必ずあります。

## 【御言】

### 3. 人間を万物の主管位に立たせるために

- ・未完成期にいる人間を神様が直接主管し、干渉されるとすれば、人間はその責任分担を完遂できなくなり、神様の創造性をもつこともできなくなるために、万物を主管する資格も失うようになります。
- ・それゆえに、神様は、人間を万物の主管位に立たしめるために、いまだ間接主管圏内にいた未完成な人間の墮落行為を、干渉することができなかったのです。

## 【感想】

親である皆さんは子供さんの宿題を見てあげたことはありますか。そこでも重要なポイントは親が宿題を片付けてしまっただけでは子供は実力をつける機会を失うということなのです。これが、人間の成長においてもそうなのです。親の言うままに育つ子供はある意味、良い子かもしれません。ですが、親の操り人形になってしまっただけでは、被造世界を主管する創造性などを持つことができなくなるということです。

神様が人間の責任分担に干渉されるとするならば、人間は責任を果たすために創意工夫をする機会を失い、その結果、人間は創造性を啓発することもできず、万物を主管する能力も得ることができなくなるということです。

神様はそんなことをご存知でしたので、人間の責任分担にはあえて干渉されなかったのです。そのような意味において、私たちは責任分担を果たすにおいては自分で考え、自分で創意工夫することが求められるのです。決して洗脳されて、自分の意思を失っているようなことはないの

です。むしろ、洗脳されていれば、この道は歩めないようになっているのです。

ですので、絶対服従においても「何をしなさい」ということは言われるかもしれませんが、「どのようにしなさい」とは言われることはないと思います。もし、そこまで主管して干渉してしまうとするならば、ここでもあるように、人間は成長する機会を失い、万物の主管位にも立てなくなってしまうのです。

神様は干渉されません。ですが、そのプロセスにおいて、原理的に歩まなければ実績は出ないようになっています。外的な数字の帳尻を合わせただけでは決して、人間的にプラスになることはありません。内的な成長が伴ってこそ、真の実績と言えるのではないのでしょうか。神様はそれを期待されていると私は感じています。

## 【御言】

### 第3章 人類歴史の終末論

#### 人類歴史

- ・我々は、人類歴史がいかにして始まり、どこへ向かって(方向)流れているかということを、これまで知らずに生きてきました。したがって終末に関する問題を知らずにいます。
- ・キリスト教信者たちが信じてきた聖書の文字どおり、天と地が火に焼かれて消滅し(ペテロⅡ 3:12)、墓から死人たちがよみがえり(マタイ 27:52～53)、空中においてイエス様を迎える(テサロニケⅠ 4:16～17)という天変地異が起こる恐怖の時になるのか、それとも何か比喩として言われているのでしょうか。
- ・この問題を解明するためには、神様が被造世界を創造なさった目的と、墮落の意義と、救いの摂理の目的など、根本問題を解明しなければなりません。

## 【感想】

歴史の正しい認識はとても大切です。人類の歴史がどのように始まり、どこに向かっているのか。共産主義ではしっかりとした唯物史観をもっており、この世界は最終的には共産主義世界になると信じています。これに対して統一思想はこの唯物史観の誤りを指摘して、正しい歴史の流れを紹介する歴史論という分野があります。

キリスト教では終末において天変地異が起こると文字どおりに信じているというのです。ですのでSF映画でどこかの惑星が地球に衝突して、地球が破壊されるなどの設定があると思います。ですが、これは墮落論においてもあったように何かの比喩を誤って解釈しているために起こる問題なのです。

この終末論においては、人類歴史はどこに向かうのか。その理由として人類を救済される摂理の目的などの理解が欠かせないと私は思います。

ここでは難しい統一思想の歴史の話は出てきません。皆様に分かりやすく説明されているために、ぜひ皆様も学ばれることをお勧めします。

墓から死人が蘇る。かつては「ゾンビ」という映画もありましたが、これも聖書を根拠としているといえるのではないのでしょうか。ですが、現実にはそのようなことは起こりません。創造原理の正しい理解、墮落行為の意義と、救援摂理の目的をこれから見てゆきます。

終末において人類は滅亡しません。そして、人間が空中に飛び上がることもありません。では、その比喩はどのようなことを意味しているのか。終末論ではその内容を紹介しています。

## 【御言】

### 第1節 神様の創造目的完成と人間の墮落

#### 神様の創造目的完成

- ・人間は神様の心情を体恤してその目的を知り、その意志に従って生活することによって個性完成します。
- ・個性完成したアダムとエバが、善の子女を繁殖して、罪のない家庭と社会をつくったならば、一

つの父母を中心とした大家族社会をつくったはずです。

- ・個性を完成した人間たちは、科学を発達させて安楽な社会環境(主管性完成)をつくらなければなりません。
- ・神様の創造理想の実現された所が、地上天国であり、神様の創造目的はまず、地上に天国を建設なさるところにありました。

### 【感想】

ここでまず神様の創造目的を振り返ってみます。つまり、神様はこの地上を滅ぼすために創造されたのではないということなのです。人間は地上では肉体的な死を迎えます。ですが、この地球は死を迎えるために創造されたのではないということなのです。

人間の個性完成においては、まず神様の心情を知り、その心情を相続して体恤することで、自分の生まれた目的を知り、その目的を達成する意志に従って生活することで成し遂げられるようになっています。教会でも神様の心情を紹介されると思いますが、その心情を自らのものとして相続することがとても重要になります。これが三大祝福の第一祝福でした。

次に個性を完成したアダムとエバが夫婦となり、そこで家庭を営み、善の子女を繁殖すれば、善なる家庭と家庭の拡大された社会というものが形成されます。これが第二祝福でした。ですので、私たちの目指す理想とは真の御父母様を父母とする大家族社会なのです。

そして第三祝福は個性を完成させた人間が科学を発達させて、安楽な社会環境を作り上げることです。現代の科学は人間の生活にある意味、とても安楽にしてきたかもしれませんが、第一祝福、第二祝福が成し遂げられていないので、逆に万物に主管され、ある意味に科学に支配されるような世界も生まれようとしているのではないのでしょうか。

このように創造目的である三大祝福が達成された世界が地上天国なのです。天国というとみんな死後の世界のことだと思われるかもしれませんが、私たちはこの地上に明確に天国を創建することを目指しているのです。

このように、神様の創造目的はこの地上に天国を建設することにあります。それであるがゆえに、この地上を地獄のようにして滅ぼすというようなことは神様はされないということです。歴史は神様の摂理に従って発展し、流れてゆきます。その流れ行くゴールがここで明確に創造目的の完成として紹介されているのです。ですので、はっきりと私たちは歴史は地上天国を建設する方向に進むと明言しているのです。歴史は間違いなくこの方向に進んでいると私は思います。

### 【御言】

人間の墮落

- ・人間は墮落することによって、サタンが住む家となり、サタンと一体化したために、墮落性を帯びるようになりました。
- ・この墮落性をもった人間が悪の子女を繁殖して、悪の家庭と社会と世界をつくりました。
- ・これが、墮落人間が住んできた地上地獄であり、人間はサタン主権の世界をつくるようになりました。

### 【感想】

神様の創造目的は分かりました。ですが、現実はその理想とはかけ離れた世界になっています。それがなぜかというのが、人間の墮落の故なのです。墮落論で紹介したように、人間は墮落することにより、神様ではなくサタンと一体化し、サタンが住む家となってしまったのです。そして、人間は創造本性である神性を発揮することなく、サタンから受け継いだ墮落性を誘発して社会を形成しているということです。

墮落した人間同士が夫婦となり、家庭を築くとどうなるのかというと生まれてくる子女もサタンの血統を受け継いでおり、その子女が生み増えることで、この社会は罪惡社会となってしまったのです。それが、現実の地上地獄というものなのです。

日本に住んでいて、いえ、日本は治安もよく、よく管理された社会なので、地獄とは思えませんという人もいるかもしれません。ですが、本当の地獄とは、神様と心情的な因縁が切れてしまう、愛情の枯渇した愛のない世界のこたなのです。いえ、私は配偶者に恵まれ、愛情豊かな家庭を築いていますと言っても、神様との関係が切れていると、その愛情に永遠性はなく、いつかはお互いに空気のように感じなくなってしまう世界があるのではないのでしょうか。

それに世界を見れば、まだまだ紛争地域があり、貧困があり、人権が蹂躪されている地域がたくさんあります。そのような人々の苦痛を感じることなく、自分だけの幸福を謳歌しているというのも、一種の地獄なのです。このような地獄の主権はもちろん人間にありますが、その人間とサタンとが一体となっているので、この地上の主権はサタンが握っているというのです。

ですので、私たちの教会は個人や家庭が救われるだけを目指すものではありません。社会や国家、世界を救済するために、一人でも多くの人がサタンの主管から抜けて、神様の主管圏に帰れるように伝道を進めています。

そのような摂理があるということは、神様はこの地上を破壊しよう、人類を滅ぼそうとはされていないということなのです。そのような摂理を皆様は教会を通じて知るようになるというのです。

## 【御言】

### 第2節 救いの摂理

救いの摂理はすなわち復帰摂理である

・喜びを得るために創造なさった善の世界が、人間の墮落によって、悲しみに満ちた罪惡世界となりました。

・これが永続するほかはないというのであれば、神様は創造に失敗した無能な神様となってしまうので、創造主としての責任を負って、必ずこの罪惡の世界を、救わなければなりません。

・神様は永存なさる主体であるので、神様が、救済するというのは、その対象としての人間を、永遠な創造本然の立場に復帰するという意味です。

・それゆえに、救いの摂理は、すなわち復帰摂理であるのです。

## 【感想】

先日までの内容で、神様の理想とされる創造本然の世界、それが人間の墮落によって地獄と化してしまった現実を紹介しました。では、神様はこの地獄を永遠に放置されるのでしょうか。いえ、そんなことはありません。もし、この地獄が永遠に存在するとするならば、神様は創造に失敗してしまった神様となってしまうのです。

ですので、神様は永存なさる真の愛の主体であられますので、その愛の対象である人間を永遠な創造本然の姿に救済するという摂理を展開されるのです。つまり、本然の立場を失った人間を元の状態に戻すという意味で、復帰原理というように呼ばれています。つまり、この地上の摂理というものは、神様の復帰摂理になっているのです。

これは世界や社会、国家という大きな視点のみで語られているわけではありません。個人的には貴方の人生、貴方の家庭において、幸福を感じられない、何やら苦悩の中にいるということがあれば、神様は貴方を創造本然の幸福な家庭、個人に復帰されるために摂理されているというのです。

つまり、神様は全体的には全人類の幸福を実現するために摂理されていますが、それは同時に個人においては私たちの家庭が幸福になるために摂理もされているということなのです。

神様は地獄であえいでいる私たちに救いの手を伸ばしておられるというのです。それが神様の復帰摂理なのです。その手をつかむのかというのが人間の責任分担です。その手をつかんだ人が今の世界摂理に同参している私たちの教会の人々だと私は思っています。

皆様はいかがでしょう。神様の摂理を感じられることはありますか。この文章を読んでいる今、貴方には神様の手が差し伸べられているのです。それが皆様には見えますでしょうか。

## 【御言】

### 第3節 終末

#### 終末の意義

- ・サタン主権の罪惡世界が、メシヤの降臨を転換点として、神主権の創造理想世界に転換される時代を終末といいます。
- ・したがって終末とは、地上地獄が地上天国に変わるときをいうのであり、
- ・天変地異が起こる恐怖の時代ではなく、喜びの日が実現されるときなのである。
- ・現代がすなわち終末です。

## 【感想】

ですので、メシヤが降臨されて、罪惡歴史をつづってきたこの地上の地獄が、神様の創造本然の地上天国に変わろうとする時が、まさに終末なのです。ですので、崩れ落ちるのは、墮落人間を支配していたサタンの主権であって、神様が主管する善なる人間が主権を復帰し、この地上に神様の主管する民族、社会が広がる時代を終末というのです。

個人的には、これと同じように自らの人生において、メシヤである御父母様が降臨される、つまりは御父母様と出会って、それまでの神様と関係のない地獄のような人生が、神様の主管される創造本然の人生を出発し始める時を言います。

それがまさに現代だということです。再臨主が降臨されたのも現代であり、真の御父母様と出会えるのも現代なのです。

ですから、これからの歴史は創造本然の地上天国の建設に向かって動き始めるということです。ですから終末を恐れる必要はないのです。

神様が主管される版図は神様が主管できる善なる人間によって着実に広がってゆきます。それであるがゆえに、私たちは伝道が日々叫ばれているのだと思います。自分だけが救われて、天国だと喜んでいても神様は喜ばれないということです。神様は全人類の父母ですので、まだ救われていない子女がいるとしたら、復帰された善なる人々を派遣するのは自然な道理です。

今の時代、再臨主が降臨されて、着実に神様の版図は拡大しつつあります。そのような時代の転換点が終末でもあるのです。皆様はいかがでしょう。まだ、神様と関係のない地獄で苦しんでいるようなことはありませんか。

## 【御言】

### 終末の兆候

- ・ペテロⅡ3章12節に、終末には『天は燃えくずれ、天体は焼けうせてしまう』と記録されています。
- ・ヤコブ書3章6節に『舌は火である』と言われたみ言からすれば、火の審判は、すなわち舌の審判であり、それは、すなわちみ言の審判であるということを知ることができます。

## 【感想】

燃えるとか焼かれるという表現は火によって滅ぼされることを意味します。では、その火というものが文字どおりの普段生活で使っている火のことなのでしょうか。それが、原理では違うと説いているのです。

文字どおりの火であれば、この地上は火に包まれ、人類は完全に滅亡してしまうことになるでしょう。ですが、先日の内容のように、そのような未来は存在しません。では、「火」とは何を比喻したものなのでしょうか。

終末論ではこの「火」とは再臨主の口から発せられるみ言であると説明します。では、み言の審判とはどういうものなのでしょうか。再臨主の語られるみ言は、私たちに創造本然の姿がどのようなものであり、現状がなぜそうなっていないのかを明確にし、そして、創造理想の姿に復帰するためにはどうすればいいのかを明確にされます。万人が幸福を求めているとすれば、万人は創造本然

の姿に復帰されることを願うようになり、これまでの地獄のような生活を改めるようになります。

つまり、サタンに主管されていた人間が神様に帰るようになるがゆえに、サタンの主権で建てられていた国が神様の主管する国家へと転換されてゆくために、サタンの主管が崩壊するということを経験しているというのです。ですので、燃え崩れるのはサタンの主権であり、人間が炎に焼き尽くされることではないのです。

再臨主のみ言は人間の本来の姿を明確にします。それが明確になることにより、今までも自分の姿がどれだけ神様の理想から遠いものであったのかということを実感できるようになるというのです。その自覚のみ言による自己の再評価、すなわち審判だと私は思っています。

ですので、自らの墮落を自らが自覚して、悔い改めの生活の出発を促すものがみ言による審判なのです。決して、この世の裁判のように、有罪であることを突きつけられて、何か肉体的な罰則を科せられることではないと思います。自分が罪人であるという判断は、再臨主の発する言葉によってなされるのです。ですので、この言葉を知らない人は審判されることはないかもしれませんが、それは同時に自分の病気を自覚しない病人と同じで、治療の機会を失うことにもなりかねないのです。

どうでしょう。み言に触れてあなたは自分の過去を燃やしてしまいたいと思ったことはありませんか。まさしく、それが自分の過去に対する火の審判なのです。そのような理由もあるので、私たちは御父母様のみ言を広めることに熱心なのです。み言は自分の罪を実感させますので、時に耳には痛いかもしれません。ですが、それを通過しないということは、罪の自覚のない無知を放置することになります。霊界に行ってからでは遅いのです。ですので、私たちは急いでいるのです。

## 【御言】

地上人間たちが引き上げられ空中で主に会う

- ・テサロニケ I 4章 17 節に記録されている空中とは、空間的な天を意味するものではありません。
- ・聖書において、地は墮落した悪主権の世界を意味し、天は罪のない善主権の世界を意味します。
- ・それゆえに、空中で会うということは、イエス様が再臨されてサタンの主権を倒し、地上天国を復帰されることによって、その善主権の世界において、信徒たちが主と会うようになるということを経験するのです。

## 【感想】

クリスチャンの方には自分が空中に浮かんで、イエス様に何かの引力で引っ張り上げられて、空中でイエス様に出会うと信じているという人が大勢います。ですが、現代科学では、そのようなことは物理的に不可能なので、キリスト教は現代人の説得において多くの困難を要しているという現状があります。

では、私たちはどうでしょうか。イエス様を偉人として知ってはいますが、イエス様が幽霊のように空高い空中におられ、私たちが天高く飛んでいくということを経信されますでしょうか。おそらくほとんどの人が信じられないと答えるでしょう。

原理はこのような部分も聖書の重要な部分がそうであるように何かを比喩したものであると解釈します。では、空とは何を比喩したのでしょうか。それにはまず空、天と対になっている地とはどういう世界なのかということを見てゆきます。聖書には罪を犯した天使長を地に投げ落とすと記されています。つまり、地とはサタンの主管する地上地獄のことを言います。

これに対して、天とは、空とは、そのようなサタンの主管ではない、神様の主管する地上天国を意味するというのです。

したがったこの聖書の聖句の理解とは、地で象徴されるサタン世界が終わりを告げ、神様の主管する善なる世界、地上天国が地上に誕生することにより、天に象徴される地上天国で人々は再臨されるイエス様と出会うということを経験するということです。

ですから、私たちがみ旨の道に出会い、その道を歩むことで、サタンの主管圏から離脱し、神様



の主管圏に移るようになるということは、天に引き上げられているということなのです。そして、その道の先に御父母様との出会いがあるということです。

ですので、いくら空間的な空を眺めても、イエス様は現れないということです。その奇跡のときを待っているクリスチャンにイエス様は再臨されたと伝えようとするのですから、そのような人々を伝道することは簡単ではないということです。

私たちは神様によって心霊的に引き上げられて、御父母様と出会っています。これが天で出会う再臨主だとはここでは分かると思います。

## 【御言】

### 第4節 終末と現世

#### 第1祝福復帰の現象

・神様が復帰摂理の目的として立てられた三大祝福が復帰されていく現象を見て、現代が終末であることがわかります。

・第1祝福は、個性を完成することを意味します。

- ① 墮落人間の心霊が復帰されていくのを見て、
- ② 本心の自由を復帰していくという歴史的な帰趨を見て、
- ③ 創造本然の価値性が復帰されていく現象を見て、
- ④ 本性の愛が復帰されていくという事実を見て、

・現代は個性を完成することのできる終末に入っている、ということを知ることができます。

## 【感想】

終末論では現代が終末であることを明確に示します。その理由としてまず挙げられているのが第一祝福の復帰現象なのです。

それでは第一祝福とは何だったのでしょうか。創造原理を振り返ってみると、第一祝福とは心と体が一つとなり、個性を完成することでした。そのような個性を今は完成できる時代に入っているということです。

まず、私たちの心霊が一昔前に比べて、格段に高まっているということなのです。一見科学の進歩が著しく、科学万能主義的に精神世界の発展は鈍化したかのように見えるかもしれませんが、現代に至るにおいて宗教、哲学は徐々に発展してきており、人間はその本心の声を聞くことができるようになってきているということです。

それから、日本では憲法で様々な自由が保障されていますが、このように社会が人々の自由を保障し、保護するという歴史的な趨勢を見れば、これも個性を完成することのできる環境が整いつつあると言えるのではないのでしょうか。一昔前だとあたかも奴隷のように人間が扱われ、自由な生活を営むことが困難な時であれば、個性を完成するのもほとんど無理だったのではないのでしょうか。

そして、現代においては、人々が本然の愛情に目覚めてゆく傾向があるということです。動物的な肉欲的な愛情というものから徐々に精神性が啓発され、今の時代はキリスト教に代表されるように多くの人々を愛することを復帰し始めているのです。日本でも多くの人々がボランティアに奔走するようになったのは最近のことかもしれません。

このように人々の心に愛が蘇りつつある現象を見れば、今は個人が個性を完成することのできる終末に入っているということができるのです。

皆様は実感されていますか。今の時代が終末であるということ。現代において人々の心は大きな啓発を受けています。それを見ても、現代が明確に終末だということです。

## 【御言】

### 第2祝福復帰の現象

・第2祝福は、善主権の家庭と、社会と、世界を成就するようになることを意味します。

・人類歴史は、内的な宗教を中心とする文化圏の発展史と、外的な国家興亡史による両面のサタ

ン分立を通じた復帰摂理としてあらわれます。

- ・内的に、キリスト教の中心であるイエス様を中心として、すべての民族が、同じ兄弟の立場に立つようになりました。
- ・外的に、現代は天の側の主権を立てようとする民主主義世界と、サタンの側の主権を立てようとする共産主義世界とに分立され、対立して、互いに交差しています。
- ・したがって、現代は第2祝福が復帰されているのでまた、終末なのです。

### 【感想】

創造原理を振り返ってみて、三大祝福の第二祝福とは何だったのでしょうか。それが個性を完成したアダムとエバが夫婦となり、神様の願われる善なる家庭を築き、それが拡大して善なる社会、善なる世界を形成することでした。

人類歴史を見てみると、その主流はキリスト教に移り、欧米を中心とした国家はキリスト教の理念を持って建国されています。そして、キリスト教の国家間で、同じイエス様を親とする兄弟姉妹という関係で、連携し、大きなEUという共同体まで作り上げる時代になったと思います。

また、世界を見れば、民主主義と共産主義が対立していた時代は終わろうとしており、現代においては共産主義国家が崩壊し、民主主義国家が世界をリードするという時代に移っているというのも皆様にはお分かりだと思います。

このような現象を見ると、神様の三大祝福の第二祝福もいよいよ復帰されつつあることを確認できるのです。このようなことを確認できるということは、現代が第二祝福も復帰されつつある終末であるという証拠でもあるのです。

結婚においては一夫一婦制が定着したのも現代です。そのような本然の家庭理想に近づいてきている現代であり、今正に新しい結婚観が確立され、提示されつつある現代でもあると思います。皆様はそのような潮流を感じておられますか。今、正に再臨主が降臨されている終末なのです。

### 【御言】

#### 第3祝福復帰の現象

- ・第3祝福は、被造世界に対する主管性をもつようになることを意味します。
- ・内的主管性とは、心情的主管、外的主管性は、科学による主管性を意味します。
- ・内的に、宗教、哲学、倫理などによって、神様に対する堕落人間の心霊は、漸次明るくなり、現代は、被造世界に対する心情的な主管者の資格を復帰しつつあります。
- ・外的に、現代は科学の発達も最高度に達し、それに伴う経済発展によって、安楽な生活環境をつくるようになりました。
- ・このように、神様の第3祝福が復帰されていく現象を見ると、私たちは、現代が終末であることを否定することができないのです。

### 【感想】

三大祝福の第三祝福とは何だったのでしょうか。人間が社会を構築し、その社会において、万物を神様の神性をもって主管するということではなかったのでしょうか。そのような主管性の復帰が現代においては見られるようになってきているというのです。

内的主管としての心情的主管という言葉は、聞きなれない言葉かもしれませんが、それは技術や方法で万物を支配するということではなく、万物に愛情を注いで、万物を喜ばせながら所有するということを意味します。たとえば皆さんが犬を飼っているとします。犬を育てるには様々な方法論や技術が必要かもしれません。ですが、それ以前に、犬に対してペットとして愛情を注ぐということをしなければ、犬も飼い主にはなつきません。そのように万物に愛情を注いで所有するということが心情的な主管となります。

外的には科学が高度に発達した近代社会においては、人間は自然環境や様々な万物を人間の安楽な生活のために活用できる段階にまで来ています。

このように環境的には本当に昔に比べれば天国のような環境が整いつつあるのが現代であり、そのような万物の様相を見ながらも、今は終末であるということが分かるのです。

科学が急速度に発展したのはここ数十年です。そして、人間が万物に対して愛情を注げるようになったのも最近のことだということです。そのような社会の環境的様相を見ても、今の現代が終末だといえるのです。

### 【御言】

#### 第5節 終末と新しいみ言と我々の姿勢

##### 終末と新しい真理

- ・神様は、墮落によって無知に陥った人間を、神霊と真理とにより、創造本然の人間に復帰していく摂理をされます。
- ・神霊と真理とは唯一であり、永遠不変ですが、無知の状態から、復帰されていく人間に、それを教えるための範囲、それを表現する程度や方法は、
- ・時代に従って異ならざるを得ません。したがって、今日の知性人たちに真理を理解させるためには、より高次の内容と、科学的な表現方法によらなければなりません。これを新しい真理といいます。

### 【感想】

神様は無知に陥った人間を復帰されるために、神霊と真理を持って摂理されます。ですので、このブログで知識として真理を知っただけでは、本来の本然の人間へと復帰されないのです。そこには神霊の導きも必要なので、霊的な手続きも必要になってきます。それであるがゆえに、皆様が本当に救われたいと思われるのであれば、教会の門を叩かれることをお勧めするのです。

キリスト教の聖書は、1000年前の人々を導くためには適した指導書だったかもしれませんが、現代においては、人々は高度に啓発され、従来の聖書の内容では人々を感化する力を失っているということです。そのような意味で、より高次の内容の真理を提供する新しい真理が現れなければならないと言うのです。

その新しい真理が、今、皆様が入り口に立たれている統一原理なのです。これから、この統一原理は、単なる宗教の教理にとどまらず、科学の壁をも打ち破る鍵となり、新しい時代の新しい科学を提供するきっかけにもなると私は思っています。

ですので、皆様においても、神霊の導きを感じられる霊的な感性を大切になさって欲しいのです。ネットという科学は真理という情報を伝えることはできるかもしれませんが、霊的な導きは教会生活を通じなければ感じられないと思います。真理は知るものかもしれませんが、ですが愛とは感じるものです。皆様は新しい真理を知るだけでなく感じておられますか。

### 【御言】

#### 終末に際して我々がとるべき態度

- ・古い歴史の終末期は、すなわち新しい歴史の創始期になります。
- ・この時代に処した人間たちは、内的には理念と思想の欠乏によって、不安と恐怖と混沌の中に落ちこむようになり、外的には武器による軋轢と闘争の中で戦慄するようになります。
- ・神様はこのような惨状の中で、新しい時代をつくるために、善主権の中心を必ず立てられるのです。
- ・つぎには、因習的な観念にとらわれず、体を神霊に呼応させることによって、新しい時代の摂理へと導いてくれる新しい真理を探し求めなければなりません。

### 【感想】

現代は終末期だと紹介しました。では、その現代とはどういう時代なのでしょう。この終末論を学ぶと今の時代の流れとこれからの未来が明確に見えてきます。まず、今の時代は古い過去の時

代と新しい時代が混在しているというのです。新しい時代の創始期であると同時に、古い過去の歴史が終わるときでもあります。そのような時、人々は混沌の中に放り込まれ、何が正しくて何が正しくないのかも分からないような時代に入ります。

日本においても、これまでの伝統的な文化が終わりを告げ、新しい世代の新時代が始まると言われています。その新しい時代の中心が正に私たち教会の人々の形成する神様の直接主管圏なのです。その善の主権が確実に広がり、どんなに強大を誇っても悪の象徴である共産主義は縮小し、滅びる運命にあるというのです。

このように過去にない新しい時代が始まるのが終末なので、過去の習慣性や因習に心が奪われると、新しい時代の流れを否定して、時代と共に流されて消えて行くということもあるのです。

そのようなことから私たちを守り、新しい時代に乗って、幸福な人生を送るためには、神霊に体と呼応させなければなりません。ですので、真理だけではなく、神様が送られる霊的な導きに常にアンテナを張っておき、その示される道をしっかりと歩まなければならないというのです。

時には、この世的な常識では考えられないようなことをするかもしれません。ですが、摂理は時に一般世間の常識の通用しないことも扱ってきたのです。例えて言えば、現代医学の手術というような治療法は、100年前には考えもつかないような治療法であり、誰もが人間を切り裂くと誤解することも起こりました。これは、人間が過去の固定概念に縛られていたがゆえに、新しい技術を受け入れることができなかったことを意味します。

これと同じことが、医学ではなく、人生の哲学、宗教、科学において起ころうとしているのです。ですので、原理を学ぶためには、単なる知識を暗記するだけでは駄目なのです。霊的な感性を持って、神霊の導きを感じ、それに自らの体と呼応させなければならないというのです。ですから、何も知らない人は再臨主が既に降臨されているのに、その事実を知らないことに焦燥感を感じるということなのです。

何度も言いますが、原理は知識を暗記するためのものではありません。真理だけではなく神霊に自らを呼応させる努力が必要なのです。そのような霊界を扱うので、清平摂理が欠かせないと私は思っています。

## 【御言】

### 第4章 メシヤの降臨とその再臨の目的

- ・メシヤは、ヘブライ語で油を注がれた人を意味しますが、特に王を意味します。
- ・イスラエル選民は預言者たちの預言によって、将来イスラエルの救世主を、王として降臨させるという神様のみ言を信じていました。これがイスラエルのメシヤ思想です。
- ・このようなメシヤとして来られた方が、まさしくイエス・キリストですが、このキリストは、メシヤと同じ意味のギリシャ語であって、普通、救世主という訳語が当てられています。
- ・メシヤは神様の救いの摂理の目的を完成するために、降臨されなければなりません。

## 【感想】

メシヤとはどういう存在なのでしょう。私たちも氏族メシヤとしての使命を与えられていると言いますが、その使命の基本的な意味は何でしょうか。メシヤとはヘブライ語で王を意味します。キリストもギリシャ語の王を意味します。つまりは、氏族メシヤとは氏族の長になることを意味していると思います。つまり、神様は皆様の属している氏族の長として皆様を降臨させたということなのです。

それであると同時に、メシヤは神様の救いの摂理の目的を完成するために降臨するのですから、私たちも氏族の救いの摂理というものを完成させるために降臨しているということだと思います。

ですから、私たちは氏族レベルのメシヤなのです。横的基盤において、氏族圏を救う摂理というものがあるのを皆様はご存知ですか。その摂理が見えずして摂理を完成することはできないでしょう。そのために、私たちは、イエス様の路程や御父母様の路程を学ぶのではないのでしょうか。

教会では全体の摂理はよく紹介されます。ですが、自分の立てられている氏族圏個々の摂理もあるということです。その中心人物がメシヤたる私たちなのです。

ですから、氏族を伝道することはもちろん、氏族の問題点などを見聞きする中で、地獄の中で苦しんでいる氏族を以下に神様の主管圏に復帰するのかと、この世的な努力ではなく原理的な努力を尽くすということが必要になっているのだと思います。

真の御父母様は人類のメシヤとして降臨されました。その目的は、神様の救いの摂理の完成です。その全体摂理は今も急がれています。ですが、個人においても、氏族を救済することは急がれていることを忘れないようにしたいものです。

## 【御言】

### 第1節 十字架による救いの摂理

メシヤとして降臨されたイエス様の目的

・イエス様がメシヤとして降臨された目的は、墮落人間を完全に救い、地上天国を実現なさるところにありました。

① イエス様を信じ、完成した人間は、神様と一体となり、その心情を体恤することによって、神性をもつようになり、神様と一体不可分の生活をするようになります。

② 原罪がないので、再び贖罪する必要がなく、したがって、救い主が不必要であり、祈禱や、信仰の生活も、必要ではありません。

③ 原罪のない善の子孫を生み殖やすようになり、その子孫も贖罪のための救い主は必要がありません。

## 【感想】

イエス様が誕生された目的とは。それを皆様は考えられたことがありますか。偉大な聖人として世界に知られているイエス様ですが、その方がどのような使命を神様から託されていたのかということは意外と知られていないものなのです。そこで、イエス様がメシヤとして降臨された目的がここで紹介されています。

まず、人々を神様と一体不可分の関係を復帰させ、神性を帯びた生活を営めるようにするということなのです。ですが、私たちの生活を振り返ると墮落性を発見することが多々あり、そのような中からサタンを分立して、神性を発揮するように実践するのが信仰生活でもあると思います。

そして、メシヤの使命は人類の原罪を清算するという大きなものがあるのです。それであるがゆえに、御父母様はギネスの記録になるような結婚式を世界的に挙行され、原罪を一人でも多く清算できるように尽力されているということではないかと思います。

いったん原罪が清算されると、それはもう遺伝はされません。ですので、祝福を受けた家庭からは原罪のない子女が誕生しますので、メシヤを必要としない善なる子女が生み増えるようになるということです。

私たちの伝道の基本もここに 있습니다。一人でも多く原罪を清算してあげて、罪の世界から救ってあげるのが本筋なのです。イエス様の使命がそうなので、再臨される再臨主ももちろん同じ使命を持っておられるということだと思います。

## 【御言】

十字架の贖罪により救いの摂理は完成されただろうか

・十字架の贖罪により、すべての信徒たちが創造本性を復帰し、地上天国を成就できるようになったのでしょうか。

① 人類歴史以来、いかに信仰の篤い信徒であっても、神様と一体不可分の生活をした人は一人もいません。

② 贖罪が必要でなく、祈禱や信仰生活をしなくてもよいような信徒は一人もいません。

③ いくら信仰の篤い父母であっても、子女に原罪を遺伝させています。

・それは、十字架による贖罪が、原罪を完全に清算することができず、したがって、創造本性を完全に復帰することができないという事実を、物語っています。

### 【感想】

クリスチャンの方々は十字架によってすべての救いは完結したと信じています。そのような信仰観に対して真の御父母様はその十字架の救いが完全ではないということを明言されます。その根拠がここで述べられているのです。ここでは3つ挙げられています。

まず神様と一体不可分の生活をしたクリスチャンはいないということ。次に、クリスチャンは常に祈り、信仰生活をしなければならないということ。そして、どんなに信仰の深いクリスチャンでも原罪のない子女を生むことができず、生まれてきた子女は贖罪を必要とすること。

そのようなことを見られたとき、イエス様の十字架の救いは完全ではなかったと言うことを語られたのです。

これにはクリスチャンの方は反発されるのではと思います。自分は救われたと信じていたのに、それが救われているわけではないと言うのですから、これを受け入れるのは簡単なことではないのではと私も思います。

そのような背景があるとき、クリスチャンよりはむしろ道ばたの異邦人の方が先に救われると言うようなことも起こるのではないのでしょうか。

ここで語られる内容はクリスチャンにとってとても重要な内容であると同時に、これを受け入れると言うことは自らの救いを否定することにもなるので、簡単なことではないと言うことだと思います。

ですが原理は明確に語ります。十字架による贖罪が原罪を完全に清算することはないという言うことを。皆様はいかがですか。信じている宗教において自らは救われていると思いますか。ですが、この道以外に原罪を清算することはできません。そしてこの道が創造本性を完全に復帰できる道なのです。

### 【御言】

十字架の犠牲は無為に帰したのであろうか？

・十字架の犠牲がなかったなら、今日のキリスト教の歴史はあり得ませんでした。

・我々の信仰生活の体験から見ても、十字架の贖罪の恩賜がいかに大きいかということは否定できません。

・そこで、十字架による贖罪の限界は、どの程度であるかという問題を解決するために、まず、イエス・キリストの十字架の死に対する問題が明確に分からなければなりません。

### 【感想】

先日の内容では、イエス様の十字架の救いが完全でないと言うことを紹介しました。では、イエス様の十字架の犠牲は無意味だったのでしょうか。原理は決してそんなことはないと説明します。

イエス様の十字架の犠牲がなければ、今日のキリスト教の歴史は無かったし、キリスト教徒が中心民族となることもなかったでしょう。それに、クリスチャンの信仰生活において、十字架の贖罪の恩恵がいかに大きいかということも明白だと言うのです。そのような多大な貢献をイエス様の十字架の贖罪はしてきたと私たちも認めています。決して、十字架の贖罪が無意味だなどとは原理は説いていません。

ですが、先日の内容にもあるように、十字架の贖罪が完全な贖罪ではないことも事実です。ですので、完全か無意味かというデジタル的な判断はできません。その中間的なところで救いは止まっているというのです。では、十字架の贖罪はどの程度の贖罪なのかということこれから見て行きます。

そのようなことを議論するためには、まずイエス様の十字架の死とはどういうものなのかということを確認しなければなりません。

あるクリスチャンは、私たちがイエス様の十字架の解釈を変えたと批判することもあります。です

が、ここで皆さんは単なる情報としての原理ではなく、神霊によって感じ取って欲しいのです。御父母様もよく祈ってみてから判断してくださいと講演されていました。クリスチャンにおいても今の自分の現状を素直に見つめ、神様にこの原理は正しいのですかと真摯に祈ることが必要なことをここでも紹介しています。

私はキリスト教の信仰を持っていなかった人間です。それであるがゆえに、十字架の贖罪を受けることなく、いきなり完全な救いを受けてしまった異邦人でもあります。ですので、クリスチャンの苦悩というものをよく知らないという点は本当に申し訳なく思うこともあります。日本ではキリスト教が定着していない文化背景があります。そのような方には、ここでの説明は必要ないと思われるかもしれませんが、私たちがクリスチャンの方々を導く上においては必要になると私は思います。皆様の対象者にクリスチャンがおられましたら、この部分もしっかりと学ばれることをお勧めします。

## 【御言】

イエス様の十字架の死

・イエス様の十字架の死が神様の予定であったのでしょうか。

① 聖書にあらわれた使徒たちの言行をみると、イエス様の死を恨めしく思い、悲憤慷慨したとあります(使徒行伝 7:51～53)。

② 神様の摂理から見ると、イスラエル選民を召し、メシヤを迎える準備をさせられました。

③ イエス様自身も、ユダヤ人に対して、自分をメシヤとして信ずることができるように語り、行動されたという事実を、聖書を通して知ることができます(ヨハネ 6:29、マタイ 23:37、ヨハネ 10:38)。

・このような内容から見て、イエス様の十字架の死は、神様の予定から起こった必然的なことではなく、ユダヤ人たちの無知と不信の結果に起因したものであることを知ることができます。

## 【感想】

クリスチャンの方々はイエス様が十字架にかかれるために来られたと信じています。イエス様の十字架は神様の予定であって、その十字架を通して神様は人類を救済されたと信じています。ところが原理はこのクリスチャンの信仰に疑問符を投げかけます。

まず聖書には、使徒たちがイエス様の死を恨めしく思い、悲憤慷慨したとあります。イエス様の死が神様の予定ならば、人間的な悲しみはあるとしても、神様の予定が成就されたので喜ばしいことなのではないでしょうか。ですが、実はそうではないというのです。

そして、摂理歴史を見てみると、神様はイスラエル選民を召命され、メシヤを受け入れる準備をされたという事実です。メシヤを殺す準備ではなく、受け入れて繁栄するための準備をされていたのは明確だということです。

さらに、イエス様自身も最初から死ぬことを決意されていたのではなく、ユダヤの民が自分をメシヤとして信じるように行動されたという記録。

このような内容から見ると、イエス様の死は神様の予定ではなかったというのです。イエス様の十字架の死はユダヤ民族の無知と不信の結果だということです。

もしイエス様の十字架の死が神様の予定ならば、それを助けたユダヤ民族は神様によってたたえられるべきかもしれませんが。ですが、歴史はユダヤ民族が国を失い悲惨な民族史を刻むことを記録しています。それが何故なのかというのです。

クリスチャンの方はイエス様が十字架にかかるために来られたと信じています。そのような人に実はそうではないと話しても簡単に受け入れることはできないでしょう。ですが、どちらが筋が通るのでしょうか。私は原理の方がとても自然な解釈だと思います。

神様の悲しみが一刻も早く消えることを神様も願われるとしたら、イエス様が再臨される摂理を考えることはされないで、イエス様の時代に完結されることを神様も考えられるのではないのでしょうか。現に摂理はそうだったというのです。ですが、ユダヤ民族の無知故に摂理は完結することができず、神様は予定を変更せざるを得なかったというのです。

私はイエス様が十字架で亡くなられることを通して自らの罪をあがなってくださったという信仰を持っていませんでした。そのような異邦人を神様は呼ばれたのです。

イエス様の十字架は御父母様においても同様だと思います。もし、私たち信徒がしっかりと責任を果たしていれば、御父母様を信じ、あまりにも無知でなければ、御父母様を十字架にかけることはなかったのです。決して、御父母様は心情の十字架を背負われるために来られたとはいえないのです。そのことがここでも明確にされています。

### 【御言】

十字架の贖罪による救いの限界とイエス様再臨の目的

- ・ユダヤ人たちがイエス様を信じないで、肉身はサタンの侵入を受け、殺害されたので、信徒の肉体的救いを完成することができなくなりました。
- ・しかし、十字架の贖罪で、復活の勝利的な基台を造成することにより、霊的救いの基台を完成され、霊的救いの恵沢だけを受けるようになります。
- ・したがって、イエス様は霊肉ともに救いの摂理の目的を完遂なさるために、地上に再臨されなければなりません。

### 【感想】

イエス様は何もされずに霊界に行かれたのではありません。ここで紹介するように、霊人体の救い、霊的救いを完成されて霊界に行かれたのです。ですから、クリスチャンとして信仰を持ち、洗礼を受けることはこの霊的救いの恩恵を受けるということで、本当に大きな意義があると原理も紹介しています。

ですが、人間は霊人体だけで創造されているのではありません。人間には肉体という肉身を持って生活する地上生活があるのです。この肉身の救いを完成することができなかったというのです。ですので、真の御父母様は人間を霊的に救うのみならず、肉的にも救われるために、霊肉の救いの摂理を展開されているのです。

私の場合、この霊肉の救いをいっぺんに受けたことになります。ややもすると、キリスト教の素地のないことを悔い改め、聖書を一生懸命勉強したこともあります。ですが、私たちが既成のキリスト教会と同じことをしては、肉的な救いをなすことができないということに気づきました。

そのような意味において、統一原理は死後の世界における救済のみを扱うのではなく、現実の地上生活を改善することも明確に進めています。

今進められている摂理は地上天国の建設にあります。決して死後の世界における天国の実現だけを扱うのではありません。

ここにイエス様の十字架による贖罪が霊的にとどまるという限界を原理は紹介します。キリスト教が何も救えないとは決して言っていません。霊的な救いは明確に紹介しているのです。その上で、霊肉共の救いのためにクリスチャンも祝福を受けるべきであると、今の摂理は展開されているのだと私は思います。

### 【御言】

十字架に対する預言の両面

- ・イザヤ書 53 章にイエス様が、十字架の苦難を受けることが預言されています。しかし、イザヤ書 9 章、11 章、60 章には、イエス様がユダヤ人の王となり、王国を地上に建設されることが預言されています。それでは、なぜ、預言が両面をもってなされているのでしょうか。
- ・人間の責任分担の遂行いかんによっては、いずれの結果をももたらすようになるので、神様はみ旨成就に対する預言を両面性をもってなされたのです。

### 【感想】

聖書のイザヤ書にはイエス様が十字架で苦難を受けられることが預言されていました。クリスチャ



ンの方々はこの聖句のみを引用してイエス様は十字架にかかれるために来られたと解釈しています。

ところが他の箇所には、イエス様がユダヤ人の王となり、王国を地上に建設されるとという預言もあるのです。

なぜ、このような相矛盾するような預言が聖書には記載されていたのでしょうか。これは、今もってクリスチャンでは謎とされており、聖書の一部だけを信じるという態度を崩していない現状でもあるのです。

原理はその点を明確に解明しています。神様の摂理は絶対的です。ですが、その摂理の成就是人間の責任分担の遂行いかんにかかっているということを後に予定論でも学びます。そのような人間に、神様はどのような摂理をされるのかということを示すには、人間が責任を全うした場合と、人間が責任を全うできなかった場合とに分けて示すしかなかったというのです。

これは聖書に限りません。御父母様の御言も私たちが責任を全うした時の希望的な御言と責任を果たし得ずして悲惨なことになるという警告的な御言があるというのです。

予定論を学ばれるとよく分かりますが、神様の摂理とは神様の尽力だけでは進まないようになっています。それに呼応した人間の責任分担遂行が大きく影響するのです。ですが、神様は人間に対してどのように摂理されるのかを示さずには摂理を進められないと語られていますので、その結果、必然的に二通りの預言が生じるということなのです。

ですので、今の時代、いかに責任を果たすのかということが問われているのです。責任を果たすことができたらどうなるのかということは十分に真のお父様が語られたというのです。

皆様はどちらの預言が成就することを願われますか。心ある食口は責任が全うされる預言が成就されるように日々尽力しているということだと思います。

## 【御言】

### 第2節 エリヤの再臨と洗礼ヨハネ

- ・マラキ4章5節～6節に、イエス様より900年も前に昇天した預言者エリヤ(列王下2:11)が再臨することを預言しました。
- ・洗礼ヨハネが、正に再臨したエリヤであるというイエス様の証言(マタイ11:14)がありました。
- ・ところが、洗礼ヨハネ自身は、自分がエリヤではないと否定したのです(ヨハネ1:21)。

## 【感想】

マラキ書にはイエス様が降臨される前に預言者エリヤが再臨されると記されていました。このことが、当時のユダヤ民族を大きく当惑させたのです。いきなりイエス様が登場したので、その前に来るはずのエリヤはどうなったのかというのです。そのことに関して、イエス様は洗礼ヨハネこそがエリヤの再臨であると語られます。ここで、洗礼ヨハネがそうでしたかと受け入れれば、ユダヤの民衆はイエス様の前にエリヤである洗礼ヨハネが降臨したので、すべてが問題なかったはずなのです。

ところが、その洗礼ヨハネが自分はエリヤではないとイエス様の言葉を否定してしまったのです。なぜ、エリヤはそのようなことをしてしまったのでしょうか。その詳しい内容は教会でも聞かれると思いますが、イエス様がいつかの大工の息子と言われているのに対して、自分は周りから自分こそメシヤではないかと言われるほどに人望を集めていたという状況もあるといえます。

これが、まさにイエス様が越えられたサタンからの第三試練なのです。私たちは自分のことがかわいいため、ある意味自己防衛本能と正当化することもあります。が、「あなたは統一教会の人ですか」と聞かれて、すぐに「はいそうです」と答えられない人も多いというのです。その尋ねている人に対して聞かれた人はまさしく御父母様を紹介する洗礼ヨハネの立場にいると思うのですが、「私は御父母様を知らない」と言ってしまうのと同じなのです。

御言を聞いて、御父母様の愛情を受けて、そのような私たちの御父母様を紹介する洗礼ヨハネとなるべきなのですが、自分は洗礼ヨハネではないと普段は御父母様とは関係のない生活をして

しまう。洗礼ヨハネの失敗は彼の個人的な失敗にとどまらず、私たちにおいても往々にして気をつけなければならない注意事項でもあると私は思っています。

### 【御言】

洗礼ヨハネの不信

- ・当時の全ユダヤ人たちが、洗礼ヨハネを崇敬する心は、彼をメシヤであると信じさせるまでに至っていました(ルカ3:15)。
- ・したがって、洗礼ヨハネが、自分がエリヤであると宣布したならば、全ユダヤ人たちは、その証言を信じるようになり、イエス様の前に出たに相違ありません。
- ・しかし、最後まで自分はエリヤではないと主張した洗礼ヨハネの、神様の摂理に対する無知は、ユダヤ人たちがイエス様の前に出る道をふさいでしまう主要な原因となったのです。
- ・これによって、イエス様が十字架の死を遂げるようになった大きな要因が、洗礼ヨハネにあったことが分かります。

### 【感想】

当時のユダヤ人は本当に洗礼ヨハネを彼こそはメシヤではないかと信じるほどに崇敬していたのです。今の時代においてはバチカンにおける教皇のようなお方かもしれません。そのようなお方が、イエス様が降臨されるときに、自分はイエス様の足を洗うのももったいないと一時は証言しておきながら、どうしてイエス様に従うことができなかったのでしょうか。

ここでも紹介したように洗礼ヨハネが自分はイエス様の言われるようにエリヤであると宣布すれば、彼に従うユダヤの人々はイエス様の前に出ることができたのです。ですが、洗礼ヨハネは最後まで自分はエリヤではないと主張したのです。このような洗礼ヨハネの神様の摂理に対する無知はユダヤ人がイエス様の前に出る道をふさいでしまったのです。

同じようなことが御父母様の時にも起こっています。御父母様の御言を受け、この御言は間違いないと確信しても、自分に従う人が皆御父母様に流れてしまうという愛の減少感から逃れることができず、御父母様を排斥し、御父母様を苦難の道に追いやってしまった指導者が大勢います。

この教訓は従う人を大勢抱えた長と呼ばれる人に本当に当てはまります。御父母様の説かれた原理を活用して、以前にも増して人望を部下から得たとしたとき、原理を説かれた御父母様の素晴らしさを紹介することなく、自分の実力だと自分を偽るようなことがあるのです。

私は真の御父母様の指導を受けて、真の御父母様に従ったまでです。そう語れることのできる信仰者が本当の意味で人の上に立つべきだと感じることもあります。私も御父母様に愛されて、その御旨に従っているにすぎないのです。

### 【御言】

洗礼ヨハネがエリヤになった理由

- ・ルカ福音書1章17節に記録されているとおり、エリヤが地上で、果たせなかった使命を継承完成するために、洗礼ヨハネが来ました。
- ・それゆえに、彼は使命的な立場から見て、エリヤの再臨者となります。

### 【感想】

ある摂理的に立てられた中心人物が使命を果たすことができずに他界したとき、その使命そのものは神様の予定として残っています。つまり、神様の予定は絶対的なので、担当する人間が相対的に代わりながら摂理は進められるということになります。

ここでは、エリヤが使命を完成することができなかったということが問題となり、そのエリヤは再臨されることになります。その再臨したエリヤが洗礼ヨハネだったのです。

つまり、人間において誰が再臨しているのかという判断は、その人が担っている使命を見れば良いということになります。

ですので、皆様も今どのような使命を担っているのかということを良く理解できれば、自分は単に個人的にこの道を歩んでいるのではなく、誰かの使命を再臨して歩んでいるということに気づくのです。それが氏族のご先祖様の果たせなかった使命だったり、国家や地域の果たせなかった使命だったりするのです。ですので、この道に来ている人において個人的に歩んでいるという人はまずいません。

そのような意味で、自分が担っている使命を果たすことなく霊界に行ってしまった霊人の協力を自分は必然的に受けるのだという確信を持って良いと私は思っています。

真の御父母様はイエス様が果たし得なかった使命を完成されるために再臨されました。天の摂理を見るとき、自分の置かれている立場、責任分担というのは、完成されていなければ、過去において同じ道を歩んだ兄弟姉妹もいることが多いです。その兄弟姉妹が他界しているとしたら、私たちはその兄弟姉妹の使命を継承して、再臨協助を受ける立場に立つのです。

ですから、家系図を見ることはとても大切なのです。それは、誰が自分を協助し、自分は誰の再臨者なのかということを知る上において必須だからです。皆様はいかがですか。自分は誰の再臨者かご存じですか。

### 【御言】

聖書に対する我々の態度

- ・イエス様以後今日に至るまで、このような天的な秘密を明らかにした人は一人もいませんでした。
- ・これは、洗礼ヨハネを無条件に偉大な預言者であると断定した立場からのみ聖書を見てきたからです。
- ・我々は、因習的な信仰観念と、かたくなな信仰態度を、断固として捨てなければなりません。

### 【感想】

これまでクリスチャンの方々は洗礼ヨハネを修道生活を通じて、多くの人にバプテスマを授けた偉大な預言者であると信じてきました。そのような教えをキリスト教では受けると思います。

そのような教えに反して、御父母様はまったく別の側面の洗礼ヨハネを紹介されています。すなわちイエス様を不信した摂理に対して無知だった洗礼ヨハネです。これは私たちの先入観というものがかたくなに難しいものであるのかということをお話していると思います。

聖書を読むとき洗礼ヨハネが偉大な預言者だという先入観で読むと、そのような聖句しか頭に入らないということを私たちは経験してと思っています。ですが、だとしたら、なぜイエス様は洗礼ヨハネのことを天国で最も小さき者と表現されたのでしょうか。その理由を先入観があると考えないで乗り越えてしまうというのです。

ですが、真のお父様は霊界に行かれて、イエス様や洗礼ヨハネにも会われて、この事実を確認されて、発表されているといいます。

このように私たちの先入観は習慣性によって作られています。従来のキリスト教の習慣的な信仰とは異なる教えであるが故に私たちは既成のキリスト教会からは異端として迫害されてきたのです。

ですが、私たちはその習慣性を特に気をつけなくてはいいないと学びます。昨日と同じ道理が今日通るとは限らないのです。聖書は作られた当初の人間を善導する教科書としては最適かもしれませんが、今の時代においては新しい教科書が必要になってきているのです。新しい教科書が新しいことを教えるからといって、それを間違っているということができるのでしょうか。新しい発見、新しい事実の認識があればこそ、教科書は修正され新しくなります。聖書もまたしかりだということだと思います。

幸いにしてかどうかは分かりませんが、私はキリスト教の信仰を持っていませんでしたので、洗礼ヨハネが偉大な預言者だという事実も知りませんでした。まさに白紙の上にこの御言が描かれた感じでした。ただ、従来の価値観はやはり否定されることがたくさんありました。皆様はいかがですか。

## 【御言】

### 第5章 復活論

#### 第1節 復活

- ・復活は、再び活きるという意味です。再び活きるというのは、死んだからです。
- ・そこで、復活の意義を知るためには、まず、死と生に対する聖書的な概念をはっきり知らなければなりません。

## 【感想】

私たちが復活ということを考えるとき、それは死んだ人、あるいは滅んだものが、再び元通りになるということをイメージします。つまり、死んだ人が生き返る、滅んだ文明などが元通りになるということではないでしょうか。ですが、この死に対する概念が間違っていたら、復活という意味も別のものになってしまうということなのです。

私たちは死というと普通、心臓が停止して、身体的な機能を失うことを意味すると思います。これは医学的にも常識かもしれません。

ですが、聖書にはこのような肉体的な死以外の死の概念があるということです。そのことを復活論では論じています。

ですので、私たちが信仰生活を歩むにおいても、日々復活しているのかということが問われますが、これは単に肉体が健康で、元気なことを意味するものではありません。聖書に記されたもう一つの死からあなたは戻ってきていますかということが問われているのです。

では、聖書が語るもう一つの肉体的死以外の死とは何でしょうか。それは、次回に説明します。ここでは、皆様には是非知ってもらいたいのです。人間の死とは肉体的な死だけではないということをです。これが分からないと、医学で言えば患者が病状を自覚していないということと同じで、患者の治療が難しくなるというのです。つまり、自分がなぜ救われなければならないのかということは、単に肉体的な苦痛や精神的な苦痛から解放されることだけを意味するのではないということなのです。

ぜひその点をしっかりと学ばれて、真実の意味で生きた人生を手に入れられることを祈っています。

## 【御言】

### 生と死に対する聖書的な概念

- ・ルカ福音書9章 60 節の記録を見れば、死人を葬ることは、死人に任せておくがよいと言われました。
  - ・このイエス様のみ言の中で、死と生に対して互いにその意義を異にする二つの概念があるということを知ることができます。
- ① 第一は、葬らなければならない弟子の父親のように、肉身の寿命が切れた「死」です。これに対する生は、その肉身在生理的な機能を維持している状態を意味します。
  - ② 第二は、葬式をするために、集まって活動している人たちを指摘している「死」です。この死は神様の愛の懷を離れて、サタンの主管圏内に落ちこんだことを意味します。これに対する「生」の意義は、神様の愛の主管圏内において、神様のみ言のとおり活動している状態をいいます。

## 【感想】

ここで死に対する2つの概念が紹介されています。もちろん、1つは私たちが普段に考えている死と何ら変わりはありません。生理的な機能が停止してしまった死です。ところが、もう一つ覚えておくべき死の概念があります。それは神様の愛の主管圏から離れてしまった死なのです。神様のみ言を知ることなく、神様のみ言と関係のない生活をしている人を指摘して、死んでいると表現するのです。

ですので、私たちはややもすると知らないうちに死んでいることがあるのです。神様の愛情に触れ、神様のみ言を学んでいるとしても、そのみ言の通りに活動できないとすると、私は死んでいるというのです。これは自覚症状がないこともあるので、とても気をつけないといけないことなのです。ですが、良心はそのことを感じていますので、み言と関係のない生活をしていると、苦しいと感じるようになっているのです。

原理で紹介するみ言は良心の呵責を感じることなく生活する方法を提示しています。ですので、近頃教会で見かけないねとなるとみんな必死になるのです。それが、二つの目の死を意味する内容で死んでしまうからなのです。

また、暴力的に強制的に改宗を強要することは、神様の愛の主管圏から強制的に引き離すことであり、二つ目の死の意味を適用すると殺人と同じ行為なのです。私たちはそのような罪を見過ごすことができないために、強制改宗に対しては深刻に闘っているのです。日本では憲法でも信教の自由は保障されています。その意味において強制改宗は許すことのできない犯罪行為だと私たちは見えています。

皆様はいかがでしょうか。知らないうちに自分が死んでいるということもあるのです。それであるがゆえに、私たちは常に神様の意向を知っておく必要があり、その意向を知ることのできる礼拝を生命視するという言葉があるのです。皆様は大丈夫ですか。生きていますか。二番の死の意味においてですよ。

## 【御言】

### 墮落による死

- ・では、いずれが、人間始祖の墮落によってもたらされた死なのでしょう。
- ・創造原理によれば、肉身は霊人体の衣ともいえる部分で、衣服が汚れば脱ぎ捨てるように、肉身も老衰すれば脱いで、その霊人体だけが無形世界に行って、永遠に生きるようになっています。
- ・墮落による死は、肉身の寿命が切れるという意味での死ではなく、サタンの主管圏内に落ちるという死を意味するのです。
- ・創世記2章17節に、神様がアダムとエバを創造されたのち、彼らに、善悪の果を食べる日には必ず死ぬであろうと言われました。
- ・それゆえに、善悪の果を取って食べる前は生きている立場であり、食べた後は死んだ立場なのです。

## 【感想】

アダムとエバは墮落行為の後もしっかりと肉体的に生きて子供をもうけたと聖書には記録されています。ですが、人間始祖は墮落行為において死がもたらされたというのです。これはどういう意味なのかというと、死の概念が先日の内容のように2つあるので、取り違えてはいけないというのです。墮落行為でもたらされたのは2番目の死であって、神様の愛の主管圏から離れて、サタンの主管圏に落ちてしまったことを指すのです。

このようにアダムとエバの間における愛情問題は時として、神様の主管圏から離れてしまう死の問題にも関わるので、教会では男女問題はとても厳格です。

ですので、墮落論において、自分勝手にエバの愛情を食べてしまう行為は死を意味することを私たちは心しておくべきことなのです。ですが、エバの愛情を取って食べる行為が全て死を意味するのではないのです。神様の決められた主体者と、神様の愛の主管圏で祝福を受けて家庭を出発すれば、それは墮落行為ではなく、本然の神様の願われた行為として生きているということになります。

その意味において、神様の愛の主管圏から離れてしまうということを私たちはもっと深刻に考えなければならぬと思います。ただ、自分の好き嫌いの問題ではないのです。自分の生命に関する問題であるということを、よく学んだ人は知っているのです。私たち以上に深刻になってくれている人

がいることを忘れてはならないと思います。

### 【御言】

#### 復活の意義

・復活は人間の墮落によってもたらされた死、すなわちサタンの主管圏内に落ちた立場から、復帰摂理によって神様の直接主管圏内に復帰されていく、過程的な現象を意味します。

### 【感想】

このように聖書で示されている復活とは、肉体的に生理的な機能を停止した死が再び生き返ることではありません。そうではなくて、墮落によってサタンの主管圏に落ちてしまった人間が、本然の神様の主管圏に戻ってくる現象なのです。それも、生きるというのは、生きているか死んでいるかのデジタル的なことを指すのではなく、墮落した人間が神様の主管圏に徐々に復帰されてくる過渡的な現象をすべて指すということです。

ですので、私たちの信仰生活は日々復活しているのかどうかを確認する生活であり、昨日よりも今日、より神様の主管圏に近づいたとしたら復活したと表現するのです。何か肉体的に気分が良いか、気持ちが良いという意味ではありません。

ですから、私たちが御旨を知ることなく、摂理に同参することができなければ、復活することもできないのです。また、祝福を受けて、サタンの血統から神様の血統に転換されることは、まさに復活の摂理と言えるのです。

私たちは、日々、一人でも多くの人を復活させるべく、このみ言を述べ伝え、摂理に同参できるように導いているのです。復活した人が増えるということは、社会自体が神様の願いに沿って運営されることになるということであり、社会そのものが善化されると私は思っています。そのような意味において、私たちの布教活動は公益性をもっていると思います。、

### 【御言】

#### 復活は人間にいかなる変化を起こすか

- ・善悪の果を取って食べて墮落したアダムとエバが、死んだのは事実でしたが、外形的には何ら異変も起こらず、ただ不安と恐怖を感じるようになりました。
- ・ゆえに、墮落した人間が復活するとしても、その外形上には何らの変化も起こりません。
- ・イエス様は創造目的を完成した人間として来られましたが、外形は墮落人間と比べて何の差異もありませんでした。
- ・墮落人間が復活によって、神様の主管を受けるようになれば、その心霊に変化を起こすようになり、肉身もサタンの住まいから神の宮へと、聖化されていくのです。

### 【感想】

私たちは復帰されても、また教会から離れても、外見的には何らの変化も現れません。ただ、自らが神様の宮となるのか、サタンの巣窟になるのかという違いなのです。それであるがゆえに、なかなか復帰されたことを喜びとして実感できないというようなことがあるかもしれません。また、教会から離れることをなんとも思わない人もいるのかもしれません。

ですが、それは明確に神様の主管圏にいるのかいないのかという区別はあるのです。この地上でどんなに裕福な生活をして、神様の主管圏にいるとは限らないのです。これは地上の生活に限りません。死後の霊界においても、神様の主管される霊界に行けるのかどうかということとはとても重要なことです。

アダムとエバが墮落したとき、すぐに肉体的に死んでしまったとは聖書には記録されていません。ただ、心情が神様から離れてしまい不安と恐怖を感じるようになってしまったということだけの变化でした。逆に復帰されても、肉体的な健康が得られたというようなことは、すぐには起こらないかもしれません。ですが、そこで間違えてはいけません。安楽な生活が本然の人間の生活だと誤解

すると、復帰されることに様々な期待を持ってしまうこともあるかもしれません。ですが、外見的な変化は何も起こらないというのです。

真の御父母様も外見的には普通の人間と何ら変わりはありません。それであるがゆえに人間は誤解するというのです。自分と何ら変わらないと。そして、自分と比較して、愛の減少感を感じて、誹謗や中傷も飛び交ったというのです。ですが、復活論のこの部分の内容を見ると、人間を外見だけで判断してはいけないというのが明確になります。その人がどれだけ復活しているのかということは外見では判断できない世界だというのです。

そのようなことを知るときに、私たちは常に人を自分より高くして謙遜に対する方が間違いがないというのです。道ばたの乞食でも神様の主管圏で人間観察しているかもしれないというのです。

皆さんは自分が一番良く知っていると思います。今自分は神様の宮となっているのか、サタンの家になっているのかということを。それは良心があるからです。

神様は真の御父母様の体を用いて、この被造世界を主管されようとしています。ですので、真の御父母様の主管圏内にいるということが、復活しているということなのです。どんなに善良な洗礼を受けたクリスチャンであっても、神様の主管圏にいないとすれば、それは原理的には死んでいる人なのです。皆様は大丈夫ですか？生きて信仰生活を全うされていますか。

## 【御言】

### 第2節 復活摂理

復活摂理はいかになされるか

・復活摂理は、復帰摂理なので、再創造摂理です。したがって、復活摂理は創造原理によって、摂理されます。

- ① 第一に、後世の人間たちは、それ以前の預言者や義人が築きあげた心情的な基台によって、復帰摂理の時代的な恵沢を受けるようになります。
- ② 第二に、復活摂理のためのみ言を、人間が自身の責任分担として、信じ、実践して初めてそのみ旨が成し遂げられるようになっています。
- ③ 第三には、霊人体の復活も、地上の肉身生活を通じて、初めて成就されるようになっています。
- ④ 第四に、摂理期間の秩序的な三段階を経て完成されるようになっています。

## 【感想】

ここに復活の方法というのが簡単に紹介されています。墮落論で私たちが病気になっていたことを自覚したら、次はいかに治療するのかということではないでしょうか。ここにその治療法の概略が紹介されています。

まず時代的な恩恵があるというのです。人類歴史が復帰歴史であるが故に、これまでの過去の人々が積み上げてきた苦勞や功勞が私たちを助けてくれるというのです。つまり、過去においては不治の病と診断されていた病気でも、現代医学が治療法を発見し、症状が回復するということがあるように、時代が進むことで、その時代の恩恵を受けることがあるというのです。

そして、次に重要なポイントは治療法は知っているだけでは意味がないというのです。その治療法を知って治療を実際に施さなければ、人は救われないというのです。ですので、どんなに病気に効く薬が用意されてもそれを飲まなければ薬が効果を発揮しないように、どんなに優れた治療法である御言を知ったとしても、それを実践しなければ復活はしないというのです。このような原理が明確にあるので、真の御父母様も御言を聞いて信じるだけではなくて、実践しなさいと強調されるのです。

それから、私たちが復帰されずに霊界に行ったとしたら、地上に戻ってきて、地上に肉体のある人を通じなければ自らの復活はなされないというのです。ですので、清平摂理においても地上に肉体をもっている私たちが参加しなければ、ご先祖様や関係する霊人を解放し、神様の主管圏に戻すことはできないというのです。

そして、最後に、復活摂理はきちんと三段階を踏むと言うことです。クリスチャンのように死ぬ前に洗礼を受けてイエス様を受ければ天国に行けるというものではありません。御言を知った段階から、何かの指示や命令のように御言を実践する段階から、神様からの信頼を感じれる段階を経て、三段階目には神様の愛情によって神様に侍る生活を通じて復帰される路程がすべての人類に必要なのです。そのような皆さんの成長を見守るのが教会のスタッフの方々であり、教会長様ではないかと思います。ですので、個人の責任分担で御言を実践するときもありますが、何も知らないという方には教会の門をたたかれて適切な指導を受けるのが復帰の近道だと私は思っています。

皆様は自分がどの段階なのか自覚されていますでしょうか。段階に応じて鍛錬するメニューも変わってきます。適切なメニューを提供してくれる教会の方々はあなた方の人生における優秀なコーチになってくれるのではないのでしょうか。乳幼児がステーキを食べると病気になります。それと同じことがありますので、初めのうちは我流というのは避けるようにした方が私は賢明だと思います。

### 【御言】

地上人に対する復活摂理

- ・アダムからアブラハムまでの 2000 年期間を復活基台摂理時代といいます。
- ・アブラハムのときからイエス様までの 2000 年期間は、蘇生復活摂理時代(行儀時代)といいます。肉身を脱げば、その霊人体は霊形体級の霊界に行って生きるようになります。
- ・イエス様から再臨期までの 2000 年期間は、長成復活摂理時代(信義時代)といいます。その霊人体は、生命体級の霊界である樂園に行って生きるようになります。
- ・再臨されるイエス様によって、復活摂理を完成する時代を完成復活摂理時代(侍義時代)といいます。その霊人体は、生霊体級の霊界である天上天国に行って生きるようになります。

### 【感想】

ここで紹介されているように、私たちの霊人体は霊形体から生命体となり、完成すると生霊体となって天上天国で生活をするようになるというのです。このように3段階を経て私たちは復帰されるというのが原理の救済方法なのです。ですので、段階に応じて与えられる責任分担も異なってきます。

霊形体を復帰するための行儀信仰では、教会から様々な指示や命令が来ますが、それを忠実に言うことを通じて復帰されて行きます。ただ、命令だから、指示だからと余計な感情を挟むことなく、実行に移すことで復帰されるレベルだと思います。

霊形体を形成すると次は生命体を形成するために新訳の御言を受けるようになります。教会から一方的に許されて、教会の人々から信頼される関係を築きつつ歩む時代がこのレベルになると思います。人間関係において信頼を勝ち取るということは、行儀のしっかりした土台がないとできないというのです。その信頼を得た上で、皆様は責任分担を全うする中で、様々な心情を経験して復帰されると思います。

生命体レベルを完成すると次には愛情の因縁を結ぶ準備がなされます。これが侍義の時代なのです。これは中心者が一方的に侍られることを意味しないと思います。信頼関係からさらに愛情の因縁を結ぶためにはお互いに侍り合う関係が必要になります。真の御父母様に侍り、兄弟姉妹と侍り合いながら、真の愛の因縁を結ぶ中で私たちは生霊体レベルの霊人体を完成するようになると思います。

この生霊体レベルの霊人体を完成していないと、天国に入っても自分からそこにいられなくなって、出てしまうと言うのです。

このように霊人体の復帰される中にもプロセスがあるというのです。ですので、レベルに合わせた適切な責任分担というのがあり、自分はまだ霊形体のレベルなのに生霊体レベルの侍義を求められてもできないとあきらめて、信仰の成長が止まってしまうということもあるのです。ですので、皆様も自分の霊人体のレベルにあった責任分担というものをいただいて、着実に復帰されることを私も



祈っています。

皆様も自分に問うてみてください。今、自分は指示されて動いているのか、信頼されて動いているのか、愛の因縁をもって動いているのか。御父母様との関係において、これが重要なポイントだと私は思います。

### 【御言】

霊人に対する復活摂理

霊人たちが再臨復活する理由とその方法

- ・地上において、完成されずに他界した霊人たちが復活するためには、
- ・地上に再臨して自分たちが完成されなかったその使命部分を、地上の聖徒たちに協助して、地上人たちの肉身を通して代理に成し遂げなければなりません。

### 【感想】

私たちには生まれたときから使命というものを持っています。神様に託された創造理想を実現するという使命もありますが、それ以外に、私たちのご先祖様たちが果たすことのできなかった使命を継承しているということです。ご先祖様の時代には御父母様に直接会うことができる時代に生きておられませんでした。それであるがゆえに、メシヤに侍るバトンをずっと時代と共に継承してきたということです。その最終のバトンを受け取ったのが私たちなのです。

ですので、私たちが真の御父母様に侍りながら、責任分担を与えられることは、自分の使命であると同時に過去において責任を果たすことのできなかったご先祖様の使命と一緒に持っていると言うことなのです。

それであるがゆえに、蕩滅も同時にかかってきますので、簡単な責任分担も大変な苦勞をすることがあるのです。ただ、私たちは一人で歩んでいるのではないことを常に意識するべきであると思っています。協助してくださる善霊人が大勢おられるという原理的な理由は、まさに霊人たちの果たし得なかった使命を私たちが担っているからなのです。

ということは、摂理と関係のない生活においては、善霊人が協助することはないということです。これが非原理の企業と統一産業の発展との間における決定的な違いになると思います。どんなに大きな会社だとしても、摂理とは関係がなければ、霊人は協助しないというのがここでも分かるのです。同時に、摂理を担う統一産業は、これまで使命を果たすことのできなかったことを蕩滅するために多くの霊人が協助しているのです。ですので、同じ資源を投入しても、結果が雲泥の差になるのです。なぜでしょうか。霊人という目に見えない資源を計算できないからなのです。

ですので、どんなに方法を研究しても、運営方法をまねたとしても、統一産業のような結果は出せないということです。もちろん、蕩滅もかかりますので、数字的な実績は芳しくないかもしれません。ですが、摂理を進めたという評価を数字にしていないので、一見、普通の企業に見えてしまうのです。

皆様はいかがでしょう。会社で働いた実績が天の摂理を進めることになる。そんな会社で働きたいとは思いませんか。資本主義では企業の評価は経済的な利益だけで計られます。ですが、天の摂理における貢献度というものを評価に加えると統一産業はとても優良な企業だと私は思っています。

### 【御言】

キリスト教を信じて他界した霊人たちの再臨復活

- ・旧約時代の霊形体級の霊人たちは、メシヤ降臨後に地上に再臨して、地上の聖徒たちをして、生命体級の霊人体として完成されるように協助し、同じような恵沢を受け、共に樂園に入るようになりました。これを長成再臨復活といいます。
- ・新約時代の生命体級の霊人たちは、メシヤが再臨されたのち、全部地上に再臨するようになり、地上の聖徒たちをして、生霊体級の霊人体を完成するように協助することによって、同様な恵沢を

受けて共に天国に入るようになります。これを完成再臨復活といいます。

### 【感想】

クリスチャンの方々は聖書を学び、またイエス様の教えを実践することをもって信仰生活をしておられると思います。その恩恵は、人々を霊形体級、または生命体級の霊人に霊人体を復帰できることにあると思います。それであるがゆえに、もしクリスチャンの方々が真の御父母様を受け入れていれば、完成級の生霊体級への復帰は私たちよりはるかに容易だったと思います。

ところが既成教会のキリスト教が受け入れなかったので、私のような異邦人が呼ばれ、その異邦人を霊形体から順番に復帰されて、摂理に用いられる真の御父母様のご苦勞というものがいかばかりかと思います。

ですので、クリスチャンでこの道に来られた方々は、既に生命体級まで霊人体を復帰されていることが多く、後は御父母様に侍って、侍義の信仰を全うすれば、霊人体を完成することができるという準備がされていたといえます。

ところが十字架の解釈が違ふとか、救いの定義が違ふという理由で、真の御父母様を知りつつこの道を去って行くクリスチャンの方がいるということは、天の目から見れば、神様が選民として愛して準備された人が御旨に立つことができないというもどかしさがあると思います。

私たちの教会では、聖書を引用して旧約、新約の世界を紹介することもあります。それは、霊形体以前のレベルの人々に対しては、いきなり成約の侍義の生活ができないからなのです。皆様も御父母様の御言が心に入らないと感じるようなことがありましたら、聖書の御言を読んでみることもお勧めします。成長期間においては、私たちは霊形体級から生命体級の霊界にいてもあるからです。

私たちが霊人体を完成すれば、それは私たち個人が完成するだけではなく、私たちを協助している霊人も同じ恩恵を受けるということです。それであるがゆえに、私たちは個人で歩んでいるのではなく、多くの霊人と一緒にこの道を歩んでいるのです。協助している霊人は地上に肉体をもっている人間を通じずしては完成できないので、それだけ切実なのです。皆様は協助して頂いている霊人の切実な願いを感じたことはありますか。

### 【御言】

楽園以外の霊人たちの再臨復活

- ・キリスト教以外の他宗教を信じていた霊人たちは、自分たちと同じ宗教を信じている地上人を選んで再臨し、復帰摂理の目的が成就されるように協助して、同様の恵沢を受けるようになります。
- ・良心的に生きた善良な霊人たちは、地上の善人たちに再臨協助することによって、同一の恵沢を受けるようになります。
- ・悪霊人たちの再臨復活は、その業が、結果的に神様の罰として、地上人の罪を清算させるような蕩滅条件として立てられたときに、再臨復活の恵沢を受けるようになります。

### 【感想】

日本はキリスト教ではなく、仏教や神道が主流の宗教だと思います。そのような宗教を信じて霊界に行った霊人はクリスチャンには再臨しないということです。地上で相対基準を合わせるために、同じ宗教を信じる信者に再臨して、救世主の前に導くということです。ですので、私たちの教会に集まっている人の背景はキリスト教に限定されず、仏教や神道の信仰を持っていた人も大勢いるのです。そのような宗教における再臨主、仏教でいえば弥勒菩薩のように御父母様は証されており、その信じる宗教から導かれるということです。

また宗教を信じなくても、この地上で善良に生きて霊界に行った霊人は、この地上の善人に再臨します。人の良い人が道ばたで声をかけられて、この道に来ているということもあります。

地上で悪行を重ねて地獄に行った霊人はやはり地上に再臨するときも悪人に再臨します。その悪人を私たちは避けるのではなく、その業が自分の罪を清算する蕩滅条件を立たせてくれている

と甘受すると、悪人の背後の悪霊人は分別されて行くというのです。ですが、悪霊人に関しては、あまりにも再臨した地上人の悪行がひどいために、真の御父母様は清平摂理を展開されて、その悪霊人を分立されて、絶対善霊に生み変えるという摂理も進められているのです。

ですので、悪霊人の影響で地上の摂理が進まなくなっているような場合には、ぜひ清平の摂理に同参して、悪霊を分立されることをお勧めします。

このようにキリスト教を信じていなくても、すべての人が地上に再臨して再臨復活の恵沢を受けようとしているのです。ですので、この道に個人的に来ている人はいないといっても過言ではありません。皆、それぞれのご先祖様や背景を背負って連れてきているというのです。皆様も一人ではありません。再臨復活したいという霊人と一緒にこの道を歩んでいるのです。

## 【御言】

### 第3節 再臨復活による宗教統一

- ・キリスト教で待ち望んでいる再臨のイエス様は、他の宗教で再臨すると信じられている中心人物でもあります。
- ・ゆえに他の宗教の霊人たちも、霊的な位置に従って、その時機は異なりますが、地上にいたとき信じていた宗教と同じ宗教をもつ地上の信徒たちを、再臨されたイエス様の前に導いて、彼を信じ侍らせることによって、み旨を完成するように、協助せざるを得なくなります。
- ・すべての宗教は、キリスト教を中心として統一されるようになります。

## 【感想】

キリスト教の待ち望んでいた再臨主が真の御父母様です。ですが、御父母様はキリスト教の再臨主というだけではありません。仏教では来臨を待ち望まれている弥勒様であり、その他の宗教でも、再臨すると言われている中心人物でもあるのです。ですので、私たちの運動にはあらゆる宗教が集っているのです。

キリスト教以外、つまりは仏教や神道などの信仰を持っていた、日本の霊界にいる方々は、地上にいたとき信じていた宗教を信じている地上の信徒に再臨して、御父母様の前に導くようになります。そして、御父母様に出会い、摂理に同参するようになるというのです。

このようにすべての宗教は御父母様の前に導かれるということで、キリスト教が中心になると言っているのです。これはキリスト教が御父母様を受け入れていればという話だと思います。御父母様に反対している既成のキリスト教が宗教を統一することはありません。

今も全世界で統一運動は宗教の壁を越えて摂理が展開されています。御父母様は再臨主と言われるが故にクリスチャンにだけ待ち望まれていたと勘違いされる方もいるかもしれませんが、御父母様は宗教に関係なく全世界の父母なのです。つまりは、私たちの教会だけの父母ではないのです。ですので、私たちは教会と言いますが、あらゆる宗教の方々に門戸は開かれているのです。

## 【御言】

### 再臨復活による非宗教人の統一

- ・いかなる宗教も信じないで、ただ、良心的に生活して他界した霊人たちも、再臨復活の恵沢を受けるために、彼らに許されている時機に、地上に再臨します。
- ・そして、良心的な地上人をして、再臨主を信じ侍って、そのみ旨を完成するように協助するようになります。
- ・神様の復帰摂理の究極の目的は、全人類を救うところにあります。ゆえに、神様は地獄までも完全に撤廃なさろうとするのです。
- ・結局、悠久なる時間を経過しながら、次第に創造目的を完成する方向へ統一されていくのです。

## 【感想】

前回は宗教人の統一について紹介しましたが、今回は宗教を信じていなかった人も、地上の良心的な人に再臨して、再臨主の前に出るようになります。そのように、宗教を信じない人も、皆、御父母様の前に出るように導かれるので、全人類が真の御父母様の前に統一されるようになるのです。私たちが統一教会と言われるゆえんだと思います。

そして、悠久なる時間の経過の後、摂理は創造目的を完成する方向に向かうというのです。ここでは、簡単に述べられていますが、ここに歴史の方向性が明確に示されているのです。共産主義は唯物史観により世界は最終的に共産主義世界になると述べていますが、統一原理はここで簡単に述べられていますが、歴史は創造目的を完成した世界に向かっていてと明言し、人類歴史は神様の創造理想が実現された世界になるとはっきりと断言しているのです。

その過程において地獄をも撤廃する摂理も展開されるので、地獄の釜のふたが開けられるようなことも起こるのです。そのようなときに、悪霊人の整理の方法をしっかりと熟知しておかなければ、悪霊人が地上の悪人に再臨して、地上が地獄化することもあるのです。

そのような摂理があるために、地獄は徐々に解放されてきており、霊界も整理が始まっているのです。そして、最終的に歴史は全人類を救うまでに至るということで、歴史はその方向に向かって進んでいるというのです。

ここでの内容は復活論ではありますが、統一思想の歴史論の重要なポイントが簡単に説明されているのです。原理は、歴史は創造理想を実現する方向に流れていると明言しているのです。これが分かると、世界情勢や歴史の流れを掴むことができるのです。

全人類が御父母様の前に導かれるのです。歴史はその方向に流れているというのです。その流れに乗って、私たちは伝道を推進しているというのです。したがって、伝道すると運勢が来ると同時に、時代の流れに乗れるようになっていきます。歴史がその方向に流れているからだとは思っています。

## 【御言】

### 第6章 予定論

- ・予定説に対する神学的論争は、信徒たちの信仰生活に混乱を引き起こしてきました。
- ・聖書には、すべてが神様の予定(肯定)によってなされると解釈できる聖句があります。
- ・しかし、このような予定説を否定する聖書的な根拠も多くあります。
- ・それならば、このような問題が、原理によっていかに解決できるのでしょうか。

## 【感想】

皆様は予定説というものを聞いたことがありますか。簡単に言うと、皆様のこれから起こる未来の出来事は既に決定されているのかいないのかという論争なのです。

そして、聖書には、これから起こることがすべて神様の予定によって既に決まっていると解釈できる部分があるというのです。と同時に、いやそうではなく、これからの未来は決まっているのではなく、私たち人間の努力で変えることができるのだという部分もあるというのです。

皆様はどちらですか。自分の運命は自分で切り開くものだとかえられているとすると、それは後者の考え方で、自分の運命もこれから起こる未来の出来事も自分の努力で変えられるという立場だと思います。

これに対して、原理はどのように解説するのかというのが予定論なのです。

人間は誕生して、成人して、そして霊界に行く。これは万人が避けられない予定です。そのように人間の人生とは何か決められたレールの上を走るようなことなのでしょう。それとも、誰と結婚するのか、どんな仕事をするのか、これは人間の人権として与えられている自由なので、私たちの意思でいかようにも変えられることであると思われませんか。

ですが、原理は神様の立てられる予定とそれを実現する人間という二面性をしっかりと見ています。つまり、神様の予定が絶対的に実現されるということが明確でなければ、歴史がどのような方

向に流れているのかなどということは論じることができないのです。未来が決定されているということは、そこに変わらぬ予定というものがあることを物語っています。

その予定から摂理は進んでいます。ですので、全人類は必ず救われると私たちは信じているのです。そして、神様の願われた摂理は必ず成就されると確信もしています。

時代の流れを読むと言うことは、ここでもあるように神様の予定を知ると言うことに通じるといえます。歴史がその方向に流れるのです。摂理は必ず成就される方向に時代も世界情勢も流れるというのです。ですので、摂理を知らなければ、皆、時代と共に消えて行くというのです。皆様には時の流れというものが見えていますか。

## 【御言】

### 第1節 み旨に対する予定

- ・人間の墮落によって、完成することができなかった創造目的をなそうとする神様のみ旨は、すなわち、復帰摂理の目的の完成をいいます。
- ・神様は唯一であり、永遠・不変であり、絶対者であられるので、そのみ旨も唯一であり、永遠・不変であり、絶対的でなければなりません。
- ・このみ旨に対する予定は絶対的です。

## 【感想】

ここでも紹介されているように、神様の摂理は絶対的なのです。つまり、必ず成就されるというのです。皆様が担っている摂理も成就されるのは必然なのです。神様の理想は必然的に実現されるというのが、この予定論からも明白なのです。

したがって、歴史は神様の創造理想世界の実現に向けて流れているというのです。時代を知る、世界情勢を知ると言いつつ、摂理を知らなければ、それは羅針盤を失った船と同じなのです。

そのような予定からすると、人類は確実に救われるというのです。では、確実に救われるというのであれば、何をやっても大丈夫だと思うのは、予定論を半分しか知らない無知の結論なのです。

ここで紹介されているのは神様側の予定なのです。ですので、神様の予定は必然的に現実化されるというのです。ですから、私たちが摂理の成就を願うとするならば、その願いは必ずかなうというのです。自分の願いが全部叶うということは、総序でもあったように幸福につながります。

もし人間が墮落しなければ、人間は神様の願いを自然と悟り、理解できるようになっており、神様の願うことを人間も願うようになるので、必然的にすべての願いが叶うようになっていたのです。

世の中には自分の願いが叶わないと諦めている人、現実には仕方がないと妥協している人があまりにも多いのです。それは、神様の願いを知らない、神様の予定を知らないが故の無知の結果なのです。私たちが神様の予定の成就を願うならば、その願いはすべて叶えられるのです。皆様はそれを信じますか。諦める必要はないのです。いえ、諦めてはいけません。神様の予定とはそのようなものなのです。

## 【御言】

### 第2節 み旨成就に対する予定

- ・復帰摂理のみ旨は、絶対的なものなので、人間は関与できませんが、そのみ旨の成就是、人間の責任分担が加担されなければなりません。
- ・み旨成就是、相対的であるので、神様がなさる95%の責任分担に、その中心人物(人間)が担当すべき5%の責任分担が加担されて、初めて、完成されるように予定されるのです。
- ・人間の責任分担5%というのは、神様の責任分担に比べて、ごく小さいものであるということを表示したものです。しかし、人間自身においては、「100%」に該当します。
- ・み旨成就に対する予定は相対的なのです。

## 【感想】

神様の御旨は絶対的です。つまり、全人類は必ず救われるというのです。そして、摂理は必ず成就されるというのです。これは変わりがありません。ただ、違ってくるのは、誰がいつ成就するのかというのは、決定されていないというのです。

皆様も責任分担を持たれていると思います。その責任分担を果たすことは絶対的なのです。ですが、その責任分担をあなたが果たすのかどうか、いつ果たすのかということは相対的で決定されていないというのです。

ですので、この原理の御言に誰がいつ出会うのかということは、決まっていないというのです。そこには人間の5%の責任分担があり、決定された時間に出会っているということはありません。

もう一つ重要なのは、摂理は人間が100%投入しないと成就できないようになっているということです。真の御父母様の御言に完全投入という御言がありますが、なぜ完全投入が必要なのかという理由も、この予定論があるということだと思います。

ですので、片手間で成就できるような摂理はありません。常に自分のすべてを投入しなければ成就できないような摂理になっているのです。これは全体だけでなく、個人においてもそうなのです。御旨を歩むにおいて、副業や片手間的に歩むのでは摂理は成就できないのです。自分を100%投入してこそ、摂理は成就されます。しかも、それを何かの力で強制するというものではありません。愛を動機として、喜びながら投入しなければ、自分の100%を投入することはできないでしょう。

皆様は御旨に対して100%を投入されていますでしょうか。それができなければ、皆様に託された摂理は成就できないのであり、成就できなければその摂理は皆様の後孫などに継承されるというのです。そのような責任を後孫に残さないために、今こそ私たちが100%を投入して歩むべき時だと私は思っています。

## 【御言】

### 第3節 人間に対する予定

- ・中心人物が自分の責任分担を全うしなければ、神様が予定されたとおりの人物となることはできません。ゆえに人間に対する予定は相対的なのです。
- ・神様の救いの摂理は、一つから始まって、全体的に広められていくので、まず、中心人物を予定して召命されます。
- ・中心人物が備えるべき条件は、①復帰摂理を担当した選民の一人として生まれなければなりません。②その中でも、善なる功績が多い祖先の子孫でなければなりません。③み旨を成就するのに必要な天稟をもつべきです。④後天的な条件がみな具備されていなければなりません。⑤天が必要とする時機と場所に適合しなければなりません。

## 【感想】

人間は責任分担を果たさなければ神様が予定された人物になることはできません。私たちがいくら祝福家庭だ皇族圏だと言っている、それは責任を果たした上でのことなのです。それであるがゆえに、真の御父母様は私たちが責任を果たすことを強調されるのです。どんなに神様が恩恵と地位を与えたとしても、責任を果たすことができなければ流れてしまうのです。それを御父母様も心配されていると思います。

そして、摂理は全人類に分散して行われるのではなく、中心民族を立てて、その勝利圏を拡散されるという流れを取ります。その中心民族がイスラエル選民だったのです。そのバトンは今、私たち教会の人々が受け取っているというのです。

では、中心民族の備えるべき条件とはどういうものなのかということが、ここで簡単に紹介されています。まず、復帰摂理を担当した選民であるということです。皆様も御父母様から使命を与えられ、摂理を担っている選民だということです。そして、そのご先祖様を見てみると、功労の多い先祖が多いというのです。その功労をすべて使っても私たちを教会に導いたという経路があるので、

私たちが教会を離れるということは、本当に導いた先祖が落胆すると言います。そして、その生まれもった性稟において、御旨に必要な性稟を備えているというのです。さらに後天的に受けた教育や育った環境などで体恤した素養が御旨に適しているということが言われ、そして、最後に導かれるには時と場所があるというのです。ですので、教会に通う皆様は今という時間において、ここという場所において、摂理に適合したので導かれているというのです。ですので、なんで自分がとか、もっと後からでも良かったのではというのは予定論をよく分かっていないからなのです。教会に導かれている皆様は今だからこそ、ここだからこそ導かれたのです。皆様の精誠が今、ここで必要なのです。

ですから、いかなる環境に置かれようと決して自分を卑下したり、自分はいなくても良いなどと思っははいけないと思います。予定論は明確に語っています。今なのです。ここなのです。今、ここにあなたが必要だから導かれたのです。その意味において、教会に集うすべての兄弟姉妹が氏族の中心人物なのです。精誠を捧げるのは今なのです。決して何年後というものではないと私は思っています。

## 【御言】

### 第4節 予定説の根拠となる聖句の解明

- ・ロマ書8章 29 節～30 節に「神はあらかじめ知っておられる者たちを……あらかじめ定め……あらかじめ定めた者たちを更に召し、召した者たちを更に義とし、義とした者たちには、更に栄光を与えて下さる」と記録されています。
- ・神様があらかじめ知っておられる人物を予定して、召命なさるのは、神様の責任分担であり、その人物は召命された立場で自分の責任を完遂するとき、初めて義とされ、栄華に浴することができます。
- ・ただ、聖句には人間の責任分担に対するみ言が省略されているために、それらが、ただ、神様の絶対的な予定だけでなされるように見えるのです。

## 【感想】

すべては神様の予定のうちになされると信じている人は多いです。私たちがこの道に来ることも既に神様は予定されていたということです。ですが、神様が定められるのは予定であって、それが実現するのかどうかということは人間の責任分担が関わってきます。

聖書を信じる人はまさにすべてが神様の予定のうちになされると信じているのです。ですが、その聖句において、人間の責任分担に関する御言が省略されているというのです。

私たちが与えられた責任分担を果たすことは神様の予定なのです。ですので、神様は私たちが責任分担を果たしたときの預言をされるのです。ですが、現実を見るときにその預言通りになっていないというのは、私たちが与えられた責任分担を果たしていないからなのです。

ですので、私たちにおいていかに与えられた責任分担を果たすのかと言うことが問題なのです。真の御父母様も私たちを信頼して責任分担を与えられますが、それを果たすことができなければ、神様の予定された摂理は成就されないのです。

これは全体的なことばかりではありません。私たちの個人、家庭における摂理においても同じなのです。私たちの家庭が真の愛に満ちた幸福な家庭になることは神様の創造理想であり予定です。ですが、そうなるためには、私たちがお互いに 100%を投入して、その理想を実現するために努力しなければならないということなのです。つまり、神様が一方的に福を与えられるということはないのです。私たちの精誠がなければ、天が与える福も受け取れないようになっています。

それであるがゆえに、精誠を捧げている人にはとても福の多い教会なのですが、何もしないで福を得ようとしても何も得られないのがこの道なのではと思います。皆様は多くの福を受けられていますか。

## 【御言】

### 第7章 キリスト論

- ・キリスト論では、神様を中心とするイエス様と聖霊との関係、イエス様と聖霊と堕落人間との関係、重生と三位一体など、キリスト論に関する諸問題を扱うことにします。
- ・今日に至るまで、このような問題が未解決であるということによって、キリスト教の教理と信仰生活に、少なからず混乱を引き起こしてきました。

## 【感想】

キリスト論はクリスチャンのために書かれた内容だとは思わないでください。再臨主として御父母様を迎えている私たちにおいても、クリスチャンと同じ誤解を御父母様に対して抱いているということもあるのです。そのような意味で、しっかりと学んでおきたい部分でもあります。

まず、キリスト教ではイエス様を神様そのものであると認識していますので、聖書で理解できない箇所がいくつも出てくるというのです。神様そのものであるなら、どうして神様に対して祈ったりする必要があるのかというような問題です。

原理はこのような問題をしっかりと解明しており、納得のできる解答を提示しているというのです。

私たちの間においてもクリスチャンのような誤解が生じ得るというのです。それは、御父母様をあたたかも神様そのものであるかのように信じてしまうとか、真のお父様は神様の体となられたのですが、神様は唯一なので、真のお母様は神様の体にはなれないなどというようなことです。

皆様はそのような誤解はされていませんか。そのような誤解を予防するためにもキリスト論はたとえ自分はクリスチャンでなかったとしてもしっかりと学んでおきたいと思います。

ただ、ある意味、蕩滅を清算する意味での同時性で、既成教会が信じていることと同じような誤解が生まれることも予想はされます。その誤解をしっかりと皆様も解かれておくことを私はお勧めします。

真のお父様は神様そのものでしょうか。いいえ、違いますと皆様はきちんと説明できますでしょうか。このようなことをしっかりと押さえておくことが信仰生活の混乱を防止すると私は思います。

## 【御言】

### 第1節 創造目的を完成した人間の価値

- ・この問題を解決するためには、創造本然の人間の価値が、いかなるものであるかをまず知らなければなりません。
- ・完成した人間は、
  - ① 第一に、神様のような価値をもつようになります(マタイ 5:48)。
  - ② 第二に、宇宙間において、唯一無二の存在です。
  - ③ 第三に、宇宙的な価値をもっています(マタイ 16:26)。

## 【感想】

ここではイエス様の価値がどのようなものであるのかということが紹介されていますけど、これは真のお父様の価値においても同じことが言えます。では、そのイエス様の価値とはどのようなものだったのでしょうか。

まずイエス様は神様のような価値を持ちます。同様に真の御父母様も私たちにとっては神様のような価値を持っています。ですが、間違えてはいけないのが神様そのものではないということなのです。ですので、私たちの教会において御父母様が神様のような価値を持っておられても決して問題でも何でもありません。

そして、イエス様は唯一無二のお方だったのです。同様に真の御父母様も唯一無二のお方です。それであるがゆえに、真の御父母様は二代目はありませんとしっかりとと言われるのです。その根拠がここにあると思います。真の御父母様は人類の前にも神様の前にも唯一無二なのです。



そしてイエス様の価値が天宙的であったように、御父母様の価値も天宙的な価値を持っておられるということです。ですから、イスカリオテのユダが銀貨でイエス様を売ってしまうということが、どれほどイエス様の価値を知っていなかったのかを明確に物語っているのです。真の御父母様をお金で買うことができますか。とんでもないということです。私たちはその価値を知らないということがあるのです。マスコミで吹聴されるようなお方ではありません。その価値は天宙的に相当します。

したがって、真の御父母様を失うということは、天地のすべてを失ってしまったかのような喪失感があるということです。真の御父母様の抜けた穴をお金でも万物でも埋めることはできません。そのことが明確にここで紹介されています。

どうでしょう。皆様の中で御父母様の価値は天宙的なものになっていますか。真の御父母様に二代目はありません。唯一無二なのです。そして、クリスチャンにおける神様のような価値をもっておられます。皆様はそうに思っていますか。

## 【御言】

### 第2節 創造目的を完成した人間とイエス様

- ・完成した人間は、神様のような神性をもつ価値的な存在であり、唯一無二の存在であり、天宙的な価値の存在です。
- ・イエス様は、正に、このような価値をもっておられる方です。イエス様がもっておられる価値がいくら大きいといっても、創造理想を完成した男性がもっている価値以上のものをもつことはできません。
- ・このようにイエス様は、あくまでも創造目的を完成した人間として来られた方です(テモテ I 2:5)。

## 【感想】

イエス様は完成された人間として来られました。ですので、人間であって神様そのものではありません。ですが、私たち堕落人間とは全く価値が異なります。イエス様は創造目的を完成された男性なのです。

では、イエス様の持っておられる価値は、神様のような価値を持っておられますが、どんなに大きいといっても創造理想を完成した男性が持っている価値より大きくなるということはないのです。

これは真のお父様においても同じです。真のお父様がどんなに偉大であったとしても、神様と一体不可分の関係にあったとしても、創造理想を完成した男性以上の価値を持っているわけではありません。

皆様にはその区別がついておられますか。神様と御父母様の違いを明確にされていますか。神様と一体化されているのだから、同じと見ても良いではないかという、それは信仰生活に混乱を来すということです。

真のお父様は創造目的を完成された男性です。真のお母様は創造目的を完成された女性です。お二人とも人間として誕生されているということです。それ以上の価値はありません。ですが、私たちからしてみると、その価値があまりにも大きいので、計り知ることもできないほどなので、神様との区別が付かないということです。これは数学の極限の話とよく似ています。無限に大きなある値と無限大とは違います。

このようなことを考える時、神様の価値が御父母様の価値以上に大きいということです。皆様において、神様の価値が御父母様の価値より下になっているようなことはありませんか。だとしたら悔い改めるべきなのです。

御父母様は創造目的を完成された人間です。神様そのものではありません。キリスト論はそれを明確に説明しています。神様のような価値を持った人間と神様は異なります。人間はどんなに立派になって神様のようにあがめられたとしても、人間なのです。それであるがゆえに、神様の前にあっては常に謙遜であるべきだと私は思います。

## 【御言】

イエス様は神様御自身であられるのだろうか

- ・ヨハネ福音書 14 章 9 節～10 節に、ピリポがイエス様に、神様を見せてくださいと言ったとき、「わたしを見た者は、父を見たのである。どうして、わたしたちに父を示してほしいと、言うのか。」という内容を見て、信仰者たちは、イエス様を創造主、神様であると信じてきました。
- ・イエス様は完成した人間として、神様と一体であられるので、彼の神性から見て神様ともいえますが、神様御自身となることはできません。
- ・体は第二の心といえますが、心それ自体ではないのと同じく、イエス様も第二の神様とはいえますが、神様御自身になることはできません。
- ・イエス様は、復活後にも霊界で、地上におられたときと同様、神様に祈祷(ロマ書 8:34)しておられるというみ言を見ても、イエス様は神様御自身ではありません。

## 【感想】

よく皆さんは真の御父母様に出会うことを、神様に出会うことだと認識されているようなことはありませんか。これも、キリスト教の誤解と同じなのです。私たちが真の御父母様に出会うということは、創造理想を完成された、神様と一体となられた人間と出会うということで、神様そのものに出会っていると錯覚してはいけないと私は思います。

もちろん、神様は御父母様の体の中に、心の位置に臨在されているので、神様は御父母様と一緒にいられているということは確かだと思いますが、御父母様が神様そのものではないことを、原理は語っています。

それであるがゆえに、私たちは御父母様を人間的に喜ばせること以上に、もっと天的に喜ばせることを考えるべきであり、御父母様と一体となられている神様を喜ばせることを重要視する必要があるのではと思います。

イエス様は神様と一体となられていました。それであるがゆえに、イエス様を見ることは神様を見ることだといっても何ら問題はないと思います。ですが、イエス様を神様そのものと誤解することは問題だということです。それと同じように真の御父母様は神様と一体となられていますので、御父母様と出会うことが神様と出会うことだと思っても問題はないかと思いますが、御父母様を神様そのものだとは思わないようにというのが、ここでのポイントだと思います。

## 【御言】

### 第3節 墮落人間とイエス様

#### 墮落した人間

- ① 創造目的を完成した人間の価値を備えていません。
- ② 天使を仰ぎ見る程度の卑しい立場に落ちてしまった。
- ③ 原罪があるので、サタンの侵入できる条件がそのまま残っています。
- ④ 神様のみ旨と心情を知ることができず、知ったとしても、部分的なものにすぎません。

#### イエス様

- ① 創造目的を完成した人間としての価値を備えておられる。
  - ② 天使をはじめ、すべての被造世界を主管する資格をもっておられた。
  - ③ 原罪がないので、サタンが侵入できる何らの条件もありません。
  - ④ 神様のみ旨と心情を完全に知っておられ、その心情を体恤した立場において生活しておられる。
- ・人間は墮落した状態にとどまっている限り、何らの価値もない存在ではありますが、真の父母としてのイエス様によって重生され、原罪を脱いで善の子女になれば、イエス様のように創造目的を完成した人間に復帰されるのです。

## 【感想】

ここで墮落した人間とイエス様との比較が紹介されています。これは、復帰される前の私たちと真の御父母様との関係でもあったのです。簡単に見てみます。

まず、その価値において天地の差があったということです。真の御父母様は創造目的を完成された神様のような価値を持っておられたのに対して、私たちは復帰されるまでは天使を仰ぎ見るような本然の価値を有していなかったということです。

これは、復帰された人と非原理の人との差にもなってきます。非原理の人は原罪が残っているために、サタンが自由に侵入できるということです。どんなに愛し合っている、非原理で結婚するとサタンが侵入するために幸福になることはできないという理由もここで紹介されています。

そして、非原理の人は神様に対して、その御旨と心情を完全に知っているわけではないのです。どんなに立派に見えても、どんなに優しく見えても、非原理の人は神様の心情を完全に知っていないということです。それに対して、真の御父母様は神様の御旨と心情を完全に知っておられるという立場なのです。

このような意味において、私たちの価値というものは復帰される前においては、何らの価値のない存在であったかもしれませんが、真の御父母様に出会い、祝福を受けて、善の子女として重生されるようになると、創造目的を完成した価値を備えるようになるということです。つまり、創造目的の完成度というものが私たちの価値となるために、創造目的を知らず御旨と関係のない生活をしていれば、その価値は復帰される前と何ら変わらないということだと思います。

では、皆様の目に天使はどのように映っていますか。素晴らしい神様の使いとして聖なる存在として見上げていますか。ですが、私たちが創造目的を完成するようになるとその天使を真の愛で主管するようになるのです。皆様がこの原理を学び、創造目的を完成するように歩むということは、神様のような価値を得ることを意味します。それを福だと私は思っています。

## 【御言】

### 第4節 重生論と三位一体論

#### 重生の使命から見たイエス様と聖霊

- ・イエス様は、ニコデモに、新たに生まれなければ、神様の国を見ることはできないと言われました(ヨハネ3:3)。では、人間はなぜ新たに生まれなければならないのでしょうか。
- ・アダムとエバが墮落して、人類の悪の父母となり、悪の子女を生み殖やしたので、墮落人間は原罪がない子女として新たに生まれ直されなければなりません。
- ・イエス様は墮落した人間を、原罪のない善の子女として新しく生み直してくださるために、真の父として来られた方であり、聖霊は真の母として来られた方です。
- ・ゆえに、マタイ福音書16章27節に、イエス様が再臨されるときにも、父の栄光のうちに来られると言われたのです。

## 【感想】

私たちもまた祝福を受けて原罪を清算しただけでは天国には入れません。ここでも紹介されているように重生しなければならないということなのです。

霊的な重生はイエス様を通じて、神様の愛が私たちに浸透することで成し遂げられると思います。ですが、神様は男性格だけではなく、女性格も備えておられるので、聖霊を迎えた父母によって生み直されるという表現になると思います。

つまり、クリスチャンは聖霊の胎中に戻るような愛の因縁を神様と結び、聖霊のイエス様を慕う心情を聖霊の胎中で相続して、再び聖霊から生まれたという条件を通じて、霊的な重生の恩恵を受けることができていたのではないのでしょうか。

天国とは真の愛を体恤した人でなければ入ることができません。ゆえに、神様の真の愛を受けて、それが自分に結実したという過程を経なければ、神様の子女になることもできず、ましてや天国に

入ることもできないということだと思います。

私たちは霊的に真のお母様の胎中に戻って、再び真のお母様から生まれたという心情圏を通過して歩んでいます。その胎中に戻る経験がないとするならば、御父母様との親子の因縁を結ぶのは難しくなると思います。

私たちは霊肉共に重生できる道を歩んでいます。私たちは復帰されるまではサタンの子として悪の血統を受けて生まれていました。それが、真のお母様の胎中で生み換えられて誕生しているのです。真のお父様の骨髄に戻る、真のお母様の胎中に戻るということは、信仰生活においてもとても重要なことだと思います。

皆様は、それだけの愛の因縁を御父母様と結ばれていますか。神様の真の愛が自分の細胞にしみ込むことを感じられたことはありますか。今はイエス様の時代の霊的重生の時代ではなく、御父母様による霊肉共の重生の時代なのです。

### 【御言】

イエス様と聖霊による霊的重生

- ・イエス様は、水と霊（聖霊）から生まれなければ、神様の国にはいることができないと言われました（ヨハネ 3:5）。
- ・聖霊は女性神であるため、慰労と感動の業をされるので（コリント I 12:3）、
- ・我々が、
- ・聖霊の感動によって、イエス様を救い主として信じるようになれば、
- ・イエス様と、聖霊による霊的な真の父母の愛を受けるようになります。そうすれば、彼を信じる信徒たちは、その愛によって新たな命が注入され、新しい霊的自我に重生されます。
- ・これを霊的重生といいます。

### 【感想】

私たちは真の御父母様から真の愛を受けて育っています。このように重生には真の御父母様の愛情を注入されるという過程を通過するのです。キリスト教におきましても、イエス様だけを信じていては、本来の新生はなされないというのです。女性神である聖霊の感動を受けなければならないというのは、イエス様を父として聖霊を母とし、その両者の愛情を注入されなければ、新生は不可能であるということを意味します。

ですので、この道に来て、真のお父様だけを受け入れるというのでは、本当の意味での救いは得られないのです。真のお母様の愛情が注入されてこそ、私たちは重生できるのです。このキリスト論が分かれば、真のお母様を否定することがいかに救いと関係のない自分になってしまうのかということにつながるということが分かります。

真の御父母様の父母の愛が注入されてこそ、私たちは重生できるのです。真のお父様だけを愛するというのであれば、それはこの重生の理論が分かっていることになりません。

私たちに新しい生命を注入するのは真の父母の愛情によってなのです。真の父の愛情によるとは原理は決して述べていません。

そのような真の御父母様の愛情が注入されて、私たちは新しい自我を生み出すようになります。ですので、復帰される前と後では、自我が異なりますので、変わったねという印象を受けることもあるのです。簡単に説明する自分のことしか考えられなかったキャラクターが人のために生きること喜びを見出すというのですから、その変化の大きさは大変なものだと思います。

ここでも明確になるのですが、真のお母様の愛情が注入されなければ、決して重生することはできないのです。私たちが重生できたのは真のお父様だけの恩恵ではないのです。真のお母様の愛情が注がれたということを忘れてはならないと思います。

### 【御言】

#### 三位一体論

- ・神様の創造目的を完成するためには、イエス様と聖霊も、神様の二性性相から実体的に分立された対象として立って、お互いに授受作用をして合性一体化することにより、神様を中心とする四位基台をつくらなければなりません。
- ・このとき、イエス様と聖霊は、神様を中心として一体となるのでありますが、これがすなわち三位一体です。

### 【感想】

創造原理からも明らかなように、イエス様の一人では神様を顕現することはできないのです。人々を生みかえるには聖霊を迎えて夫婦となり、家庭的な四位基台を形成しなければならないということなのです。

既成のキリスト教はイエス様と神様を同一視してしまうために、この四位基台が見えないのです。イエス様も霊界において聖霊という女性神を迎えて、カップルとなり、霊的に四位基台を完成されているということです。そして、三位一体の根本はこの家庭的な四位基台が完成して、神様とイエス様、神様と聖霊、イエス様と聖霊が完全に一体化されているということを意味します。

神様、イエス様、聖霊が授受作用によって完全に一体化していることを三位一体と呼びます。ですので、クリスチャンが新生するためには本来、神様とイエス様と聖霊という三対象を愛さなければならないのですが、イエス様と神様を同一視してしまうと、この関係が崩れてしまい、本来の新生も難しいものになってしまっているといえます。

ですが、キリスト教では神様とイエス様と聖霊の愛情を信徒はしっかりと受けて、新生ができてきた歴史を刻んでいます。

真の御父母様が顕現された今の時代においては、神様と真のお父様と真のお母様の愛情をしっかりと受けた食口が重生をして救われてゆく時を迎えています。

以前も言いましたが、真のお父様と真のお母様は完全に一体化されています。そして、神様と真のお母様も完全に一体化されています。真のお母様を否定することは真のお父様を否定することであり、神様を否定することなのです。

今は真のお母様が地上の摂理を主管されていますので、私たちもしっかりと従ってゆきたいと思っています。真のお母様を正しく知るといことは信仰生活においてとても重要なことだと思います。皆様はしっかりと理解されていますか。

### 【御言】

#### 霊的三位一体と実体的三位一体

- ・イエス様と聖霊とは、神様を中心とする霊的な三位一体をつくることによって、霊的眞の父母の使命を果たただけで終わりました。
- ・ゆえに、イエス様(再臨主)は神様を中心とする実体的な三位一体(眞の母)をつくり、霊肉共に眞の父母となることによって、墮落人間を霊肉共に重生させ、原罪を清算させて、実体的な三位一体をつくらせるために再臨されます。
- ・そのとき初めて、神様の三大祝福を完成した地上天国が復帰されるのです。

### 【感想】

この部分が示す内容は、真のお父様は再臨主として完全に勝利され、真のお母様と三位一体を完了されたことです。

真のお父様が聖和され、真のお母様は真のお父様と一体となられるほど愛情豊かな因縁を結ばれたので、後継者として教会を指導していると思っておられる方はいませんか。そのような方はこのキリスト論をもう一度確認してほしいと思います。

この三位一体完了ということは、真のお母様が神様と完全に一体とされていることを意味しま

す。単に愛情深く真のお父様と一体化させていただきではないのです。ですので、真のお母様の指導とは真のお父様の指導であると同時に、神様の指導でもあるのです。

ただ、ややもすると、この神様と真のお母様の一体化に視点をあわせることができずに、単に真のお父様の夫人であるからと従うのは私たちの信仰において大きな誤解を生み出します。

真のお父様が三位一体完了を宣布されたのは、そのような観点での一体化が完了したことを真のお父様が確認されたことを意味します。ですので、真のお母様が神様を代身してもなんら問題ではありません。むしろ、真のお母様の指導に従えないほうが問題なのです。

皆様にはしっかりと見えていますか。真のお母様と一体となられている神様を。単なる真のお父様の夫人という存在ではないのです。真のお父様が神様の愛する一人息子ならば、真のお母様は神様の愛する一人娘なのです。この人類歴史において地上に初めて顕現された神様の一人娘が真のお母様なのです。その価値が皆様には見えておられるでしょうか。